

華生包探案」¹⁾の条下にその儘利用されてゐるから、気付いてゐる人も少くはあるまい。

又、寅半生（鐘駿文）は、『小説閒評』巻一に、『^{偵探}四名家』（光緒二十九年〔1903〕年、文明書局刊）を評して、

此「福爾摩斯包探案」也。華生筆記、多至七十余案。其首先訳出而為小説家所歡迎者、始於『時務報』、曾經彙印成冊、名曰『包探案』。而商務印書館『繡像小説』中『続包探案』繼之。然皆集録之体、自成篇段。……

と言つてゐる。²⁾文中の『包探案』は、光緒二十五年、素隱書屋から上梓された『新訳包探案』を指す。而して、『続包探案』と記すのが、既述の『補訳華生包探案』で、書名の相違は、記憶違ひに基くものであらう。その口吻に、件の序文と一脈相通するものがあるから、寅半生もこれを読んでゐたかと想像されるが、今は暫く問はない。又、素隱書屋は、同じ年の夏、冷紅生（林琴南）・王寿昌合訳の『茶花女遺事』を上梓した書肆であるが、後年、林琴南が「当年汪穰卿舎人為余刊『茶花女遺事』即入『華生包探案』、風行一時云々」（『歇洛克奇案開場』序）と言つてゐるのを見ると、汪康年の弟汪詒年が経営してゐた書肆ででもあらうか。『茶花女遺事』の初印本には、扉裏に「己亥夏素隱書屋託昌言報館代印」とある。前年の政変によつて、『昌言報』（汪康年主持）は停刊となつてゐたけれど、この種の印刷は、猶繼けてゐたらしい。光緒辛丑〔1901〕年刊の玉情瑤怨館本が、汪康年の家刻本であることも、右の推測を裏書きする。

とまれ、これらの記述に従へば、『時務報』に掲げられた「歇洛克唔斯筆記」が、中国に紹介された西洋種の探偵小説の嚆矢であるといふ説は、はやくから一般に信ぜられてゐたものらしい。謂ふところの「歇洛克唔斯筆記」とは、コナン・ドイル（Arthur Conan Doyle. 1859-1930）のシャーロック・ホームズもので、原作名を併せて表示すれば、次の如くである。

(華 訳 名)	(掲 載 号)	(掲 載 年 月 日)	2)
英包探勘盜密約案	第六冊～九冊	自光緒二十二年〔1896〕八月 至 同 九月二十一日	
The Naval Treaty. (<i>The Memoirs of Sherlock Holmes</i> . 1894)			

1) 阿英編『晚清文学叢鈔』・「小説戯曲研究卷」所収。
2) 同上。

記僞者復讎事 第十冊～十二冊 自光緒二十二年十月一日
至 同 十月二十一日

The Crooked Man. (Ibid.)

繼父誑女破案 第二十四冊～二十六冊 自光緒二十三年〔1897〕年三月二十一日
至 同 四月十一日

The Adventure of a Case of Identity. (*The Adventures of Sherlock Holmes*. 1892)

呵爾唔斯緝案被戕 第二十七冊～三十冊 自光緒二十三年四月二十一日
至 同 五月二十一日

The Final Problem. (*The Memoirs of Sherlock Holmes*.)

訳者は、同報の英文翻訳担当の記者であつた張坤徳（字、小塘）であると、周新庵は言ふ（後述）が、素隱書屋刊本には、「時務報館訳。丁楊杜訳」と併記してある趣きに、阿英氏は記してゐる。何れが是か、或いは個々別々の訳出になるものか、詳細は審らかではない。訳文は、

英包探勘盜密約案 訳歇洛克呵爾唔斯筆記

英有攀息名翻爾白斯姓者、為守旧党魁爵臣呵爾黑斯特之甥、幼時嘗与医生滑震同学、年相若、而班加於滑震二等、衆以其世家子文弱、頗欺之。蹴球則故擲球其身以為樂。然性敏慧、館中課試輒高列、得獎賞最多。後学成、入大書院、已而仕外部、以有才又得舅之援、故每得差遣。後其舅為外部大臣、又与升轉。部中有要事、無不与聞。一日呵密召攀息至其室、以灰色紙一捲授之。曰、此英意密約、俄法使臣、欲以重金購之。外間報館、已有知者、不可再洩、故特命汝書、汝宜鎖諸書桌屜内、迨晚我当遣各人去、汝速書竟、仍藏諸屜、明早我至部、呈我可也。攀息謹受教。……

といつた調子のもので、梗概をあらあらと綴るばかり、時に大きな改変がある。例文の個所について言へば、原文冒頭の

The July which immediately succeeded my marriage was made memorable by three cases of interest in which I had the privilege of being associated with Sherlock Holmes, and of studying his methods. ……

以下の一節は省略されてゐるし、パーシ・フェルプスからワトソンに充てた手紙以下、数頁の文章は後に廻され、フェルプスがホームズに事件の経過を話す条りに織込まれてゐる。その為、筋が平明となり、探偵小説としての面白さは

失はれ、原作者独特の話術の巧みさも、印象が薄れたものとなつてしまつた。しかし、作者が設けたトリックなり、「ホームズの分析的探偵法の真価」(The value of his analytical methods.) を発揮する条りには、大意訳ながら、素直に翻訳されたから、作品の面白さは或程度伝へられる訣で、旧小説に目馴れた時人の眼には、やはり新鮮なものに映つたであらう。『施公案』八卷九十七回の上梓(道光十八[1838]年)は少しく溯るから暫く措くも、貪夢道人の『彭公案』二十四卷百回の上梓が光緒十七[1891]年、某の『後施公案』百回が光緒二十[1894]年刊といった文壇の水準を、十分認識して置く必要がある。

少しく立場を変へ、西欧文学の中国への流入といつた観点から眺めて見ても、既に『昕夕閒談』(同治十三[1874]年刊。原作未詳。ヴィクトリヤ朝期のイギリス教養小説らしい)や『百年一覽』(光緒二十年[1894]刊。李提摩太 Timothy Richard 訳。原作は³⁾ Edward Bellamy: *Looking Backward* 2000-1887.) の様な作品が、ぼつぼつ翻訳され始めてはあるが、極めて寥々たる数であり、現在知られてゐる凡てを拾つても、十指は出でまい。勿論、林琴南訳『茶花女遺事』(Dumas fils.: *La Dame aux camélias.*) や『黒奴顛天録』(Mrs. Stowe.: *Uncle Tom's Cabin.*) が、満天下の青年子女の袖を絞らせるのは、尚数年後のことである。いや、そればかりではない。ドイルその人にしても、漸く作家としてその名が認められたばかり、将来は未知数と言つても差支へない存在であつた。周知の様に、探偵小説家としてのドイルの声価が上つたのは、George Newnes (1851-1910) に頼まれて、創刊(1891年1月)後間もない *The Strand Magazine*. に、「ボヘミアの醜聞」(A Scandal in Bohemia. 同誌7号、同年7月刊)以下の短篇を書いたからのことである。それ以前は、非常な自信と希望とを有つて書いた「緋色の研究」(*A Study in Scarlet.*)でさへ、幾つかの出版所の間を往復した後、辛うじて *Beeton's Christmas Annual*. (1887年12月)に掲げられはしたが、著作権買切りで二十五磅といふ安値であつたし、*Lippincott's Magazine* (1890年2月)に掲げられた「四つの署名」(*The Sign of Four.*)も、当初暫くは、文壇から黙殺された恰

3) 拙稿「忘れられた清末の翻訳文学二三」(『野草』22)参看。

好であつた。⁴⁾ 件の四篇について見ても、それぞれの初出は、

(作品名)	<i>Strand Magazine</i> (U.K.)	<i>Hapers Weekly</i> (U.S.A.)
The Naval Treaty.	1893年10月~11月	同年10月14日~21日
The Crooked Man.	同年 7月	同年7月8日
The Adventure of a Case of Identity.	1891年9月	同年9月?
The Final Problem.	1893年12月	同年同月

の如くであつて⁵⁾、これらが単行本に収められたのは、既述の様に、1892年(Adventures)乃至1894年(Memoirs)のことである。つまり、数年前に出版されたばかりの新進作家の作品が紹介されてゐる訣であるから、これは十分注目に値しよう。

それは、我国に於けるドイルの紹介と対比すれば、一層判然とする。蓋し、我国では、明治二十[1887]年頃から、饗庭篁村による Edger Allan Poe (1809-47) の紹介——『西洋怪談 黒猫』(Poe: *The Black Cat.*)・『ルーモルグの人殺し』(Poe: *The Murders in the Rue Morgue.*)——や黒岩涙香の手に成る Emile Gaboriau (1830-72), Fortune du Boisgobey (1821-91), William Collins (1824-89), Anna Katharin Green (1846-1935) などの作品の翻案があり、これと前後して坪内逍遙・森鷗外・森田思軒といつた本格派の人々の参加、丸亭素人・菊亭笑庸など新人の抬頭が見られ、春陽堂からは『探偵小説』・『探偵文庫』といつた叢書の出版まで企画されて、一時はその流行を見る程であつたが、ドイル物の紹介は、彼より尚数年遅れるのである。柳田泉教授に従へば、明治三十二[1899]年七月から、水田南陽が「不思議の探偵」と題して、『シャーロック・ホームズの冒険』(*The Adventures of Sherlock Holmes.*)の殆んど凡てを『中央新聞』に訳載したのが、その嚆矢とされる⁶⁾が、その後

4) John Dickson Carr: *The Life of Sir Arthur Conan Doyle*. Chap. V, Disillusionment: The Thinning of the Dreams., London, John Murray, 1949., pp. 65-68.; Howard Haycraft: *Murder for Pleasure, The Life and Times of the Detective Story*. Chap. III, 'Profile by Gaslight.', Biblo & Tannen, New York. 1968. pp. 48-49.

5) 田中潤司編「シャーロック・ホームズ全篇初出誌名年月表」(江戸川乱歩『海外探偵小説作家と作品』所収)。

6) 柳田 泉「探偵小説史稿」(『続隨筆明治文学』所収)。

に於ても、原抱一庵・三津本春影・岡本綺堂・押川春浪・本間久四郎・群山経堂などが、この方面で筆を染めるのは、三十年代の後半から四十年代にかけてのことであつて、中国に於けるそれとは、かなり様子を異にする。これ亦、我我にとつては、興味深い現象でなければならぬ。

論が少しく岐路に外れたが、序でに一言すると、これらドイルの作品の翻訳が、中国に紹介された最初の海外探偵小説であるといふ表現は、必らずしも肯綮に中るものではない。現に、『時務報』第一冊（光緒二十二年七月十四日刊）の「城外報訳」欄には、「英国包探訪略迭医生奇案」が、『倫敦我們報』から訳載されてゐる。

——ロンドンに住む裕福な老商人嚆子生の若い妻は、無聊に堪へられず、妻子のある好男子の医師略迭と密通して、夫の殺害を図る。妻の不倫に感づいた商人は、探偵に相談を持ちかけるが、後を追つて来た妻に狂人扱ひをされ、連れ戻される。やがて老商人は死亡し、遺産を相続した妻は歐洲漫遊の旅に出る。老商人の死を怪んだ探偵は、親戚の了解を得て墓を暴くが、屍体は何時の間にか失せてゐる。略迭の行動を怪んだ探偵は、その留守中、家宅捜査を試みる。毒薬に関する研究書、血管に空気を入れ脳の毛細血管を破壊する研究といった論文は見出されるが、極め手になるものは何も出て来ない。一方、旅から帰つた商人の妻は、略迭と結婚するが、その直前、ロンドンの郊外で一女性と二人の子供の怪死事件が起る。女は最近他所から移り住んだ女性で、身許は詳らかでない。警察で調べてゐる裡に、女の引越しを手伝つた車夫も亦原因不明の横死をする。だが、検死に立会つた警官の発見した薬の包紙から、一連の怪死事件が解決する。殺された女と子供は、略迭の別れた妻子であつた。又、毒を盛られた老商人は、納棺後胃を洗滌されて蘇生し、香港行きの船に乗せられ、途中で海に投げられ、自殺の様に装はれたのであつた。後に証拠を残すまいとする略迭の陰湿な企画によるものであることは、言ふまでもない。

素隠書屋刊の『新訳包探案』（光緒己亥〔1899年〕刊。恐らくは木版本であらう）及びその改版本たる文明書局版（鉛印）には、右の一編を加へ、これに注して阿英氏は、「収柯南道爾福爾摩斯探案五種」と記してゐる。が、これは少しく疑問で、原作が何であるか、又、『倫敦我們報』といふのも、手許にある *The Cambridge History of English Literature. Vol. XIC, Chap. IV 'The Growth of Journalism.'* の注として附載されてゐる書誌程度では訣らない。後考を俟つ。

時務報には、今一篇、上海の『西字林日報』（*North China Daily News.*）から訳載された「審断略律致死事」がある。横浜の英国領事館で行はれた夫殺しの裁判記事で、第十六冊から二十三冊（光緒二十二年十二月一日～同二十三年三月十一日刊）に互つて連載された。小説ではないが、探偵小説に関係するものであるから、一寸触れて置く。

『時務報』に掲げられたこれらの作品が、どの様に読者に迎へられたかは、上掲林琴南の文章以外に徴すべき資料がない。しかし、『時務報』は、創刊後一年ならずして一万二千部を銷し、「為中国有報以来所未有、拳国趨之如飲狂泉」⁷⁾と伝へられてゐるし、爾後の探偵小説の流行が暗に物語つてもゐる様に、時流に乗つて歓迎されたであらうことは、想像に難くない。にも不拘、探偵小説の紹介は、上記の数篇のみで、同誌上から完全に姿を消してしまふのである。

これは、一体どうしたことであらうか。紙面の狭隘といつたこともあらうけれども、『時務報』の主筆が、天性のジュルナリストであつた梁啓超であつてみれば、しかく簡単にこれを抛棄するとは考へられない。現に、後年の『新民叢報』や『新小説』での探偵小説の扱ひ方を見ても、それは明らかである。ましてや、公案物の尚流行しつつあつた当時のことではないか。とすると、「呵爾唔斯緝案被戕」(*The Final Problem.*) が、文字通り『時務報』誌上を飾つた最後の探偵小説であつたといふことは、尋常ではない。換言すれば、探偵小説訳載の中止は、梁啓超の意志でも読者からの非難の声に因るものでもなく、別の面からする圧力があつたのではないであらうか。

戈公振の『中国報学史』によると、『時務報』は、寄附金を基に創刊されたが、最大の寄附者であつた湖広総督張之洞の干渉が甚しく、年少気鋭の梁啓超は、遂に筆を投じて湖南に去り、光緒二十三年十月、湖南時務学堂の主席教習となつたといふ。⁸⁾ 意見の扞格には種々なものがあつたであらうが、探偵小説の功罪をめぐる両者の見解の相違の如きも、その一であつたのではないか。も

7) 梁 啓超「清議報一百冊祝辞並論報館之責任及本館之経歴」(『清議報』第一百冊)。尚、楊家駱主編『梁任公先生年譜長編初稿』卷六参照。

8) 戈 公振『中国報学史』・第四章第三節「雑誌之勃興」；曾 虛白主編『中国新聞史』・第五章第三節(二)「『時務報』的由来及其發展」その他。

つと端的に言へば、「呵爾唔斯緝案被戕」を掲載した時点で、梁啓超は『時務報』に対する意欲を失ひ、裁判記録の紹介で一応は妥協したものの、遂に我慢しきれず、敢て抵抗する姿勢を示したと見たいが、穿ち過ぎるであらうか。

(2)

光緒二十四〔1898〕年から二十八〔1902〕年までの数年間は、戊戌政変・団匪事件などが相繼いで勃発し、政局が大きく揺れ動いた時代である。この間、『清議報』が創刊され、東海散士の『佳人奇遇』、次いで矢野竜溪の『経国美談』が同誌上を賑はし、既述『茶花女遺事』・『新訳包探案』など、記念すべき出版も見られはしたが、翻訳文学界は未だ低調で、さして見るべきものがない。

が、さうした裡にも、光緒二十七〔1901〕年頃から、新しい気運が徐々に動き始めて来る。その先登を切るものは、黄鼎・張在新訳『泰西説部叢書之一』で、これが又、ドイルのシャーロック・ホームズものである。筆者は、未だ該本に接する機会に恵まれないが、阿英氏の書目によつて内容を推測すれば、次の如くである。

(華訳名)	(原 作 品 名)	(所収作品集)
毒蛇案	The Adventure of the Speckled Band.	(Adventures.)
宝冠	The Adventure of the Beryl Coronet.	(Ibid.)
拔斯夸姆命案 (舌カ)	The Adventures of the Boscombe Valley Mystery.	(Ibid.)
希臘詩人	The Greek Interpreter.	(Memoirs.)
紅髮会	The Adventure of the Red-Headed League.	(Adventures.)
紳士	The Adventure of the Noble Bachelor.	(Ibid.)
海 姆	?	

このうち、「毒蛇案」と「宝冠」には、成都啓蒙通俗報社から単行上梓された異版があつて、顧燮光の『小説経眼録』には、それぞれに「於案中情節，言之極詳。訳筆亦奇警可喜」(「毒蛇案」)・「案情離奇，福能精細考察，俾股東之子阿收得以昭雪，誠智矣哉」(「宝石冠」)といった短評が、附せられてゐる。⁹⁾

9) 註1参照

当時の読者の眼を窺ふ資料として、珍重に値しよう。

訳者の一人黄鼎は、上海の人、字は佐廷。上海の聖約翰大学 (St. John's University.) を卒業した後、光緒十八年渡米してヴァージニア大学に学び、同二十三年に卒業して帰国した。帰国後は、暫く母校で教鞭を執つてゐたが、二十七年山西大学に迎へられ、三十年には上海米領事館翻訳となり、滬甯鐵路総翻訳を経て、宣統三年駐米留学生監督となつた。その間、マイルズの『万国史』(Philip Van Ness Myers: *General History*. 1889)・レムセンの『化学』(Ira Remsen: *The Elements of Chemistry*. 1890)・クロッドの『進化論』(Edward Clodd: *Human Origins*. 1903)などの翻訳も試み、清末の教育文化界に一足蹟を遺した人である。張在新の伝は、よく訣らない。阿英氏の書目には、又、「議探案 黄鼎・張東新合訳 光緒壬寅〔1902〕余学齋木活字本」(原作未詳)を録するが、彼此同一人なのか別人なのか、「在」・「東」の何れに誤植があるのかも訣らない。しかし、黄氏の閱歴から推して想像される様に、本書は時流を抜ん出た本格的な翻訳であつたに違ひなく、清末の翻訳文学史上、記念すべき労作たるを失はないのである。

翌光緒二十八〔1902〕年には、又、珍しい翻訳が出た。警察学生訳『続訳華生包探案』(文明書局刊)がそれである。訳者から推して犯罪捜査に資する為の参考といった功利的な観点からの翻訳といった可能性が強いが、警察学生といった筆名が用ゐられてゐるところから推すと、訳者は、或いは前年北京警務学堂から宏文書院の速成警務科に送られて来た留日学生中に、求められるかも知れない。扱つたテキストは、教科書用に改編されたものではなく、やはり原書であつたらしく、当初は「親父囚女案」以下の三篇のみであつたが、更に「三K字五橋核案」以下の四篇を加へ、文明書局から再版された。書名に冠せられた「続訳」の文字は、再版本上梓の際に附せられたものであらう。上に仿つて、原作を推定すれば、次の如くである。

(華訳名)	(原 作 品 名)	(所収作品集)
親父囚女案	The Adventure of the Copper Beeches.	(Adventures.)
修機断指案	The Adventure of the Engineer's Thumb.	(Ibid.)

貴胄失妻案	The Adventure of the Noble Bachelor.	(Ibid.)
三K字五橋核案	The Adventure of the Five Orange Pips.	(Ibid.)
跋海森王照片	The Adventure of a Scandal in Bohemia.	(Ibid.)
鵝腹藍寶石案	The Adventure of the Blue Carbuncle.	(Ibid.)
偽乞丐案	The Man with the Twisted Lip.	(Ibid.)

因みに、前掲『補訳華生包探案』の序文によれば、『時務報』所載のそれに続いて、上海の啓明社からホームズ物六篇が出版され、嗣いで「上海文明書局復選訳七則」とある。後者が、右の警察学生訳のものを指すことはほぼ間違ひないが、啓明社版は何を指すのか。六則とある以上、既述の黄鼎・張在新合訳本とも別訳であらうが、詳細は明らかでない。

光緒二十九[1903]年になると、文壇は俄かに活気を呈して来る。同年五月一日、上海の商務印書館から李伯元を主編者に迎へて、『繡像小説』が創刊されたからである。

これより前——すなはち、前年の十月、「中国唯一之文学報」と誇称して創刊された『新小説』は、読者の期待にも拘らず、第二年に入ると休刊続きで、五月に入つて漸く第四号が出る始末であつた。『繡像小説』の創刊は、直接それに刺戟されての企画であつたに相違ない。『新小説』の少しく高踏的な行き方を避け、それでゐて通俗に墮しない編輯方針を採つた様である。殊に興味深いのは、線装仕立て、作品毎に別個の丁付けをし、毎冊幾つかの繡像(挿絵)を加へてゐることである。大企業による出版であり、執筆陣容にも事欠かぬ基盤を有ちながら、尚この体裁を採るのは、製本技術の問題であるよりも、守旧的な読書人に迎へんが為のものなるべく、旁々欠損を生じた場合を考慮して、単行上梓するに備へる苦肉の策とも見られるので、この種の企画が、未だ冒險的な試みであることを物語つてゐる。それはともかく、同誌は、光緒三十二[1906]年三月十五日、七十二期を以て廃刊されるまで凡そ三年近く、半月刊の期日を守つて継続刊行され、清末文壇に異彩を放つた。

繡像小説、在偵探小説風靡一世時、能独持異議、不刊此類作品、実為難

能。而所刊者、又皆以能開導社会為原則、除社会小説外、極少身边瑣事、閨閣閒情之著作。若文明小史・活地獄・老殘遊記・鄰女語・負曝閒談・掃迷帚等、均足以説明一時代之变革。¹⁰⁾

といふ阿英氏の言は、よくその性格を捉へるものである。

しかし、嚴密に言ふと、探偵小説が全く掲げられなかつた訣ではない。初期のものには、「華生包探案」が掲げられてゐるし、以後も「俄国包探案」(原作未詳。水田南陽訳『露国怪物探偵魔王』と関係あるか)・「三疑案」(奥姐作。原作未詳)といった作品が、断続的に掲げられてゐる。「華生包探案」として訳出されたものは、『シャーロック・ホームズの回想録』(The Memoirs of Sherlock Holmes. 1893)に収める諸篇で、これを表示すれば、次の如くである。

墨斯格力夫礼典案	The Meusgrave Ritual	八・九期	七月十五日~八月一日
(華訳名)	(原作名)	(掲載号)	(発行年月日)
哥利亞司考得船案	The Gloria Scott	四・五期	光緒二十九年五月十五日~六月一日
銀光馬案	Silver Blaze	六・七・九期	同六月十五日~ 八月一日
孀婦匿女案	The Yellow Face	七期	同七月一日
書記被騙案	The Stockbroker's Clerk	九期	同八月一日
旅居病夫案	The Resident Patient	十期	同八月十五日

『繡像小説』には、今一篇ドイルの作品がある。第七十二期(光緒三十二年三月十五日刊)掲載の『¹¹⁾ 票議斥候美談』で、訳者は吳禱、高須梅溪訳からの重訳である。原作は、『ジェラルルの冒険』(Adventures of Gerard: Tales of Napoleonic Soldiers. 1904)の第三話「准将が狐を殺した顛末——一名: 准将の犯罪」(How the Brigadier Slew the Fox, or The Crime of the Brigadier.), 作者自身がジェラルルものの中で一番愛したといふ例の小説である。勿論、これは探偵小説ではないから、暫く対象外に置くべきであるが、ドイルの作品として、この種のものが既に紹介されてゐることは、注目してよいであらう。

10) 阿英「清末小説雑誌略」(良友版『小説閑談』・張静廬編『中国近代出版史料』初編所収)。

却説、『繡像小説』は、片々たる小冊子ではあつたが、如上の編輯方針が採られたから、長篇を連載することも、あながち不可能ではなかつた。従つて、上掲の翻訳は、梗概を綴つただけの『時務報』所載のものに較べると、かなり小説らしいものになつてゐる。しかしその反面、訳者に人を得ない時は、得てして誤訳・珍訳をまともに見せつける皮肉な結果を齎すに至ることも、当然予想されるところである。例を「哥利亜司考得船案」にとつて、少しくその翻訳ぶりを窺つてみよう。

余坐暗室内、黙会是事。屈雖返坐、余未与言。約一点鐘、女傭含淚持燈入室。余輕歩至屈前、見其面作白色、神氣尚清。手握數紙、旋置余膝上、与余对坐、移燈桌旁、授余一信。字跡草草、書灰色紙上、即爾今所閱者。余初讀時、神色張皇、亦如爾之今日。余思其必寓有結党之意。故特編成句讀、參用 Fly-paper 与 her pheasant 等字、以隱指其所為之事。余展玩再四、知為決断之辭、然終不能索解、疑信參半、料案由必已在是、所用胡狄生字、必又為此信之題。推測至此、已知其係白達司所寄、而非水手。後幅所言、仍不外結党事。惟 Pheasant's life 並非勉勵口氣。又諦審其字句聯絡處、覺 the of 等字、及 for Supply game London 等字、均無涉。再四揣摩、頓得一鑰、知由首字起、每間二字成文。無怪屈父不得其解。然實顯而易見。即為余友讀之曰、The game is up 争端已起、Hudson has told all 胡狄生已告之衆人。Fly for your life 急行保命。

[右原文]

For an hour I sat pondering over it in the gloom, until at last a weeping maid brought in a lamp, and close at her heels came my friend Trevor, pale but composed, with these very papers which lie upon my knee held in his grasp. He sat down opposite to me, drew the lamp to the edge of the table, and handed me a short note scribbled, as you see, upon a single sheet of grey paper. 'The supply of game for London is going steadily up,' it ran. 'Head-keeper Hudson, we believe, has been now told to receive all orders for fly-paper and for preservation of your hen pheasant's life.'

"I dare say my face looked as bewildered as yours did just now when first I read this message. Then I re-read it very carefully. It was evidently as I had thought, and some second meaning must be buried in this strange combination of words. Or could it be that there was a prearranged significance to such phrases as 'fly-paper' and 'hen pheasant'? Such a meaning would be arbitrary, and could not be deduced in any way. And yet I was loath to believe that this was the case, and the presence of the word 'Hudson' seemed to show that the subject of the message was as I had guessed, and that it was from Beddoes rather than the sailor. I tried it backwards, but the combination, 'Life pheasant's hen', was not encouraging. Then I tried alternate words, but neither 'The of for' nor 'supply game London' promised to throw any light upon it. Then in an instant the key of the riddle was in my hands, and I saw that every third word beginning with the first would give a message which might well drive old Trevor to despair.

"It was short and terse, the warning, as I now read it to my companion:

"'The game is up. Hudson has told all. Fly for your life'.

相当な豪傑訳である。原文中の暗号文は、この小説の冒頭で語られ、此処では再度出て来るのであるから、訳者が削つた意味も訣らぬではない。その結果、Then I re-read it very carefully 以下に、若干手を加へなければならなかつた理由も訣る。が、some second meaning 以下を、「余思其必寓有結党之意」と訳してゐるのは如何であらう。すぐ後の I tried it backwards を、「後幅所言、仍不外結党之事。惟 Pheasant's life 並非勉勵口氣」などと訳してゐるところから推すと、訳者には this strange combination of words の意味が、よく理解出来なかつたに相違ない。原文に 'Life pheasant's hen' とあるのを、わざわざ暗号文通りに戻して、Pheasant's life としてゐることによつても、それは明らかである。更に、解説された暗号文が、「老トリ

ヴァを駆つて絶望させるに十分な通報となつた」とある条りを、「無怪屈父不得其解」と訳すに至つては、言語道断である。これは、決して訳者の意識的な改作ではない。蓋し、この条りの伏線ともなつてゐる。

Mr. Trevor stood slowly up, fixed his large blue eyes on me with a strange, wild stare, and then pitched forward on his face among the nutshells which strewed the cloth, in a dead faint.

に、「時屈父正立門旁，緩歩而前，張目睨余，忽俛首視其衣上之花，面色慘敗」と、珍無類の解釈を施してゐることが、何よりも有力にそれを物語つてゐる。訳者には、英文法の初歩的な知識にすら闕けるところがあつたのではないか。

この訳者が誰であるかは、詳らかでない。又、如上の五篇とも、同一人の訳出に係るものであるか、否か、——少くも、以下に述べる「墨斯格力夫礼典案」(The Musgrave Ritual.)などは、翻訳ぶりから見て、別人である可能性が強いと思はれるが、断定するには尚資料を欠く。

しかし、訳者の背後に、ある程度ドイルの作品に通じてゐた人物のあつたことは、確かであらう。蓋し、『繡像小説』に訳載されたホームズものは、既述の如く『回想録』中の諸篇であるが、「銀光馬案」以下の訳載順は、二三省略した作品のある点を除くと、原書の儘になつてゐる。これらの五篇に、「墨斯格力夫礼典案」を加へて上梓したのが、屢々も引く『補訳華生包探案』であるが、それも巻末に置かれるのではなく、「孀婦匿女案」と「書記被騙案」との間に挿入されてゐる。原書の配列に従へば、「書記被騙案」の後に次第すべきであるが、抄訳本といふ制約から改編を試みたまでであらう。

それはともかく、かうした事実を念頭に置いて、『繡像小説』がまづ「哥利亞司考得船案」を訳載し、単行上梓された折も、これを巻頭に据ゑてゐることを考へるならば、それは決して無作意なものとは考へ難い。換言すれば、「グローリア・スコット号事件」が、ホームズの手掛けた最初の探偵の仕事であり、トリヴァ老人との会話が、彼をして「それまで単なる道楽としか考へてゐなかつた仕事の、職業として十分に成立し得ることを覚らしめたそもそもの動機である」(was.....the very first thing which ever made me feel that a profession

might be made out of what had up to that time been the merest hobby.)と語られるからであるに違ひない。『補訳華生包探案』に見られる如上の改編も、同様な主旨の言葉が、「マスグレーヴの儀式」(The Musgrave Ritual.)中に見られるからで、この二つの作品を切り離して置くことには、問題があると考へられたからであらう。ドイルの作品に対する理解が、既にこの程度にまで進んで来てゐることは、注目に値する。

煩瑣ではあるが、今一つ「旅居病夫案」の一節を引いて置く。

某年十月某日天雨。薄暮時，華生与福而摩斯共坐齋中，明窗半啓，暮景蒼茫。福而摩斯蜷臥椅上，閱清晨郵局送來之信不止。時天頗燥熱，寒暑表升至九十度。華生曾行醫於印度，經其山川風土，体氣變遷，性不畏熱，故以氣候之不齊，而初冬如夏，亦覺安適。偶取日報讀之，則載有英國議政院齟齬事，街談巷議，言論沸騰，都人鄉士，悉偵騎四出伺消息，無異於本地風波，勞人排解矣。不覺興致索然，乃憶新林之幽景，南海之叢林，頗思策杖遨遊，藉資消遣，惟福而摩斯則喜奔走於稠人廣衆之中，探奇索隱，破世界之疑團，而山水之樂，未暇流連，故二人之思想，不啻背道而馳。華生見福而摩斯靜觀書札，不發一語，意緒無聊，乃擲報於側，兀坐凝思。適方寸馳騁間，忽為福而摩斯一声驚斷。

福曰，華生，君之思想，正應如此，判案如君，可免乖謬之譏矣。華生曰，否，恐難如君言，然不知福而摩斯何以知其心中之底蘊，忽有所驚觸，目視福而摩斯，問曰，福君，君何以知余有所思乎。是誠出人意表矣。福笑而應之曰，余前日非以波也小説之汗漫遊一篇語之耶。其中謂有某理想家，於推度中得知其友之隱念，君憶之否。君向以此為不足信。故余今日見君心中有所疑，亦踵彼之後塵，一試吾技，使君知箇中至理也。

華訳の末に「波也小説之汗漫遊」とある『汗漫遊』は、スキフトの『ガリヴァ遊記』、一に『焦僥国』とも題された。波也——原文によつて、Edgar Allan Poeだと訣る——の小説に、『ガリヴァ』があるといふのは随分乱暴な話で、訳者の知識の水準をも窺はせるものであるが、それは偶々『繡像小説』に件の小説が訳載されてゐたのを利用し、読者の興味を繋ぐうとした苦肉

の策として、今は不問に附して置く。只、此処で一言したいのは、訳者の用いたテキストの問題である。と言へば、万事を察知せられる Sherlockian も少くはないであらう。

周知の如く、『入院患者』(The Resident Patient.) は、『回想録』の第二話として収められる作品であるが、当初、これが *Strand Magazine* (1893年8月号) 及び *Harper's Weekly* (同8月12日号) 誌上に掲げられた際には、例文の個所——原文で凡そ二頁に亙る一節はなかつた。ポウが、『モルグ街の殺人』(Poe: *The Murders in the Rue Morgue.*) で、デュパンをして語らしめる「観察と推理による読心術の披露」をその儘に借用したこの一節は、もともと『ボール箱』(The Card-Board Box.) 中の一節であつた。『ボール箱』については、発表当時から、残虐であり不倫の臭ひもするといった声が、作者に寄せられてゐた。そこで、『回想録』を単行上梓する際、ドイルはこの一篇を削除したが、件の一節を葬り去るに忍びなかつたか、これを『入院患者』の中に挿入したのである。George Newnes 版や John Murray 版など、当時イギリスで出版されたものは、凡てさうなつてゐる。アメリカでは、ニューヨークの Harper 社から初版が出たが、何等かの手違ひがあつて、『ボール箱』を収めた儘のものが上梓された。従つて、『入院患者』の方には、右の一節がない。これは、作者の抗議によつて直ちに回収され、改めてタイトル・ページに “New and Revised Edition” と附記された修正版が出た。Harper 社の初版本が、Sherlockian のみならず、一般の愛書家間でも珍重され、高価を呼ぶ所以である。¹¹⁾

テキストに關聯して、今一つ、『白銀号事件』(Silver Blaze.) 中に出て来る Capleton といふ地名が、アメリカ版では Mapleton となつてゐることも、広く知られた事実である。華訳では、これを「客泊勒吞」と音写してゐるから、

11) *A Catalogue of Original Manuscripts and first and other important editions of the tales of Sherlock Holmes, as written by Arthur Conan Doyle., Together with important biographies, pastiches, articles, etc., and a few extraordinary association and unique items.*, New York, Scribner Bookstore, 1943. p. 12.; The Lilly Library, Indiana University.: *The First Hundred Year of Detective Fiction. 1841-1941.* p. 20. etc.

用ゐられたテキストは、イギリス版のものであるに違ひない。他の条件をも併せ考へて、それは日本でも流布した John Murray の廉価版であつたと思はれる。

この年には、今一篇、ドイル物として重要な作品の翻訳が、文明書局から上梓された。嵯長康・呉夢覺訳『唯一偵探譚四名案』がそれで、原作は『四つの署名』(*The Sign of Four.* 1890.) である。この小説は、翌光緒三十年十一月にも、別訳『案中案』が商務印書館から出てゐて、寅半生の『小説閒評』巻一には、

是書即『四名案』。其中情節，一無増減。然依事直叙，不及『四名案』之有神韻。¹²⁾……

とあるから、訳は周密体のもではなかつたが、『四名案』の方が遙かによい出来であつたらしいが、これ亦未見である。

(3)

光緒三十[1904]年になると、事情は更に一転し、我々は驚くべき事実に遭遇する。その一は、『新民叢報』第三年七号(通卷五十五号。光緒三十年十月二十三日刊)に、知新子訳述『歇洛克復生偵探案』として、『六つのナポレオン』(*The Adventure of the Six Napoleons.*) が訳載されてゐることである。この小説は、イギリスでは *The Strand Magazine* の1904年5月号に、アメリカでは一足早く、同年四月三十日発行の *Collier's Weekly* 誌に掲載されたものであるが、半年も経たぬ裡に、上海在住の知新室主人周桂笙によつて華訳され、横浜で発行されてゐた『新民叢報』誌上を飾つてゐるといふことになる。勿論、これを収めた『シャーロック・ホームズの帰還』(*The Return of Sherlock Holmes.* 1905.) は、未だ刊行されてゐないから、雑誌掲載の初出文から直接華訳されたものであることは、贅するまでもない。少しく、冒頭の一節を覗いて見よう。

12) 註2参照。

竊毀拿破侖遺像案全篇仍託為滑震記載語

倫敦偵探長李師德君，晚間來寓晤會，朝夕本相過從，無足異者，歇洛克君亦每喜招接之，藉聞警察局總機關之消息，間論各訟案情節，往往能得其要領，解穢他人之疑竇，故李師德亦樂與之晉接也。是夕既相接晤，寒暄畢，無復他言，吸淡巴菰，意甚暇予。歇洛克注視之。既而問曰，手中得無有公事否。曰，無甚要事。曰，盍告我。李師德笑而不答。既而曰，吾意中確有一事，非故為秘諱。但，此等瑣屑事，不敢重勞足下耳。雖然，其事雖瑣屑，而其情則又甚怪異。吾固知足下不欲以尋常瑣事勞其心。然今茲之事，吾恐雖滑震先生，亦無能為力也。余問病歟。李師德曰，曷言夫病，癩耳。且不僅癩，迨將成怪矣。當此之時，安復有人寄怨毒於拿破侖一世。若是其甚，至欲毀其遺像者哉。歇洛克聞之，隱几徐徐而曰，此無與吾事也。

[右原文]

It was no very unusual thing for Mr. Lestrade, of Scotland Yard, to look in upon us of an evening, and his visits were welcome to Sherlock Holmes, for they enabled him to keep in touch with all that was going on at the police headquarters. In return for the news which Lestrade would bring, Holmes was always ready to listen with attention to the details of any case upon which the detective was engaged, and was able occasionally, without any active interference, to give some hint or suggestion drawn from his own vast knowledge and experience.

On this particular evening Lestrade had spoken of the weather and the newspapers. Then he had fallen silent, puffing thoughtfully at his cigar. Holmes looked keenly at him.

"Anything remarkable on hand?" he asked.

"Oh, no, Mr. Holmes, nothing very particular."

"Then tell me all about it."

Lestrade laughed.

"Well, Mr. Holmes, there is no use denying that there is

something on my mind. And yet it is such an absurd business that I hesitated to bother you about it. On the other hand, although it is trivial, it is undoubtedly queer, and I know that you have a taste for all that is out of the common. But in my opinion it comes more in Dr. Watson's line than ours."

"Disease?" said I.

"Madness, anyhow. And a queer madness too! You wouldn't think there was anyone living at this time of day who had such a hatred of Napoleon the First that he would break any image of him that he could see."

Holmes sank back in his chair.

"That's no business of mine," said he.

文言には文言としての格調があるから、如何しても周密体の直訳といふ訣には行かない場合がある。事実、右の例文でも、かなり自由に訳筆を振つてゐる個所が見られるが、意味は確実に捉へられてゐるのであるから、誤訳とするのは当たらない。難を言へば、原文のコンマ・ピリオドやパラグラフに対する配慮が十分になされて居らず、ドイツ独特の会話の巧みさも、活写してゐない憾みがある。が、それらを此処に求めるのは、隴を得て蜀を望むものと言ふべきであらう。

訳者周桂笙は、上海の人。字は樹奎，辛龠・新庵・惺菴・知新室主人などと号した。その名は、林琴南の声名に圧せられて、閱歴さへ詳らかでないが、林琴南が蟹行文字に全く暗かつたのに対し、周氏の方は、英語を能くした。楊世驥氏が『文苑談往』に、

大家談到我国最早介绍西洋文学的人，都認定是林紓，殊不知周桂笙比林紓更早，可是現在已不復為人所記憶了。……他的翻譯就我所看到的計有童話『新庵諧鐸』一種，隨筆『新庵訳萃』一種，小説『毒蛇圈』（法・鮑德著）・『八宝匣』・『失舟得舟』・『左右敵』・『飛訪木星』・『海底沉珠』・『紅痣案』（法・紀善著）・『含冤花』（英・培台爾著）・『妒婦謀夫案』・『福爾摩斯再生案』（英・陶高能著）各一種，另有『新庵五種』・『新庵九種』，係所訳

短篇小説の結集。『新庵諧訳』凡二卷（光緒二十六年，上海清華書局排印本），是他最早的翻譯，卷上係節訳『一千〇一夜』，卷下是童話，大抵出自『伊索寓言』一類的書。當日，他能注意到一向為人所漠視的兒童文學，實是很難得的。……他的『毒蛇圈』二卷（初載『新小説』。光緒三十年有廣智書局單行本），是用白話翻譯的，不失為一部最高的直訳の小説。¹³⁾

と説き、これを承けて、曹聚仁氏が『文壇五十年』に、

晚清訳学界有一位前輩，周桂笙（辛庵，上海人），他的翻譯西洋文學，比林紓更早，更深入。如楊世驥所說的，他是我国最早能虚心接受西洋文學的特長的。他不像林紓一樣，要説迭更司的小説好，必説其有似我国的太史公，他是能爽直地承認歐美文學的優點的。他翻譯的小説雖不多，大抵都是以淺近的文言和白話為工具，中国最早用白話介紹西洋文學的人，恐怕要算到他了。他的翻譯工作，在當日實抱有一種輸入新文學的企圖。他曾在一九〇六年，發起組織訳書交通公會，其宣言有云，「中国文學，素稱極盛，降至晚近，日即陵替。方今人類，日益進化，全球各國，交通便利，大抵競爭愈烈，則智慧愈出，國亦日強，彰彰不可掩也。……夫旧者有尽，新者無窮，与其保守，無寧進取，而況新之於旧，相反而適相成，苟能以新思想，新學術源源輸入，俾躋我国於強盛之域，則旧學亦必因之昌大，卒収互相發明之効，此非訳書者所當有之事歟。」就在那些前驅的志士之中，我們又看到更進步的思想了。¹⁴⁾

と論じてゐるのは、正しくその業績を評価するものである。

因みに、この翻譯の首には、訳者の「弁言」がある。中国人の手になる最初の「探偵小説覚え書」と言つて差支へないものであり、且又、珍しい資料であるから、少しく長文ではあるが、煩を厭はずに引いて置く。

泰西之以小説名家者，肩背相望，所出版亦月異而歲不同。其間若写情小説之綺賦風流，科学小説之發明真理，理想小説之寄托遙深，偵探小説之機警活潑，偶一披覽，如入山陰道上，目不暇給。吾國視泰西，風俗既殊，嗜

13) 張静廬輯註『中国現代出版史料』甲編に収める「漢訳東西洋文學作品編目」（蒲梢）の附註による。

14) 曹聚仁『文壇五十年』・十三「晚清」

好亦別。故小説家之趨向，迥不相侔。尤以偵探小説，為吾國所絕乏，不能不讓彼獨步。蓋吾國刑律訟獄，大異泰西各國，偵探之説，實未嘗夢見。互市以來，外人伸張治外法權於租界，設立警察，亦有包探名目。然學無專門，徒為狐鼠城社。會審之案，又復瞻徇顧忌，加以時間有限，研究無心，至於內地讞案，動以刑求，暗無天日者，更不必論。如是，復安用偵探之勞其心血哉。至若泰西各國，最尊人權，涉訟者例得請人為弁護，故苟非証據確鑿，不能妄入人罪。此偵探學之作用所由廣也。而其人又皆深思好學之士，非徒以盜竊充捕役，無賴當公差者，所可同日語。用能迭破奇案，詭秘神妙，不可思議，偶有記載，傳誦一時，偵探小説即緣之而起。英國阿爾唔斯歇洛克者，近世之偵探名家也。所破各案，往往令人驚駭錯愕，目眩心悸。其友滑震，偶記一二事，晨甫脫稿，夕遍歐美，大有洛陽紙貴之概。故其國小説大家，陶高能氏，益附會其説，迭著偵探小説，托為滑震筆記，盛傳於世。蓋非爾，則不能有親歷其境之妙也。吾國若時務報館張氏所訳者尚矣。厥後続訳者，如華生包探案等，亦即滑震筆記耳。嗣自歇洛克逝世後，雖奇案纍纍，而他人無復有如歇氏之苦心思索，默運腦髓以破之者，而陶氏亦幾有擱筆之歎。於是創為歇洛克復生之説，藉假盛名，實其記載，成書若干，歐美各國，風行迨遍。走，不揣謏陋，願以此歇氏復生後之包探案，介紹於吾國小説界中。至於滑震筆記原書，雖幾經統訳，而未尽者尚多。自顧不才，未敢妄為紹統也。左篇稿脫，乃弁數語於簡端。甲辰中秋，上海知新室主周桂笙氏。

ホームズを實在する「近世之偵探名家也」と考へてゐるのは、愛敬であるが、實際に、探偵依頼の為、ベーカー街221番地乙号のホームズの部屋を訪ねたり、ドイルに紹介を頼みに来る人が、跡を絶たなかつたといふのであるから、とやかく咎めるまでもない。又、勝れた探偵小説が、犯罪捜査や鑑識に寄与することのあるのも事實であらうから、訳者の探偵小説観が功利的に過ぎるといつた非難も、當を得まい。当代に於ける探偵小説の紹介は、単なる娯樂の提供以上の意味を有つものであつた筈である。

ところで、*The Strand Magazine* その他の雑誌から、直接華訳された小説は、「竊拿破崙遺像案」だけではなかつた。未見の資料ながら、奚若訳『福爾摩斯

再生案』(The Return of Sherlock Holmes.) 四冊のうち、三冊までが、この年のうちに小説林社から出てゐるのである。第四冊は、遅れて光緒三十二年(1906)に上梓されてゐるから、この分は別であるが、便宜上併せて表示すれば次の如くである。

(華訳名)	(原作名)	(初出年月日)
第一冊 再生第一案	The Adventure of the Empty House.	1903年10月 (Strand Mag.) " 9月26日 (Collier's)
第二冊 亞特克之焚屍案	The Adventure of the Norwood Builder.	1903年11月 (Ibid.) " 10月31日 (Ibid.)
卻令登乘自轉車案	The Adventure of the Solitary Cyclist.	1904年1月 (Ibid.) 1903年12月26日 (Ibid.)
第三冊 麥克來登之小学校奇案	The Adventure of the Priory School.	1904年2月 (Ibid.) " 1月31日 (Ibid.)
必爾逢登之被螫案	The Adventure of Charles Augustus Milvaton.	1904年4月 (Ibid.) " 3月26日 (Ibid.)
第四冊 毀拿破崙像案	The Adventure of the Six Napoleons.	1904年5月 (Ibid.) " 4月30日 (Ibid.)
黒彼得被殺案	The Adventure of Black Peter.	1904年3月 (Ibid.) " 2月27日 (Ibid.)
密碼被殺案	The Adventure of the Dancing Men. ?	1903年12月 (Ibid.) " 12月5日 (Ibid.)
陸聖書院竊題案	The Adventure of the Three Students.	1904年6月 (Ibid.) " 9月24日 (Ibid.)
虚無党案	The Adventure of the Golden Pince-Nez.	1904年7月 (Ibid.) " 10月29日 (Ibid.)

訳者奚若は、江蘇省元和の人、初め商務印書館編訳部に、後には小説林社出版部に在つて、翻訳に従事した人と覚しいが、氏姓・閲歴共に詳らかでない。英語はかなり出来た様で、『繡像小説』第十一期(光緒二十九年九月一日刊)以下に『天方夜譚』(Arabian Nights' Entertainment.)をRichard Burtonの英訳本によつて訳載してゐるのを始め、焦士威奴の『秘密海島』(Jules Verne: The Mysterious Island. 1875)・馬利孫の『馬丁休脱偵探案』(Arthur MorrisonのMartin Hewittのもの選訳。後述)など、冒険小説乃至は探偵小説の類を多く訳した。

この年には、今一篇ドイルの『大復仇』(原作未詳)を、黄人(摩西)と奚若

とが合訳してゐるが、陳彦訳『恩仇血』(原作未詳)と共に、未だ披見する機会を得ない。

商務印書館編訳所訳印の『案中案』が、やはりこの年の十一月に上梓されてゐることは、上に一言したが、これは後に同書館発行の『説部叢書』第一集第六編に収められたので、他に較べると比較的入手し易い。訳文は、

回顧撒特斯，則面無人色，木立不動，詢之始知其与勃沙洛茂為學生也。余謂福曰，可懼哉，將奈何。福曰，必先啓門。言已，力推之，不動。三人併力猛推，戛然一声，鎖裂門闢。其室類化学室，向門一隅，玻璃瓶羅立於架，桌上滿置電瓶玻璃管蒸器。室東隅，有強水数袋，水漬蜿蜒樓板上，室中空氣甚劣，一小梯倚壁，緣梯仰視，見頂板有一穴，大僅容身，身繩一束，乱置梯下，勃沙洛茂坐桌旁椅中，首枕左肩，面帶怪状，撫之已僵，度死已数句鐘矣。自首至足，皆現異相，手置桌上，旁倚一灰色巨槌，槌端裝一錐形之石，繞以鉄絲。又有一破紙，福取視，蹙額曰，華生試閱之。余接視，則又為The Sign of Four 四花押数字。余不解所謂。福曰，無他，謀殺案耳。吾固預料之矣。隨以手指死者耳旁，則一長黒刺，深入膚内。余曰，此樹刺也。曰，然。是刺甚毒，子其出之，雖然宜慎。余乃以両指甲挾之出，膚無傷痕，僅有血一小点。謂福曰，余於此案，益滋疑惑。福曰，顯為謀斃，何疑乎。

といった調子のもので、わざわざ原文を参照するまでもなく、大意訳である。所引の文は、第五章「ボンディシェリ荘の惨劇」(The Tragedy of Pondicherry Lodge.)の一節であるが、華訳では、さうした一章一章の枠をも取払つて、巻首から巻末まで一気に書下す方法を採用してゐる。勿論、段落の個所や会話の個所での改行といったことも、全く行はれてゐない。ただ筋を逐うて直叙するばかりであるから、無味乾燥、真に読み辛いものになつてゐる。前掲、寅半生の文に、「依事直叙，不及『四名案』之有神韻」とあるのは、訳文の巧



拙もさることながら、如上の事実も大いに関係してあるであらう。

さうした欠陥が認められるにもせよ、平静に之を眺めれば、『案中案』の訳文も、さう拙いものではない。失笑を買ふ様な誤訳も少なければ、詞章もそれなりに整つて居り、当代の水準からすれば、まづまづの翻訳と言へるのではないかと思ふ。ここに『四名案』の訳文を対照することが出来ないのは聊か残念であるが、「有神韻」とされる『四名案』についても、一方では、同じ評者によつて、「惜乎全書人名多至五六字，易啓閱者之厭，苟易以中国体例，当更增趣味不少」¹⁵⁾といった批評が加へられてあるし、「訳筆冗複，可刪三之一。然写情栩栩如生，固小説之佳構也」¹⁶⁾と評する読者もあつた。謂ふところの「中国体例」とは、章回体小説を指し、「訳筆冗複」とするのは、古文にのみ眼馴れた口つきよりする評であらう。してみると、彼等の要求するところが奈辺に在つたか、ほぼ見当がつく。外国の文学を受容れるには、それに適はしい新しい文体が必要であるが、さうした文体の近代化が行はれるには、尚時間が必要であつた。翻訳そのものが草創期の所産であれば、評家の眼も未だ幼い水準に在つたことも、亦止むを得ぬところである。

因みに、本書の奥書には、原著者として「英国屠哀爾士」とある。ドイルは、中国では、柯南道爾・柯南達利・科楠岱爾などと音写されるのが普通であるが、前掲『四名案』では愛考難陶列、『竊毀拿破崙遺像案』では陶高能、本書では右の如くであつて、判読に苦しむ人名も尠くはない。「ギョオテは俺のことかとゲーテ言ひ」とは川柳子の揶揄であるが、中国では使用する文字が表意文字であるだけに、問題は深刻である。今、それを改まつて詳論する余裕はないが¹⁷⁾、音訳するにしても、訳者の出自によつて、粵音・閩音・呉音等々さまざまな方音が用ゐられ、その間に何等の法則も統一もなく、従つて同一の人名・地名にも、訳者によつて別様の字が充てられる結果となる。そればかりではない。かうした固有名詞が頻繁に行文中に混つて来ると、如何なるか。中国文としてのリズム感が失はれるとか、訳文に湿ひがなくなるとかいつた程度の生易

15) 寅半生『小説閒評』(註2参照)。

16) 顧燮光『小説経眼録』(註1参照)。

17) 拙稿「現代中国に於ける国語国字問題」(ローマ字教育会編『ことばの教育』第15~18号)参照。

しいものではない。判読に苦しむ場合すら生じて来る。寅半生が提示する今一つの問題は、正にこれであつた。

かうした問題を解決する方法として、最も普通に行はれたのは、人名には一本の、地名には二本の傍線(専名号)を引いて識別する方法で、既に Rev. Wm. Burns 訳『天路歷程』(Bunyan: *The Pilgrim's Progress.*) に用ゐられてある。確かに、これによつて目的の一斑は果される訣ではあるが、それにも自ら限界がある。例へば、次の訳文を見よ。

福復面層母提耳曰、君今晨離余家，已有尾君之後者，君識之否。曾母提耳曰、何人。福曰、不能告君，此余所最愧者，鄰里戚串中，有濃鬚滿頰者否。層母提耳思之有頃，瞿然曰、有之。查斯旧僕，名巴林母。福曰、近何在。層母提耳曰、管理巴斯赤衛利旧宅事。福曰、当察其尚留宅中否，或已来倫敦。層母提耳曰、今奚自察之。福曰、可以電往詢，彼於宅中諸事，已整備否，亨利將歸矣。孰為最近巴斯赤衛利旧宅之電局。層母提耳曰、科林本最近。福曰、再以電致科林本電局員，囑其親交巴林母。巴林母不在，即將原電寄還羅霜本林客寓亨利收。巴林母曾来倫敦与否，即此可決。亨利曰、巴林母為吾家旧僕乎。層母提耳曰、自其祖管理巴斯赤衛利旧宅事，迄巴林母四世矣。彼夫婦素為鄉人所親愛。亨利曰、吾家現無主者，彼夫婦居彼必自得。層母提耳曰、然。福曰、查斯遺書内，有云以貲分給巴林母否，層母提耳曰、許彼夫婦，各得五百鎊。

印刷の都合で、本文の右側に附してある専名号を、下に移した。所引の文は、光緒三十一年[1905]年二月、『説部叢書』第一集第十四編に収められた陸康華・黄大鈞合訳『偵探小説降妖記』(Conan Doyle: *The Hound of the Baskervilles*. 1901-02) 第五章「三度目も失敗」(Three Broken Threads) の一節である。訳文は周密体ではないが、勘所は押へてあり、良心的な翻訳の部類に属する。されば、侗生の如き、

偵探小説最受歡迎，近年出版最多，不乏佳作，如『奪嫡奇冤』・『福爾摩



斯偵探案』・『降妖記』等書、其最著者也。¹⁸⁾

と評してゐるが、それにしても何と専名号の煩瑣なことか。しかも、中国に於ける、この種の問題は、解決する術のない宿命的な課題である。かくて、清末に於ける翻訳文壇は、この前後から漸く壁のあることを意識する様になる。さうして、その壁を打破る為の模索的な試みが、文学革命期まで続く。

筆を原に戻す。光緒三十二年には、如上の『補訳華生包探案』や『福爾摩斯再生案』第四冊が出た他、小説林社から佚名訳『福爾摩斯偵探第一案』(*A Study in Scarlet? "The Gloria Scott":?*)・駕水不因人訳『深淺印』(原作未詳)・馬汝賢訳『黄金骨』(原作未詳)などが出版されてゐる。後二者は、共にドイル物といふが、何れも未見であるので、何とも言へない。

超えて、三十三[1907]年になると、漸く林琴南が、この方面でも活躍する様になる。林琴南の訳したドイルの作品は、

(華訳名)	(原作名)	(合訳者)	(発行所)	(刊年)
金風鉄雨録	(<i>Micah Clarke, His statement as made to his three grandchidren, etc.</i> 1889.)	曾宗鞏	商務印書館	光緒三十三年六月
髯刺客伝 ¹⁹⁾	(<i>Uncle Bernac: A Memory of the Empire.</i> 1897.)	魏易	同	同三十四年五月
恨綺愁羅記 ²⁰⁾	(<i>The Refugees. A Tale of two Continents.</i> 1893.)	魏易	同	同五月

18) 侗生『小説叢話』(阿英編『晚清文学叢鈔』・「小説戯曲研究卷」所収)。

19) 寒光の『林琴南』に、本書の原典を“*The Refugees.*”と誤つて以来、朱義胄の『春覚齋著述記』(『林畏廬先生学行譜記』四種之二)・韓廸原の『近代翻訳史話』(『翻訳理論叢書』之二)・国立中央図書館編『近百年来中訳西書目録』(『現代国民基本知識叢書』第五輯)など皆之に仿ふが、戴けない。林序に、「作者之伝刺客、非伝刺客也、状拿破崙之驕也。吾訳『恨綺愁羅記』、亦此君手筆、乃曲写魯意十四蹇恣專横之状、較諸明之武宗、世宗為烈。茲伝之敘拿破崙軼事、驕乃更甚、至面枢近大臣及疆場師武而淫焉。而其所言所行、又皆拿破崙本紀所勿載、或且遺事伝聞人口、作者撫拾成為專書、用以播拿破崙之穢迹、未可知也云々」とあるから、“*The Refugees*”などではなく、Napoleonic Stories と呼ばれるその作品群中に、原典は求めなければならぬことは明らかである。既に、馬泰来氏が「林琴南所訳小説書目」(『出版月刊』第二卷第十二期)に指摘する如く、“*Uncle Bernac.*”とするのが正しい。

20) 寒光の『林琴南』に、「是書僅訳上半部、但能自成首尾。内容与 R. Rolland: *Le Montespan* (李琮・辛質合訳的『孟德斯榜夫人』) 同一故事；但我覺得這書好得多。」(p. 95) とある以外、原典の追究が行はれてゐないが、これが“*The Refugees*”

歇洛克奇案開場	(<i>A Study in Scarlet.</i> 1888)	魏易	同	同六月
電影樓台	(<i>The Doing of Raffles Haw.</i> 1892. ?)	魏易	同	同八月
蛇女士伝	(?)	魏易	同	同九月
黒太子南征録 ²¹⁾	(<i>The White Company.</i> 1891.)	魏易	同	宣統元年四月

の如くであつて、多くは歴史小説である。ドイルは、自ら歴史小説家を以て任じ、「空想や規模の点ではハガード (Sir. Henry Rider Haggard. 1856-1925) に及ばぬかも知れないが、せめて作品の質と思想と面白さの点では、ハガードを凌ぐ様な歴史小説を書きたい」と念願してゐたといふ。又、ボア戦争に従軍し、『大ボア戦争』(*The Great Boer War.* 1900.)・『南アフリカ戦争、その原因と行動』(*The War in South Africa; its Causes and Conduct.*) といった著書をも遺した彼は、トランスヴァールに活躍し数多くの著書を遺したハガードと並んで、アフリカ問題の権威として著聞し、インド問題に一家言を有してゐたキプリング (Rudyard Kipling. 1865-1936.) と共に、文壇に鼎立した異才でもあつた。その生涯を通じて、二十五種ものハガードの作品を訳した林琴南及びその協力者たちが、ハガードに次いでドイルの歴史小説に着目したことは、或いは当然であつたかも知れない。が、歴史小説家としてのドイルの価値は、まだ正しくは認められてゐなかつた当代のことである。やはり、訳者の見識は高く評価すべきものであらう。而して、清末に於けるドイルの紹介といふ立場からすると、これ亦見遁し得ないことになるが、本稿の主題からは離れることになるので、ここでは採り上げない。

ただ一篇、見遁し得ないものに、『歇洛克奇案開場』がある。寒光は、本書について、

である。Montespan, Françoise Athenais, marquise de 1641-1707 は、ルイ十四世時代の女官長、初めマリヤ・テレサに仕へたが、幾何もなくしてルイ十四世の寵を蒙り、その子数人を産んで後宮に権勢を振つた。当時、フランス革命の研究の余波として、彼女への関心が高まり、上掲ロマン・ローランの著書や H. N. Williams の“*Madame de Montespan.* (1903)”などが、数多く出版された。ドイルの作品も、この流行の後を逐ふものであつた。

21) 寒光の『林琴南』に、原典を“*Sir. Nigel.*”として以来、諸書皆その誤りを踏襲してゐる。これも、馬泰来氏の指摘する如く、“*The White Company*”に訂正すべきである。

林氏翻譯偵探案的意思是很好的，絕不似一般譯偵探小說投機者的無聊；這意思只要看『神樞鬼藏錄』的序文便可以明白的。不過那時的風氣和見識，也很有值得我們注意的地方。譚鉄樵在『說薈』裏說，「……吾國新小說之破天荒為『茶花女遺事』・『茄因小伝』，若其夏昌寢熾之時代，則本館所訳『福爾摩斯偵探案』是也。偵探案有為林琴南筆述者，又有蔣竹莊潤辭者，故為逸訳小説中最善本。士大夫多喜閱之，詫為得未曾有。……（一三頁）

と、当代の翻譯探偵小説中でも優れた翻譯であることを指摘してゐるが、遺憾なことには、これ亦未見である。但、原作が『緋色の研究』（A Study in Scarlet.）であることは、林訳に附せられた陳熙績の跋に、

嗟乎！約仏森者，西国之越勾踐，伍子胥也。流離顛越，転徒数洲，冒霜露，忍饑渴，蓋幾填溝壑者数矣。卒之，身可苦，名可辱，而此心耿耿，則任千劓万磨，必達其志而後已。此与臥薪嘗胆者何以異？太史公曰：伍子胥剛戾忍詢能成大事，方其窘於江上道乞食，志豈嘗須臾忘郢耶？吾於約仏森亦云。及其二憾，卒逢一毒其軀，一割其腹，吾知即不遇福爾摩斯，亦必歸国美洲，一瞑而万世不視也。何則？積仇既復，夙願已償，理得心安，軀殼何恋？天特假手福爾摩斯以暴其事於当世耳。

とあることによつて、明らかである。

ところで、陳熙績、字して秀跋は、福建省閩侯の人で、林琴南とは親交のあつた間柄であるから、「是篇雖小，亦借鑒之嚆矢也，吾願閱之者勿作尋常之偵探談觀，而与太史公之『越世家』・『伍員列伝』參読之可也」とするその作品評には、林琴南のそれが幾分か代弁されてゐるかも知れない。しかし、探偵小説に対する林琴南の理解が、今少しく高い水準に在つたことも事実で、その一端は、次に掲げる訳者の序文によつても、窮ふことが出来る。

……余曾訳『神樞鬼藏錄』一書，亦言包探者，願書名不直著「包探」二字，特借用元微之『南陽郡王碑』「遂貫穿於神樞鬼藏之間」句。余名不切，宜人之不以為異。今則直標其名曰『奇案開場』，此歇洛克試手探奇者也。文先言殺人者之敗露，下卷始叙其由，令読者駭其前而必釋其後，而書中故為停頓蓄積，待結穴處，始一一点清其發覺之故，令読者恍然，此顧虎頭所

謂伝神阿堵也。寥寥僅三万余字，借之破睡亦佳。

『緋色の研究』といふ奇抜な原書名を『奇案開場』と移すのは、少しく平凡に過ぎるが、小説の冒頭に事件の結末を置き、筋を錯綜させながら原因を遡求して、発端まで辿り着くといふ近代探偵小説の骨法——それは、ポウによつて創始せられたものであるが——は理解してゐるから、矢張り小説の読み方は心得てゐると言はねばならぬ。

因みに、前掲、陳氏の跋によれば、「是書旧有訳本，然先生之訳之，則自成為先生之筆墨，亦自有先生之微旨在也」と、林訳以前にも別訳が出てゐることが知られるが、それは何か。既述の黄人・奚若合訳『大復仇』・陳彦訳『恩仇血』・佚名訳『福爾摩斯偵探第一案』の何れかがそれらしく想はれるが、断定すべき資料は何も有たぬ。

（4）

光緒三十[1904]年前後から民国の初めにかけては、文字通り探偵小説の全盛期で、ドイルの他にも、次章以下で述べる有名無名の作家と作品とが、洪水の様に紹介せられた。それと共に、デュパン (Auguste Dupin.)、ヒュイット (Martin Hewitt.)、ニック・カーター (Nick Carter.)、ルパン (Arsene Lupin.) 等々の名も、中国の読者に馴染みの深いものとなつて来るが、何と言つても、圧倒的な人気を誇るのは、ホームズの名であつた。湯心存・戴鴻葉合訳『紅髮案』(The Red-Headed League. 宣統元年刊。)の様な新訳が、種々上梓せられたのは贅するまでもない。端的に言つて、「福爾摩斯探案」の名を冠せさへすれば、何でも売れるといふ状態であつたらしい。それを物語る一の事例が、此処にある。光緒三十三[1907]年、新世界小説社から出版された白侶鴻訳『福爾摩斯最後之奇案』(未見)が、それである。これは、「最後の事件」(The Final Problem.)とも『最後の挨拶』(His Last Bow. 1917.)とも全く関係のない、つまりは贋作である。『小説管窺録』の著者(徐念慈?)は、それを指摘して、次の如く言ふ。流石である。

是書顛末尚未卒読，第其廣告有謂「友人白君留学英国，与其後嗣立露辣

斯君同学，得見其家乘軼事，為福君晚年在法偵獲之奇案，記此」云云。案『福爾摩斯探案』係著名小説家陶高能 (Sir. A. Conan Doyle) 所著，彼以華生自称，業医，本有『福爾摩斯化身』一篇，詳言著書之故。是福爾摩斯為理想之偵探，非実有其人可知已，何來此後嗣立露辣斯君？本社於『化身』一篇，早已訳出，擬於刊行全案時列入，質諸当世之喜読『福爾摩斯偵探案』者。

ところで、寅半生の『小説閒評』によれば、この小説の筋は、次の如きものであるといふ。

是書凡二十二節。敘法国鏡岩村富紳石雅魯，中年喪耦，無子，僅一女錦霞，遂統娶律師柯利牟之女柯施媚為繼室。時錦霞年已及笄，為母舅馬利達攜去，与女立娥同入学堂。兩美相逢，異常莫逆。忽接父病電音，馬利達父女親送錦霞歸家。至則雅魯已歿。父女乃暫留，幫辦喪務。一日，立娥早起，閒步入園，陡被手槍轟斃，徧緝凶手不獲。旋由神探福爾摩斯与幫辦国海，查係柯利牟為謀産起見，買囑赫立木謀害錦霞，誤斃立娥，案遂破。初，立娥曾与博士嘉萍訂婚，一聞凶信，嘉萍即往錦岩村哭祭，為柯施媚陷害，誘入警署，至是得釈，後遂与錦霞結婚云。立娥不死於家，而死於石氏，其為錦霞替身，善読小説者一望而知。乃神探如福爾摩斯，猶細詢馬利達家世，並欲検看乃姪旧信，雖係曲佈疑陣，未免錯尋綫索。

これを以てこれを見れば、贋作であるにしても、かなり西洋種の感じがする。或いは、日本の読書界に翻訳乃至は翻案された探偵小説を重訳して、ドイルの作品らしく装つたのではないかと、疑つてみてもあるのであるが、該当する作品を未だ想起し得ない。陳冷血の『福爾摩斯來華偵探案』（『時報』連載，年月・号数未詳）とか、シャーロック・ホームズとアルセーヌ・ルパンとが競争して犯人を追跡する趣きを綴つた程小青の『雙雄闘智録』あたりならば、題名からしても創作であることは判然とするのであるが、少し手の込んだものになると、なかなか判断が付き難い。この類のものは、尚他にも幾つかあるのではなからうか。

筆を原に戻す。上に引く『小説管窺録』の文に、「本社於『化身』一篇，早

已訳出，擬於刊行全案時列入」とあるところから推すと、『シャーロック・ホームズ全集』刊行の計劃は、既に清末時に於て小説林社内で立てられてゐたらしい。しかし、小説林社のそれは、徐念慈の病歿（光緒三十四年六月）と同社の解散との為に、遂に実現を見なかつた。

かくて数年の後，全集発行の試みは，更めて周瘦鵑・巖独鶴・程小青等の手で企劃立案され，実行に移されることとなつた。民国五〔1916〕年四月，中華書局から上梓された『福爾摩斯偵探案全集』十二冊がそれで，上記三人の他に，陳小蝶・天虛我生（陳栩）・劉半農・陳霆銳・天侔・常覺・漁火の七人が，翻訳に従事した。収めるところ，1914年までの長短篇合して四十四篇，文言ではあるが，何れも新しく訳出したものである。勿論，當時は『シャーロック・ホームズの事件簿』（*The Case Book of Sherlock Holmes*. 1927.）に収められた諸篇は書かれてゐないし，『シャーロック・ホームズ最後の挨拶』（*His Last Bow*. 1917.）中の諸篇も，大部分は既に発表されてゐるものの，未だ纏められ単行上梓されるに至つてはゐない。従つて，『最後の挨拶』に収められた「赤い輪」（*The Adventure of the Red Circle*）以下の七篇は，何れも初出の雑誌から華訳されたのであつて，書肆が「坊間雖有訳本，率皆東鱗西爪，未具全豹」と言ひ，「其中半為我国所未訳，即日本亦未訳有全璧也」と誇るのも，所以なきではない。現に，江戸川乱歩氏の如きも，

中国は探偵小説では日本より遙かに遅れてゐるといふのが常識だが，少くともホームズの翻訳では向ふの方が進んでゐたことが分り，ちよつと意外に感じた。日本でも『冒険』・『思出』・『帰還』などの主な作品は古くから訳されてゐたけれども，『最後の挨拶』をも含めて全訳されたのは，改造社『ドイル全集』が最初であつたかと思ふ。その改造社版が出たのは昭和六年末から七年末にかけてで，（これには第五冊『事件簿』も収められたとはいへ）前記中華の全集よりおくれること十数年である。と，驚いてゐる程である。²²⁾

22) 江戸川乱歩「福爾摩斯偵探案全集」（『探偵作家クラブ会報』昭和24年11月号）。後，『海外探偵小説作家と作品』所収）。尚，江戸川氏のこの見解には，かなりの誤解がある。以下の敘述で，それは逐々明らかとなるであらう。

江戸川氏は、更に若干の作品を抽いて、華訳名と改造社版の題名とを対照してあるが、全部に及んではゐないから、参考までに掲げて置かう。華訳名の下に線を引くのは、始めて華訳されたと見られる作品である。

血 書	<i>A Study in Scarlet.</i>	1887 単行
仏 国 宝	<i>The Sign of the Four.</i>	1890 "
情 影	<i>A Scandal in Bohemia.</i>	<i>Adventures</i> 1892
紅 髪 会	<i>The Red-Headed League.</i>	(Ibid.)
怪 新 郎	<i>A Case of Identity.</i>	(Ibid.)
弑 父 案	<i>The Boscombe Valley Mystery.</i>	(Ibid.)
五 橋 核	<i>The Five Orange Pips.</i>	(Ibid.)
丐 者 許 影	<i>The Man with the Twisted Lip.</i>	(Ibid.)
藍 宝 石	<i>The Adventure of the Blue Carbuncle.</i>	(Ibid.)
彩 色 帶	<i>The Adventure of the Speckled Band.</i>	(Ibid.)
機 師 之 指	<i>The Adventure of the Engineer's Thumb.</i>	(Ibid.)
怪 新 娘	<i>The Adventure of the Noble Bachelor.</i>	(Ibid.)
翡 翠 冠	<i>The Adventure of the Beryl Coronet.</i>	(Ibid.)
金 絲 髮	<i>The Adventure of the Copper Beeches.</i>	(Ibid.)
失 馬 得 馬	<i>Silver Blaze.</i>	<i>Memoirs</i> 1894
窓 中 人 面	<i>The Yellow Face.</i>	(Ibid.)
傭 書 受 給	<i>The Stockbroker's Clerk.</i>	(Ibid.)
孤 舟 浩 劫	<i>The Gloria Scott.</i>	(Ibid.)
窟 中 秘 宝	<i>The Musgrave Ritual.</i>	(Ibid.)
半 夜 槍 声	<i>The Reigate Squires.</i>	(Ibid.)
傻 背 眩 人	<i>The Crooked Man.</i>	(Ibid.)
客 邸 病 夫	<i>The Resident Patient.</i>	(Ibid.)
希 臘 舌 人	<i>The Greek Interpreter.</i>	(Ibid.)
海 軍 密 約	<i>The Naval Treaty.</i>	(Ibid.)
懸 崖 撒 手	<i>The Final Problem.</i>	(Ibid.)
絳 市 重 蘇	<i>The Adventure of the Empty House.</i>	<i>Returne</i> 1905

火 中 秘 計	<i>The Adventure of the Norwood Builder.</i>	(Ibid.)
壁 上 奇 書	<i>The Adventure of the Dancing Men.</i>	(Ibid.)
碧 巷 雙 車	<i>The Adventure of the Solitary Cyclist.</i>	(Ibid.)
隰 原 蹄 迹	<i>The Adventure of the Priory School.</i>	(Ibid.)
隔 簾 髯 影	<i>The Adventure of the Black Peter.</i>	(Ibid.)
室 内 槍 声	<i>The Adventure of Charles Augustus Milverton.</i>	(Ibid.)
剖 腹 葳 珠	<i>The Adventure of the Six Napoleons.</i>	(Ibid.)
赤 心 護 主	<i>The Adventure of the Three Students.</i>	(Ibid.)
雪 窖 沉 冤	<i>The Adventure of the Golden Pince-Nez.</i>	(Ibid.)
荒 村 輪 影	<i>The Adventure of the Missing Three-Quarter.</i>	(Ibid.)
情 天 決 死	<i>The Adventure of the Abbey Grange.</i>	(Ibid.)
掌 中 倩 影	<i>The Adventure of the Second Stain.</i>	(Ibid.)
葵 崇	<i>The Hound of the Baskervilles.</i>	1902 (<i>Strand Mag.</i> etc.)
魔 足	<i>The Adventure of the Devil's Foot.</i>	Dec., 1911
紅 園 会	<i>The Adventure of the Red Circle.</i>	Mar.-Apr., 1911
病 詭	<i>The Adventure of the Dying Detective.</i>	Dec. 1913
竊 凶 案	<i>The Adventure of the Bruce-Partington Plans.</i>	Dec., 1908
罪 藪 ²³⁾	<i>The Valley of Fear.</i>	Sept.-May., 1914-15

この全集は、民国十二[1923]年までに、二十版を重ねたが、その頃は、既に白話文学の運動も軌道に乗つてゐた。かくて、民国十四[1925]年、大東書局から『福爾摩斯新探案全集』四冊が上梓せられるが、これは「皇冕宝石」(*The Adventure of the Mazarin Stone.*)・「雷神橋畔」(*The Problem of Thor Bridge.*)・「匍匐之人」(*The Adventure of the Creeping Man.*)・「吮血記」(*The Adventure of the Sussex Vampire.*)等後に『シャーロック・ホームズの事件簿』(*The Case Book of Sherlock Holmes.* 1927.)に収められた作

23) 寒光の『林琴南』は、『歇洛克奇案開場』(*A Study in Scarlet.*)を解説した末に、「此書即商務出版王汝荃所訳的『歴劫恩仇』、『福爾摩斯偵探案全集』訳名爲『罪藪』」と記してゐるが、これ亦誤。“*The Valley of Fear*”であらう。

品を含む九篇を、白話訳によつて収めたものであつた。訳者は、周瘦鵬・張舎我・張蕨蘋の三人、勿論、当時は未だ『事件簿』は上梓せられてゐないから、上記の諸篇は、何れも雑誌から直接訳出されたものである。超えて、民国十六[1927]年には、程小青等による『福爾摩斯探案大全集』が、世界書局から出版された。これは、白話による全作品の改訳であるが、今はその事実を記すに止める。²⁴⁾

(なかむら ただゆき)

李伯元の『南亭四話』について

麦生登美江

はじめに

李伯元(1867—1906)の『南亭四話』(以下『四話』と略す)は1925年に出版された。¹⁾ それについて、李伯元の友人、古稀老人は『四話』の序において以下のように述べている。少し長いが李伯元の経歴の紹介を兼ねて引用しよう。

南亭四話、一聯話、一詩話、一詞話、一叢話は毗陵²⁾の李伯元徵君の撰である。徵君は見聞は広く、学問は深く、詞章にはとくにすぐれている。一度、経済特科に推せんされたが応じず、上海に遊んで遊戯報を刊行して小報の創始者となり、その風語華言は今に至るも人口に膾炙している。暇がある時は著述をして自ら娛しんでいた。死後、遺稿は多く散失したが、南亭筆記の一書は大東主人がすでに刊行し³⁾、読書人はみなそれを珍重している。ここにまたその四話を得た。(1頁)

『四話』は李伯元の死後19年も経過してから出版されたせいもあるのか、彼の小説ほどには有名でなく、内容はおろか、この書名を紹介している研究論文

- 1) 孔另境輯録『中国小説史料』古典文学出版社 1957年 上海 237頁
但し、本稿で使用したテキストは、清・李宝嘉撰『南亭四話』——詩話、聯話、詞話、叢話——中華民国60年4月初版広文書局有限公司発行のものである。頁数はこのテキストの頁を示す。またAは莊諧詩話を、Bは莊諧聯話を、Cは莊諧詞話を、Dは莊諧叢話を示す。
- 2) 江蘇省武進県
- 3) 1924年刊。1)の『中国小説史料』に同じ。未見。

24) 范煙橋「民国旧派小説史略」(魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』所収)・同『中国小説史』第五章第二節「最近之十五年」。

清末探偵小説史稿(二)

— 翻訳を中心として —

中村忠行

(二) その他の英・米作家と作品

(1) アーサー・モリスン

ドイルほどの人気は集めなかつたが、比較的早くから紹介され、かなりの反響があつた作家に、アーサー・モリスン(Arthur Morrison. 1863-1945)がある。彼の作品は、ドイルに較べると地味で、才気煥発といつたところがなく、又フリーマン(Richard Austin Freeman. 1862-1943)の作品の様な科学性にも欠けてゐる。それが災ひしてか、我が国では余り歓迎されてゐない。作品の紹介の如きも、大正十一(1922)年八月の『新青年』増刊号に掲げられた延原謙訳の『十一の瓶』(後、改題『緑のダイヤ』、原作は“Green Eye of Goona.” 1904)あたりが最初のものであるらしく、次いで同誌大正十三年七月の増刊号に、田中早苗訳『ヒュイット探偵』(原作は“The Case of Laker, Absconded.” 1895)、昭和四年(1929)十二月刊延原謙訳『モリスン集』(博文館版『世界探偵小説全集』第八巻。上記『緑のダイヤ』及び『海底の探偵』“The Nicobar Bullion Case.” 1895を収む)、『新青年』昭和七年(1932)八月の増刊号に訳載された妹尾韶夫訳『稀代の美術品』(“The Stanway Cameo Mystery.” 1894)などが続くが、極めて散発的であり、読者の反響もさして大きなものではなかつた。されば、江戸川乱歩氏の『海外探偵小説・作家と作品』の如きも、彼の名を削つてゐる位である。しかし、ドイルに次いで、シリーズものを書いて成功した作家として、モリスンの名は逸することは出来ないし、「シャーロック・

ホームズに続く幾多の亜流の中で、一頭抜ん出たもの」(S. S. Van Dine.)として、探偵ヒューイットの名を忘れることは出来ない。その意味で、モリスンの作品をいち早く紹介した清末翻訳文学界の指向したところは、決して誤つてはゐなかつたと言へる。

そもそも、モリスンが探偵小説に筆を染めるに至つたのは、全く偶然からであつた。これより前、『ストランド誌』にホームズものを書き続けてゐたドイルが漸く仕事に倦み、これを打切るべく、「最後の事件」(1893年12月)でホームズをライヘンバッハの滝壺で行方不明にしてしまつた。突然の打切りに、不満を訴へる読者の声は予想以上に大きく、困惑した編輯者は、急遽その代役として、モリスンその他二三の作家に白羽の矢を立てたのであつた。これが、やがて輩出する無数の名探偵——「シャーロック・ホームズの敵対者たち」^{ライバル}を産むそもそもの切懸である。

当時、モリスンは、未だロンドンではEast Endに取材したエッセイ風な物語集『みすぼらしき通り』(“Tales of Mean Street.” 1894)を纏めつつあつた時代であるが、はやくもその才能をウィリアム・ヘンリー(William Ernest Henley. 1849-1903)に認められ、所謂「ヘンリー・グループ」の一員として、漸く文壇に羽撃かうとしてゐた矢先のことである。序でを以て言へば、ウィリアム・ヘンリーは、詩人・劇作家・批評家として知られ、当時は『ナショナル・オブザーバー』(“The National Observer.”)紙の主筆として、謂はば文壇の大御所的な存在であつた。従つて、その周辺に集つた人々は、サー・ジェイムズ・バーリー(Sir. James Matthew Barrie. 1860-1937)、ラドヤード・キップリング(Rudyard Kipling. 1865-1936)、ロバート・ルイス・スティヴンソン(Robert Louis Stevenson. 1850-1894)、トマス・ハーディ(Thomas Hardy. 1840-1928)など、何れも当代一流の文壇人ばかりであつた。されば、モリスンが、そのグループの一員として迎へられたことは、既に文壇への道が開かれたと言つても差支へない。今一つ、ロンドンのEast Endと言へば、今日では貧民窟の代名詞の様に受取られ勝ちであるが、モリスンが育つた当時は、1860年代の区劃整理の後だけに「最もよく整備された労働者の住宅街」と言つた印象の方が強く、喧嘩や刃傷こそ絶えないまでも、下町特有の人情濃やかな庶民

の街であつた。上記の『みすぼらしき通り』はじめ、『ジェーゴの子』(“*A Child of the Jago.*” 1896) など一連の作品は、かうした下町に住む人々の生活を生々と描いた作品で、ユーモアとペーソスに満ち、何処となくディケンズ (Charles Dickens. 1812-70) を想はせるものとして、歓迎されたのである。されば、探偵小説の執筆といつたことは、モリスンとしては必ずしも本意とするところではなく、後年その作品の再版を肯んじなかつたといふことも、その辺に理由があるかと考へられる。¹⁾

それはともかく、かくて執筆されたその第一作「レントン^{クロフト}屋敷盗難事件」(“*The Lenton Croft Robberies.*”) は、ホームズものの場合と同様に、シドニー・パジェット (Sidney Paget) の挿絵を添へて、『ストランド誌』1894年3月号を飾る。ヴァン・ダイン (Van Dine), ヒッチコック (Hitchcock), クイーン (Ellery Queen), 江戸川乱歩氏などは、何れもモリスンの代表的作品として、これを挙げる²⁾ が、如何にもそれに値する気の利いた作品で、鸚鵡にマッチ棒を銜へさせるといふ趣向も面白い。これを機に、モリスンは、同年九月まで、七篇の短篇を『ストランド誌』に書き続けるが、それを結集したのが、第一短篇小説集『探偵マーティン・ヒューイット』(“*Martin Hewitt, Investigator.*” 1894) である。

翌1895年の一月から、モリスンは執筆の舞台を専ら『ウィンザー誌』(*The Windsor Magazine.*) の方に移し、引き続き探偵ヒューイットを主人公とする小説を書いた。第二短篇集『マーティン・ヒューイットの事件簿』(“*Chronicles of Martin Hewitt.—Being the Second Series of Martin Hewitt, Investigator.*” 1895), 及び第三短篇集『マーティン・ヒューイットの冒険』(“*Adventures of Martin Hewitt.—Third Series.*” 1896) に収める各六篇の短篇は、凡て同誌に掲げられたものである。契約によつて、それらは1895年と1896年の一月から六月までの号に連載された。一年の前半は探偵小説を書き、後半は他

1) P. J. Keating: Arthur Morrison. (In “*A child of the Jago.*”, Ed. with a biographical study by P. J. Keating., London MacGibbon & Kee. 1969 ect.)

2) Van Dine ed.: “*The World's Great Detective Stories.*” (1927); Hitchcock ed.: “*The Pocket Book of Great Detectives.*” (1941); E. Queen ed.: “*101 years' Entertainment.*” 等々の傑作集に収める。

の仕事に力を傾注するといふのも、モリスンらしい遣り方であつた。その後、モリスンは、暫らくヒューイット物の筆を絶つが、1903年に至つて再び筆を起した。『赤い三角形』(“*The Red Triangle, Being some further Chronicles of Martin Hewitt Investigator.*” 1903) に収める六篇がそれで、『ロンドン誌』(*London Magazine*) に掲げられた。インドからロンドンに來襲した催眠術使ひの怪盗を相手に戦ひを挑むヒューイットのこの物語は、明らかにアメリカに於けるニック・カーター物の流行の影響を受けた作品で、それだけに探偵小説的な要素は薄く、又個々独立した作品ではなく、所謂「続き物」乃至は「捕物帖」の形をとつてゐるのが、特徴である。

とまれ、如上の経緯から執筆されたモリスンの探偵小説が、当初からドイルのそれを意識してゐることは、更に多言を必要としまし。探偵ヒューイットはホームズの、新聞記者ブレットはワトソンの、それぞれの変形であるし、犯行現場の遺留品の正確緻密な観察による謎解きや、事件関係者のアリバイの確認によつて容疑者を絞つて行くヒューイットの捜査法などは、全くホームズのそれに異ならない。ヒューイットの特技といへば、労働者や悪党たちのスラング・ジプシーたちの用語に通じてゐること位で、探偵としては、むしろ小粒でさへある。その辺に作者の限界があるのは確かだが、小粒なのは、決して模倣なるが故ではない。作者は、ヒューイットをして、「普通の能力の適当な活用以上に、特別な捜査のシステムを有たない」と語らしめてゐるが、彼はホームズのように、居心地のよい書齋を有つた天才的な探偵でもなければ、ソーンダイクのように、立派な研究室を有つ法医学の権威でもない。彼は、ストランド街に近い横町に貧弱な事務所を構へてゐる平凡な市井の探偵に過ぎないので、要するに、「風貌も態度もホームズ流の超人的探偵への反動」(Julian Symons: “*Bloody Murder.*”) として、登場するのである。その意味で、モリスンは、「足の探偵」バケット警部を描いたディケンズや、カフ巡査部長を案出したコリンズ (William Wilkie Collins. 1824-1889) の流れを汲み、ジョセフ・フレンチ警部の産みの親クロフ (Freeman Wills Crofts. 1879-1957) の先輩作家としての役割りを果してゐると言へる。

モリスンは、これらの活動によつて、王立文学協会の評議員に選ばれたが、

今一つ忘れてならないのは、東洋美術——就中、日本と中国との絵画の蒐集家として、著名な存在であつたことだ。その労作『日本の画家たち』(“The Painters of Japan.” 2 Vols. 1911) は、浮世絵研究の古典的名著として高い評価を受け、確か邦訳もあつた筈である。晩年、彼はバッキンガムシャー州の田舎に隠棲し、これらの美術品に親しみつつ余生を送つた。その蒐集品は、一部が1914年エバンス卿 (Sir. Watkin Guynne Evans.) によつて買取られ、大英博物館に寄贈され、残りの蒐集品も1956年来数次にわたつて、未亡人から同館に寄贈された。

さて、華訳されたモリスンの探偵小説の主要なものは、

(華 訳 名)	(原 著 者)	(訳 者)	(発 行 所)	(刊 年)
馬丁休脱偵探案	英・馬利孫	奚 若	小説林社	光緒三十一年 (1905)
偵探小説 神樞鬼藏録	英・阿瑟毛利森	林 琴 南 魏 易	商務印書館	同三十三年五月 (1907)
海衛偵探案	英・模利孫	商務・編訳所	同上	同三十四年四月 (1908)

(阿英氏の『書目』には、著者を「毛銳孫」とする。さうした本もあるか。)

の三点である。これらのうち、『馬丁休脱偵探案』は未見に属するが、阿英氏の『書目』には、次の十篇を挙げてゐる。蓋し、後に引く『小説管窺録』の



「神樞鬼藏録」の項に、「焼手案」(阿英氏の『書目』では第六案)を第七案として以下第十一案まで数へ、又『海衛偵探案』にのみ見える五篇を指すのであらうか、「尚有五案」と記してゐるところから推すと、奚若の訳に係るものが尚一篇あり、第二冊の第二話と第三話との間に置かれてゐたに相違ない。今、その作品名を詳らかにし得ないのは残念である³⁾が、爾余のものについて、原作を推考すれば、次の如くである。

3) 阿英氏の書目『醒華小説集』の項に、「鸚鵡案 英・馬利孫著 奚若訳」を録するが、これは「克落夫脱邸第失竊案」を改題したものであらう。

(華 訳 名)	(原 作 品 名)	(所収作品集略号) (作 品 番 号)
第一冊		
克落夫脱邸第失竊案	The Lenton Croft Robberies.	I-No. 1
鎗斃福拉脱命案	The Case of the Flitterbat Lancers.	III-No. 1
黒人被殺失屍案	The Affair of the Tortoise.	I-No. 7
第二冊		
查失魚雷艇凶案	The Case of the Dixon Torpedo.	I-No. 4
以維考且其之秘密案	The Ivy Cottage Mystery.	II-No. 1
〔逸作品名歟?〕		
燒 手 案	The Case of the Missing Hand.	II-No. 4
第三冊		
瘋 人 奇 案	The Case of the Lost Foreigner.	II-No. 6
銀 箱 案	The Nicobar Bullion Case.	II-No. 2
銀行失竊案	The Case of Laker, Absconded.	II-No. 5
(哈爾富特) 遺囑案	The Holford Will Case.	II-No. 3

‘Ivy Cottage’を「以維考且其」と音訳するのは許されるとしても、‘Lenton Croft’を「克落夫脱邸第」とするのは如何であらう。‘Croft’を人名(姓)と考へてゐたとすれば、それは自ら翻訳の質の問題ともならう。上述の如く、奚若には他に色々な訳業もあつて、かなり語学の達者な人であつたと思はれるのであるが。

それはともかく、以上の推定には、『小説管窺録』の次の記事が参考になる。併せて、『神樞鬼藏録』の内容をも窺ひ知る資料であるから、一寸掲げて置かう。文中に加へた原作品名は、筆者のさかしらである。

神樞鬼藏録 商務印書館發行

林紓，魏易同訳。自序謂独未訳偵探一種，尽十余日力訳成。又云，「読海上所訳包探諸案，則大驚喜」云云。六案分上下兩卷，細細検之，即本社上年所發行之『馬丁休脱偵探案』也。対核如下；

「窗下伏屍」即「以維考且其秘密案」(五案)
The Ivy Cottage Mystery. (II-No. 1)

「霍而福德遺囑」即「哈爾富特遺囑案」(十一案)

The Holford Will Case. (II-No. 3)

「断死人手」即「烧手案」(七案)

The Case of the Missing Hand. (II-No. 4)

「獵甲」即「銀行失竊案」(十案)

The Case of Laker, Absconded. (II-No. 5)

「菲次魯乙馬圈」即「瘋人奇案」(八案)

The Case of the Lost Foreigner. (II-No. 6)

「海底亡金」即「聶可勃銀箱案」(九案)

The Nicobar Bullion Case. (II-No. 2)

尚有五案，未經林君訳出。想本社所印本，林君未曾寓目，否則不為此駢拇枝指之拳也。久擬輯一訳小説検査表，將原書名，原著者，今定名，出版年月，訳者姓氏，全書大意一一詳載，惜事冗因循未果，如成，必有裨於訳者。

『訳書には，原著者・原書名・出版書肆を明記させ，新聞紙上に広告し，毎年聯合総目録を編輯出版せよ』との意見は，東海覚我も提唱するところであつた⁴⁾が，清末時には殆んど実行されず，為に今日では原典の追究が至難の作業となつてゐることは，更に多言を要しない。現に，蒲梢⁵⁾の『漢訳東西洋文学作品編目』(1929年，真美善書店刊)が，『神枢鬼蔵録』の原典を“The Hole

4) 東海覚我「余之小説観／四，小説之題名」(阿英編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』所収)。もつとも，『小説管窺録』の筆者は詳らかでなく，東海覚我を含む数人が，交替で執筆した可能性がある。とすれば，或いは彼此同一人であるかも知れない。

5) 「蒲梢」の本名については，「徐調孚」(袁湧進編『現代中国作家筆名録』)・「曾虛白」(橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』)・「曾樸」(馬泰来「林琴南所訳小説書目」)の三説があつて，必らずしも明確ではない。これについて，樽本照雄氏が曾虛白氏に質したところ，「漢訳東西洋文学作品編目是否拙作。本人從未著手此項著作，橋川先生顯有誤會。至蒲梢何人，實非素識」といふ返信を得られてゐるから，同氏はもとより曾樸説も否定さるべきか。徐調孚(1898—?)は，浙江乍浦の人。「文学研究会」に属し，『文学週報』・『小説月報』の編輯に従つた。児童文学作家として著はれ，『木偶奇遇記』・『日本故事集』・『我的童話集』等がある。因みに，蒲梢には，「漢訳東西洋文学作品編目」(張静廬輯『中国現代出版史料』甲編所収)の他に，「初期新文芸出版物編目」(同上)・「中訳蘇俄小説編目」(同・乙編所収)がある。

in the Wall”と誤認して以来，寒光の『林琴南』・朱羲胃の『春覚齋著述記』(『林畏廬先生学行譜記』四種之二)・楊家駱の『民国以来出版新書総目録提要』・国立中央図書館編『近百年来中訳西書目録』・韓廸原『近代翻訳史話』(翻訳理論叢書之二)等々凡てその誤りを踏襲し，僅かに馬泰来氏の「林琴南所訳小説書目」(『出版月刊』第二卷第十二期)が“Adventures of Martin Hewitt”?——つまりヒューイット探偵談の第三集かと疑問を投げかけてゐるけれども，これ亦正確ではない。モリスンの第二探偵小説集『マーティン・ヒューイットの事件簿』の完訳で，その第二話を巻末に置き換へただけのものであることは，上に示すが如くである。

最後の『海衛偵探案』も，蒲梢が“Tales of Mean Street”とするのは誤りで，第三探偵小説集『マーティン・ヒューイットの冒険』から第一話「フリッターバット・ランサーズ事件」(“The Case of the Flitterbat Lancers.”)を除いたものに，第一探偵小説集『探偵マーティン・ヒューイット』中の二篇，第二探偵小説集『事件簿』中の一篇を加へ，計八篇を訳出したもので，その内容は，

(華訳名)	(原作名)	(作品集略号 作品番号)
医生冤	The Case of the Late Mr. Rewse.	III-No. 4
船主斃命	The Case of the Dead Skipper.	III-No. 2
妒婦洩機	The Case of Mr. Geldard's Elopement.	III-No. 3
少婦竊兒	The Affair of Mrs. Seton's Child.	III-No. 5
癲人	The Case of the Lost Foreigner.	II-No. 6
秘密魚雷凶	The Case of the Dixon Torpedo.	I-No. 4
彫璧	The Stanway Cameo Mystery.	I-No. 6
麦德里礼堂	The Case of the Ward Lane Tabernacle.	III-No. 6

の如くである。ヒューイットものは，短篇十九篇，続き物一篇六話があるが，これで短篇のうち十六篇が華訳されてゐることになる。就中，「迷子の異邦人事件」“The Case of the Lost Foreigner.”の如き，三人とも共通にこれを



訳してゐるのは、当代に於ける虚無党小説の流行と、関係があるに違ひない。今、ここに奚若訳を比照することが出来ぬのは残念であるが、後二者による同一個所の一節を、訳例として掲げて置く。蓋し、原書初印本三百二頁七行以下三頁ほどに該当する。

希威志検其紙。方審省，忽見其人徐歩進牆隅乱草上。希威志如有所悟，擲紙力挽其臂，不聽行，即以人授我曰，汝守其人勿動，此乱草中吾未之檢閱。言已遂掀其草，草尽有麻布一片，中覆麪包一巨塊，凡十二方聯為一塊者，与車中麪包無別，但以底仰向。希威志曰，在是矣。爾可勿動。遂復檢取地上之紙曰，此紙能愬我，省我四覓也。謂余曰，白勒志我方欲告汝，以搜索急故不能遽言。汝今試觀此二書，此書中即無君党埋放炸彈之人也。此仰翻之麪包，每塊中必納一炸彈。此彈名曰反面炸彈，偶一翻之，藥即立発，一動人与屋俱燼矣。今爾試往覓一四輪之車，引車直至門内，能避人耳目者為尤佳。余出，果得車。余此時悟車中所以用彈簧之墊，即防彈炸。此人決為無君党，可以不疑。是必製此後，分遣其党人四嚮部署，同時挙事，深可駭也。余曾聞此彈至凶險，無待一繩之微火，中存強水之管，就中生熱，発電。今倒置者，強水下注，不復騰上，若立反之，則強水之性即発，藥炸矣。夫以麪包納炸彈，可於光天化日之下，攜之往反，弗生人疑，大致須臾之間，必分党徒四出，翻其麪包於要害之處，藥必数分鐘始発，叛党尚可倖逃，其為計巧矣。其以彈簧之褥襯麪包者，正防其震撼而発其電，且實麪包必斜排而堅擠之，俾勿遽動，亦其用心縝密之處，若拋今而論，事体了了。唯不審希威志胡以至此，則為余所不敢知。（林訳「菲次魯乙馬圈」）

海衛急視其紙訖，乃挽罪人之肩，使之離其所立處，其下為乾草一堆。曰，吾等尚未查勘此地，乃俯身至屋隅，揭去乾草，而囊布現。再揭其布，則余等所前見之麪包，又歴歴在目矣。每一方為十二塊，所異者麪包之底皆向上，一一倒置。海衛曰，得是足矣。然宜自慎，切不可悞觸之。乃以罪人袋中之紙示余曰，此紙益吾事不少矣。拉脱君，試讀此紙之一二字，即知為虚無党与炸彈之事。吾早料此麪包之中，必藏有炸彈。然脱無此紙，吾事尚不能如是順手也。今請君出雇一四輪車。但須慎密，勿為他人所見。余即從言雇車。蓋所見之麪包貨車，及彈機之墊，至是始明其故。虚無党人，曾有同時

挙行炸彈之計者。余固嘗聞之，党人所用之彈，皆係倒彈。彈中有一管，内盛醋酸，塞以棉絮，炸時不用引火。但以彈倒置之，其藥猝発，今則製法愈精，以彈納麪包中，載諸貨車，可随處分送。雖光天化日之下，更無人能扶其隱者。挙事之日，祇須一人倒置其麪包於僻静之区，置畢引去，数分鐘間，炸彈発矣。至於車中之彈機墊，所以防錯酸受車之振撃而爆発，而其長麪包横置車之兩端，不突以彈，亦所以護其他有藥之麪包也。以余觀之，此事甚明，但不識海衛之意当作何解耳。

（商務・編訳所訳「癡人」）

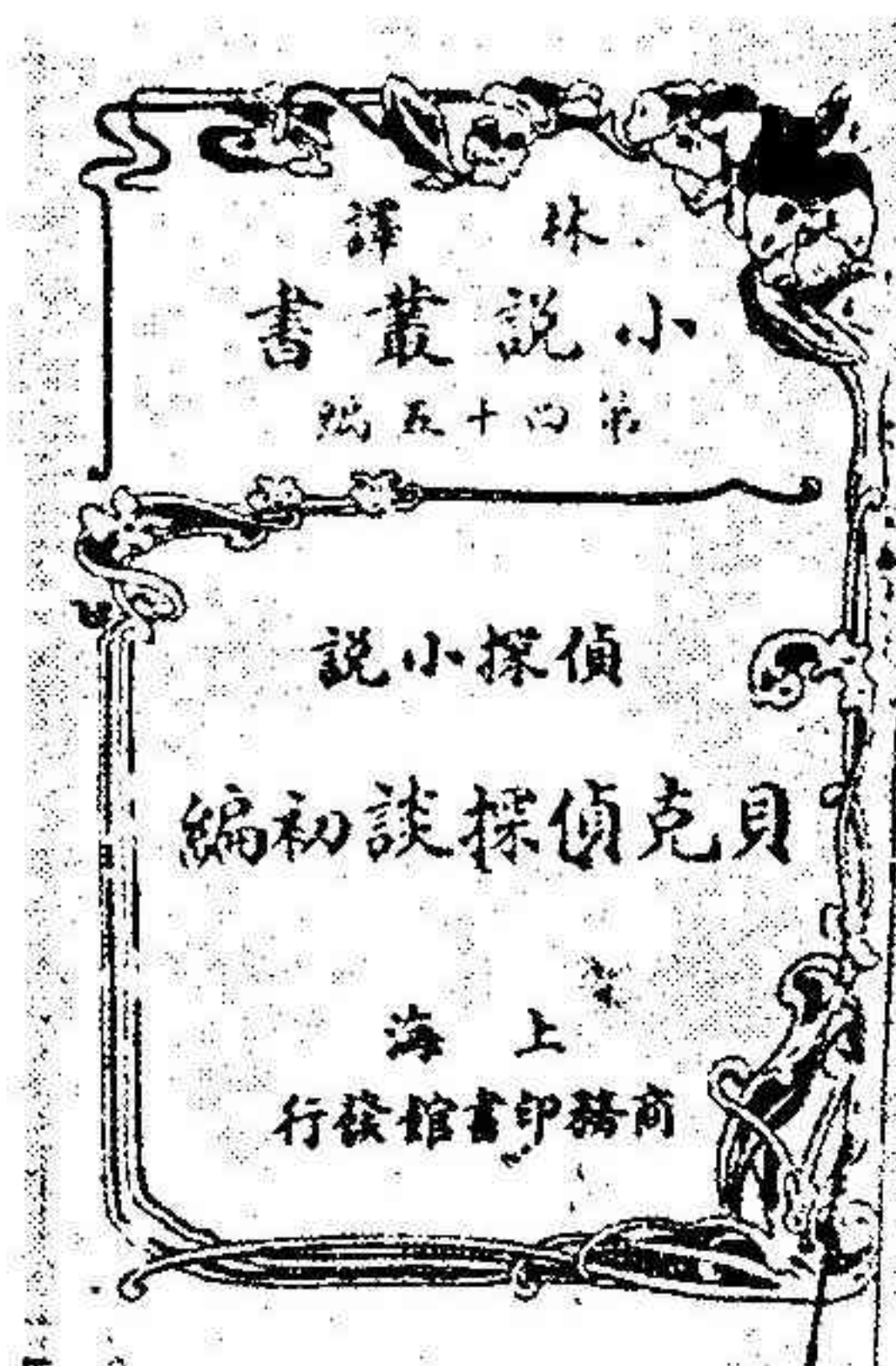
(2) 林訳小説に見る探偵小説

(A) ボドキンとオルツィ

『神枢鬼蔵録』は、林琴南自らも序文に記してゐる様に、彼としては最初の探偵小説の翻訳であり、次いで上述の『歇洛克奇案開場』の訳出となる訣であるが、彼にはこの他にも尚幾つかの探偵小説の翻訳がある。

(譯名)	(原作者名)	(訳者)	(發行所)	(刊年)
貝克偵探談(初編)	馬克丹諾保德慶	林琴南 陳家麟合訳	商務	宣統元年 月 (1909)
(M. McDonnel Bodkin: <i>The Quests of Paul Beck.</i> 1908 ?)				
同 (続編)	同	同	同	民国三年六月 (1914)
(Ibid: <i>The Capture of Paul Beck.</i> 1909 ?)				
十 万 円 (元) [佚 名]			上海偵探 小説社	民国八年七月 (1919)
(未見。原作者・作品名共に未詳)				
眇郎喋血記	阿 克 粹	林琴南 陳家麟合訳	(未 刊)	
(未見。Orczy の作品だが，原作未詳。)				

『貝克偵探談』の作者ボドキン(M. McDonnel Bodkin.)は、アイルランドの弁護士で、晩年は推されて勅選弁護士(Queen's Counsel)となつた。博識多才、法曹界・政界に活躍して重きをなしたが、傍ら文筆をよくし、多くの著書を残した。それも『無軌道な結婚』(“A Madcap Marriage.” 1906)・『著聞するアイルランドの裁判事件』(“Famous Irish Trials.” 1918)・『有罪か無



罪か』(“*Guilty or Not Guilty.*” 1924) といった専門の司法関係の著書から、自伝的回想録『一アイランド判事の回想』(“*Recollections of an Irish Judge.*” 1914)・『ゴールドスミスの時代』(“*In the Days of Goldsmith.*” 1903) といった文学・歴史に跨る著作、それに長短合せて廿数篇の小説と極めて多彩である。その小説にしても、『エドワード・フィツジェラルド公』(“*Lord Edward Fitzgerald.*” 1896) の様な重厚な伝記小説もあれば、『手品』

(“*White Magic.*” 1897)・『当代ロビン・フッド』(“*A Modern Robyn Hood.*” 1903) といった肩の凝らない読み物、将又「ポール・ベックもの」と呼ばれる一連の探偵小説もあるといった按配で、正に縦横無尽といった観がある。勅選弁護士の手書きを有つ人で、探偵小説にまで筆を染めた人は、彼を措いては、他にない。

彼が産み出した親指探偵ポール・ベックは、風変りな探偵であつた。若いのに似合はず太つちよで、赤ら顔、縮れた褐色の髪に、剽軽な目鼻だち、どう見ても牛乳配達夫か何ぞで、探偵らしい面影は何処にもない。その探偵法にしても、ホームズのそれとは正反対、直観よりは常識を重んじ、天才的な閃きよりも熟達した経験に (by rule of thumb) 物を言はせるといふ。その第一作に、『経験法探偵ポール・ベック』(“*Paul Beck, the Rule of Thumb Detective.*” 1898) と題する所以である。作者は、ついで『女探偵ドーラ・マール』(“*Dora Myrl, the Lady Detective.*” 1900) を書き、巻末で彼女をポール・ベックと結婚させたが、最後の『若きベック』(“*Young Beck.*” 1911) では、二人の間に生れたポール・ベック二世を活躍させる。女性探偵の登場は、作者不明の『一女性探偵の体験』(“*The Experiences of a Lady Detective.*” 1861) あたりに遡り、ペチコート警察官ミセス・パースカル (Mrs. Paschal) の物語以下、ドーラ・マールが登場するまで幾篇かあるが、それらは主人公を男性から女性に置き換へただけのものにすぎない。ボドキンも、それを一歩進め新しい展開を試みたので、かくて以上の三部作は、「ミステリー小説の中に誕生し

た初の探偵一家の物語」となつたのである。⁶⁾

ボドキンは如上の三部作を書く間にも、短篇集『ポール・ベックの探偵談』(“*The Quests of Paul Beck.*” 1908) や『ポール・ベック捕り物帖』(“*The Capture of Paul Beck.*” 1909) を書いた。林琴南が訳したのは、この二書であらう。今、筆者のノートの不備で、各篇の原題名を示すことが出来ないのは遺憾であるが、華訳には、初編に「尸言」・「因微見著」・「珠寶墜水」・「西班牙罪人」・「毬場伏尸」・「紅玉被盜」の六篇、続編には「手隠不見」・「血印」・「破案迅捷」・「鬼海」・「窮盜所往」・「舟行紀程」の六篇を収める。以下、訳例として、「毬場伏尸」の一節を掲げる。

徳人聞之、頗驚訝。貝克且曰、吾自覺得小毬時、已思得一事。君亦知打毬中有所謂鉤魯甫之戲乎。徳人曰、知之。貝克曰、既知此戲。則自知一事。君当知吾在第二毬場中、得此小毬、即知沙木敷金必未至第二毬場之遠。果人至第二毬場、則此毬必遠越、不能即落第二窟中、計沙木之立、必在絶遠之地。毬行而沙木已為人撲。吾尤至第二毬場窟次、已頗得二人争競之痕迹。雖足印所及、痕迹都平。然自吾眼中覘之、固了了可弁、以間花野草、為人所拔、似痛極執之以自救者。其旁石上尚模糊有血痕。吾因之推求此人死時、又必在第二毬場之上、既死則移尸至於第十七場中、吾思索必屬包魯滕所殺、徳人曰、否否。汝言包魯滕七点半尚在客寓、而死人之表針、則八点有半、始死。寔能謂謀者即為包魯滕。貝克以目視。徳人曰、先生恕吾罪。若果為偵探家、亦必居上列、所發問者、蓋至細切、此表偽也。徳人訝曰、表胡能偽。貝克曰、先生不悉吾言、吾覘表時、玻璃破而表面乃無損、而表弦又断、相之、非擊時所断、握而断之也。此兇手行事乃至巧無倫、必取表移其針至於八点有半。針定則断其弦、即恃表而行其偽。先生以為如何。

『十萬元』及び『眇郎喋血記』は、朱羲胄の『春覚齋著述記』によつて、その存在を知り得るもので、後者には「稿存商務印書館、未刊」といふ注記がある。何れも未見の為多くを語るを得ないが、後者については、一寸触れて置く必要がある。

6) Ellery Queen: “*Queen’s Quorum.*” p. 17, p. 41.

この原作者「阿克粹」は、オークシイと訓むべきものであらう。オークシイは即ちオルツィ(Emmuska Baroness Orczy. 1865-1947)で、英語風に発音表記したものと考へられる。訳者には、別に『英国大俠紅鬃路伝』(後述)の訳があるが、そこでは「^(ママ)法国男爵夫人阿克西」としてゐる。とすれば、その原典は「隅の老人シリーズ」と呼ばれる三つの短篇集——『隅の老人』(“*The Old Man in the Corner.*” 1909)・『ミス・エリオット事件』(“*The Case of Miss Elliott.*” 1905)・『解かれた結び目』(“*Unravelled Knots.*” 1925)——か、乃至は『スコットランドの婦人部長モーリィ嬢の探偵談』(“*Lady Molly of Scotland-Yard.*” 1910)あたりに求むべきであらう。『解かれた結び目』に収める「メイダ・ヴェールの守銭奴」(“*The Miser of Maida Vale.*”)の百万長者ソートン・アシュリーの長男は不具者だつた筈であるが、^{すがめ}眇眼であつたかどうか。

原作者オルツィ——我が国では、一般にかう呼ばれてゐる⁷⁾——は1865年、ハンガリーのタルナオールズで生れた。その家は、ハンガリー創建当時の国民的英雄アルパード(Arpad. ?-907)の時代まで遡ることが出来るといふ由緒ある家で、父フェリックス・オルツィ男爵(Baron Felix Orczy)は作曲家乃至は指揮者として令名があり、ワグナー・リスト・グノーなど著名な音楽家も、よくその家に入出したといふ。少女時代、農民暴動の難を避け、一家はブリュッセル、ついでパリと居を移し、同地で初期の教育を受けた。1881年ロンドンのヒザリ美術学校に進んで絵画を専攻し、ロイヤル・アカデミーにも数回出品したことがあるといふ。1894年、彼女は美術学校で知り合つたモンターギュ・バーストウ(Montagu Barstow)と結婚し、英国に帰化するが、暫らくは平凡な主婦の生活を続けてゐたらしい。

彼女が、小説に手を染めたのは四十歳近くにもなつてからで、処女作『皇帝の蠟燭立て』(“*Emperor's Candlestick.*” 1899)で、いちはやくその才能を認められた。次いで夫と共に創作した戯曲『紅はこべ』(“*The Scarlet Pimpernel.*”)

7) Orczy は、我が国では普通オルツィと表記され、この方が通りがよいが、彼女を英国の作家と見る立場から、英語風にオークシイと記す人もある。しかし、手許の“*Webster's Biographical Dictionary.*”でも、<ôr'tsi>と発音表記してゐるから、今は旧に従ふ。

は、1902年上演されて非常な好評を博した。彼女は、1905年これを小説に書き改め、息つく間もなく一連の「紅はこべもの」を書いた。彼女の本領は、むしろこれら一連の作品にあると言つてよい。その自伝『命の絆』(“*Links in the Chain of Life.*” 1947)の中で、『隅の老人』に触れるのは僅かに二箇所であるといふのも、彼女自らが、探偵小説家と目されるのを、厭うてゐたからに他なるまい。それにも不拘、彼女は、五十篇近くもの探偵小説を書いたのであつた。

彼女は、この分野で、「安楽椅子の探偵」(Armchair detective)といふ一つの型を定着させた。勿論、その先蹤としては、ポウの「マリー・ロジェの謎」(E. A. Poe: “*The Mystery of Marie Roget.*” 1841)に登場するオーギュスト・デュパンやシールの『ザレスキー公爵』(M. P. Shiel: “*Prince Zaleski.*” 1895)で語られる公爵その人がある。が、これを一つの型として定着させたのは、彼女だと言つてよい。——ロンドンは、場末の何処にでもある様なパブの隅に、何時も定まつた席を占めてこの老人は坐つてゐる。格子縞のアルスター外套を着て、大きな角縁の眼鏡をかけ、細長い首と大きな耳が異様に人の目を惹く。この老人の氏も素性も、読者には語られない。彼は、何時も複雑に結んだ紐を解きほぐしながら、婦人記者ポリー・バートン嬢が持ち込む迷宮入り事件を、次々と解明してしまふ。時として、彼は事件現場を検証したり、裁判を傍聴したりする事はあるけれども、殆んどの場合は事件の傍観者と言つてよく、素人探偵の立場を崩さない。まことに面白い設定だが、舞台が「ABCショップ」といふ限られた場所だけに動きがなく、プロットは固定化され勝ちである。その辺に、作品の限界がある。例へば、作者は、「パーシー街の怪死」(“*The Mysterious Death in Percy Street.*”)で、犯人は実は「隅の老人」であつたことを暗示するが、これは『探偵乃至は警官を犯人に仕立ててはならない』といふ探偵小説作法の原則に抵触するものと言つてよい。とはいへ、その作品が短篇で雑誌向きであることから、我が国では大正末年から昭和の初期にかけて、約四十篇が『新青年』や『新趣味』に訳載されたし、最近では、「ホームズのライバルたち」を改めて見直さうといふ立場から二三の新訳も上梓されてゐる。⁸⁾

かうした我が国の実情に較べると、中国でのオルツィの紹介は、驚く程早い。林沢小説ではないが『繡像小説』第六十期から第六十二期（光緒三十一年九月一同十月。1905）にかけて連載された『三疑案』がそれで、樽本照雄君の示教によれば、それぞれの原作は次の如くである。

(華訳名)	(掲載誌号数)	(原 作 名)
伊蘭案	(六十期)	The Case of Miss Elliott.
雪駒案	(六十一期)	The Housing of Cigarette.
跛翁案	(六十二期)	The Lisson Grove Mystery.

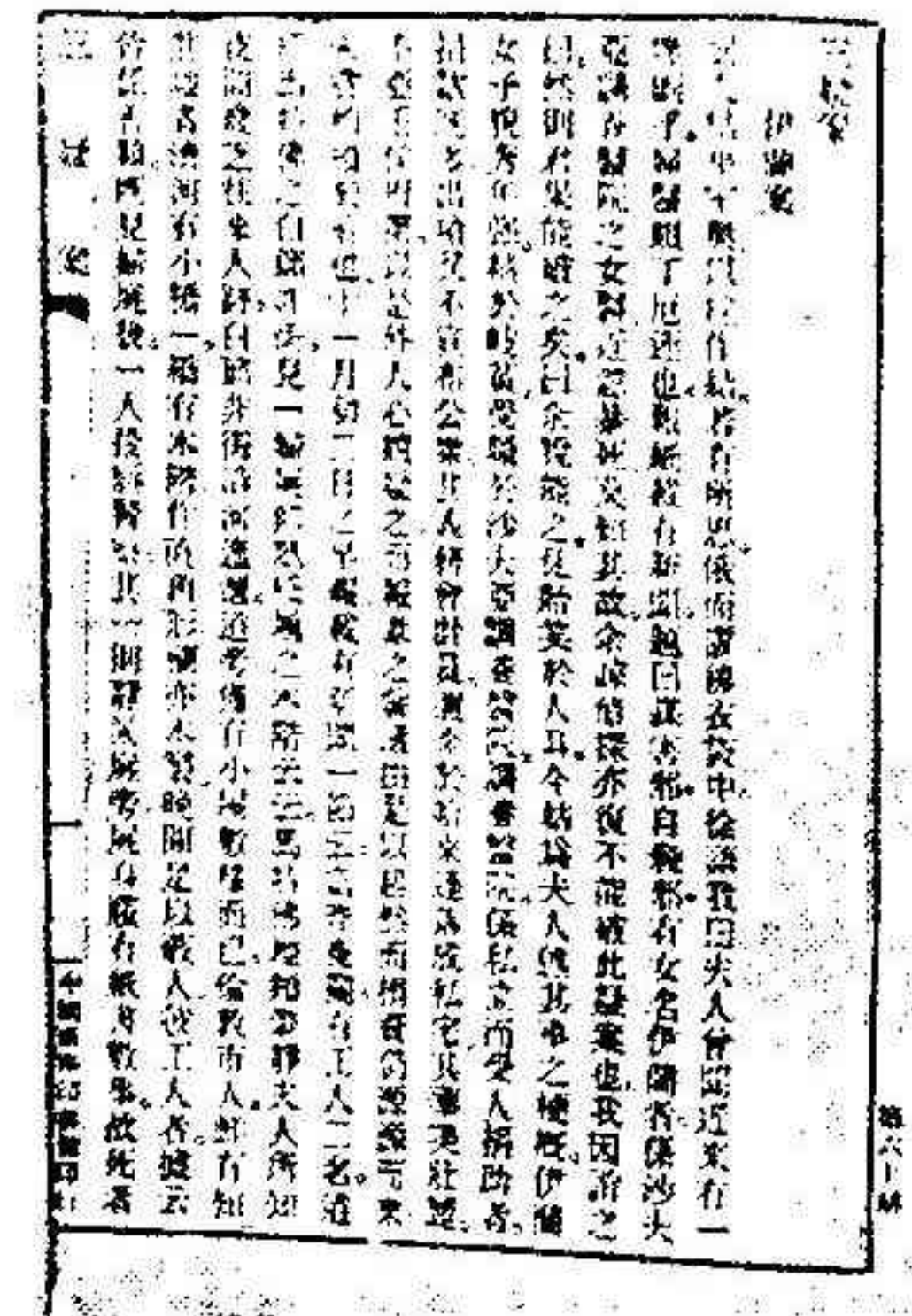
この三篇は、「隅の老人シリーズ」の第一短篇集『ミス・エリオット事件』⁸⁾に収めるものであるが、同書が T・フィッシャー・アンウィン社 (T. Fisher Unwin, London) から出版されたのは、1905年すなはち光緒三十一年のことだから、華訳されたのは極めて早いことになる。或いは、初出の『ロイヤル・マガジン』(Royal Magazine) から直接訳出されたのではないかと、疑はれるばかりであるが、何れにしても外国訳された最初のものといふ榮譽は、この華訳に与へられてよささうである。因みに、華訳が『繡像小説』に掲載された時には、原作者の表記が示されなかつたが、光緒三十三年(1907)単行上梓されて、『袖珍小説』に収められた時には、「英国奥姐」と明記された。訳文は勿論大意訳であるが、勘所は押へてあり、訳者が決して凡手ではなかつたことを想はせる。珍らしいものであるから、冒頭の一節を掲げて置く。

8) 山田辰夫・山本俊子訳『隅の老人』(ハヤカワ・ミステリ文庫, 昭和五十一年十月), 深町真理子訳『隅の老人の事件簿』(創元推理文庫, 同五十二年八月)など。後者に添へられた戸川安宣氏の解説「シャーロック・ホームズのライヴァルたち——隅の老人と生みの親オルツィ」は、得るところが多い。

9) 'This is the only instance we know of where first-written tales were published after second-written ones.' (Ellery Queen: "Queen's Quorum." p.55) と指摘されてゐる様に、『隅の老人』("The Old man in the Corner.", Greening, London, 1909) 所収の作品は、例外的な "The Mysterious Death in Percy Street." を除き、その発表年月が、『ミス・エリオット事件』("The Case of Miss Elliott." T. Fisher Unwin, 1905) 所収作品のそれよりも古い。従つて、『隅の老人』を第一短篇集とすべきだとする説もあるが、刊行が遅れてゐる以上、書誌的に扱つて第二短篇集とすべきであらう。もつとも、さうなると「隅の老人もの」といふ呼称は、いささか不安定な観を与へることになるけれども。

伊 蘭 案

異人枯坐室奥，以線作結，若有所思。俄而置線衣袋中，徐語我曰，夫人曾聞近来有一慘劇乎。婦医頗丁厄運也。報紙載有新聞，題曰謀害邪，自殺邪。有女名伊蘭者，係沙夫亞調養醫院之女医，近忽暴死，莫知其故。余諒偵探亦復不能破此疑案也。我因誚之曰，然則君果能破之矣。曰余脫能之，徒貽笑於人耳。今姑為夫人述其事之梗概。伊蘭女子，貌秀年強，精於岐黃，受職於沙夫亞調養醫院。調養醫院，係私立而受人捐助者，捐款既多，出項又不宣布公案。其義務會計員，邇來於哈來達落成私宅。其華美壯麗，不亞王侯府第。以是外人心頗疑之，而報章訾議，由是以起。然而捐資之源而來，未嘗稍損於前也。十一月初二日之早報，載有新聞一節云。当昨夜闌，有工人二名，道經馬特仏之白郎非街，見一婦屍，仰臥橋堦之木階云云。馬特仏地頗僻靜，夫人所知，夜間幾乏往來人跡。白郎非街沿河迤邐，道傍僅有小屋數椽而已。倫敦市人，鮮有知其地者。濟河有小橋一，橋有木階，作直角形。欄亦木製，晚間足以蔽人。彼工人者，拋云皆係善類。既見婦屍後，一人投訴警察，其一則靜候屍旁。屍身賸有紙書數事，故死者之名不雖查悉，且伊蘭名譽素隆，交遊亦廣，卦音至処，聞者無不驚愕。僉云自戕之詭秘，莫此若也。



(B) オップンハイム; アレン・アップワード; ブースビー

探偵小説が、一方で政治小説・軍事小説と結付く時は、スパイ小説 (Espionage) が生れようし、他方で冒険小説と結付く時は、冒険探偵小説 (Adventure Detective Story) となるであらう。政治小説も末流のものになると、政界の暗黒面を暴き出して快を貪るピカロ的なものとなるし、冒険小説の類は、もともとピカレスク (Picaresque) とは関係が深い。これらは、純粋な意味での探偵小説ではないが、相抛り相援け合つて、清末民初に流行した譴責小説・黒幕小

説に密接な関接を有つものとなるし、冒険小説の類は旧来の武俠小説に影響を
与へたに違ひない。林訳探偵小説を語つて尚一二補足すべきは、彼の訳出した
小説中に、さうしたものに相渉る作品が、尚若干あることである。

まづ、前者に属する翻訳としては、次の様なものが挙げられる。

藕孔避兵録 美・斐立伯俊本翰著 林琴南合訳 商務 宣統1年
魏易 (1909)

(E. Phillips Oppenheim: 原作未詳——未見)

略史 法・亜波倭得著 林琴南合訳 商務 民国9年2月
陳家麟 (1920)

(Allen Upward: "Secret History of To-day: being revelations of
a diplomatic spy." 1904)

俄宮秘史 魁得著 林琴南合訳 商務 民国10年5月
陳家麟 (1921)

(原作者・作品名未詳——未見)

『藕孔避兵録』の作者オップンハイム (Edward Phillips Oppenheim. 1866-
1956) を米国人とする (阿英氏の書目による) のは誤、英国籍の作家である。
処女作『罪滅ぼし』("Expiation." 1887) は余り注目されなかつたが、『不思議
な男サバン氏』("Mysterious Mr. Sabin." 1898) を書いた頃から人気を集め、
コナン・ドイルと共に『ストランド誌』の常連作家であつた。作品は極めて多
く百篇を越すが、その大部分は冒険乃至は政界の黒幕小説で、純粋な探偵小説
といふべきものは極めて少ない。その代表的な探偵小説とされる『探偵アルジ
ャーノン・ノックス』("The Hon Algernon Knox Detective.") にしても、外
交裏面の葛藤や秘密牒報機関の暗躍に多くの筆が割かれ、探偵・推理の面白さ
や犯罪の追跡は、隅の方に押し遣られた観がある。我が国でお馴染みの『日
東のプリンス』("The Illustrious Prince.") にしても同様で、日英同盟更新
問題の蔭に隠された日米の葛藤、日本の国民性の抉別などの方が、読者の興味
を惹く。とは言へ、作者に探偵小説のあることも、亦否定し得ないのであるか
ら、林琴南にこの訳があることは、注目されてよい。不幸にして、訳本を未だ
見る機会がなく、原作の追求も手掛りを得ることが出来ないけれども。

因みに、オップンハイムの作品は、これ以前にも紹介されてゐる。阿英氏の
書目に、

黄鉛筆 英・斐立潑斯著 章仲謐合訳 四十三回 光緒三十三年
章季偉 (一九〇七) 小説林社刊

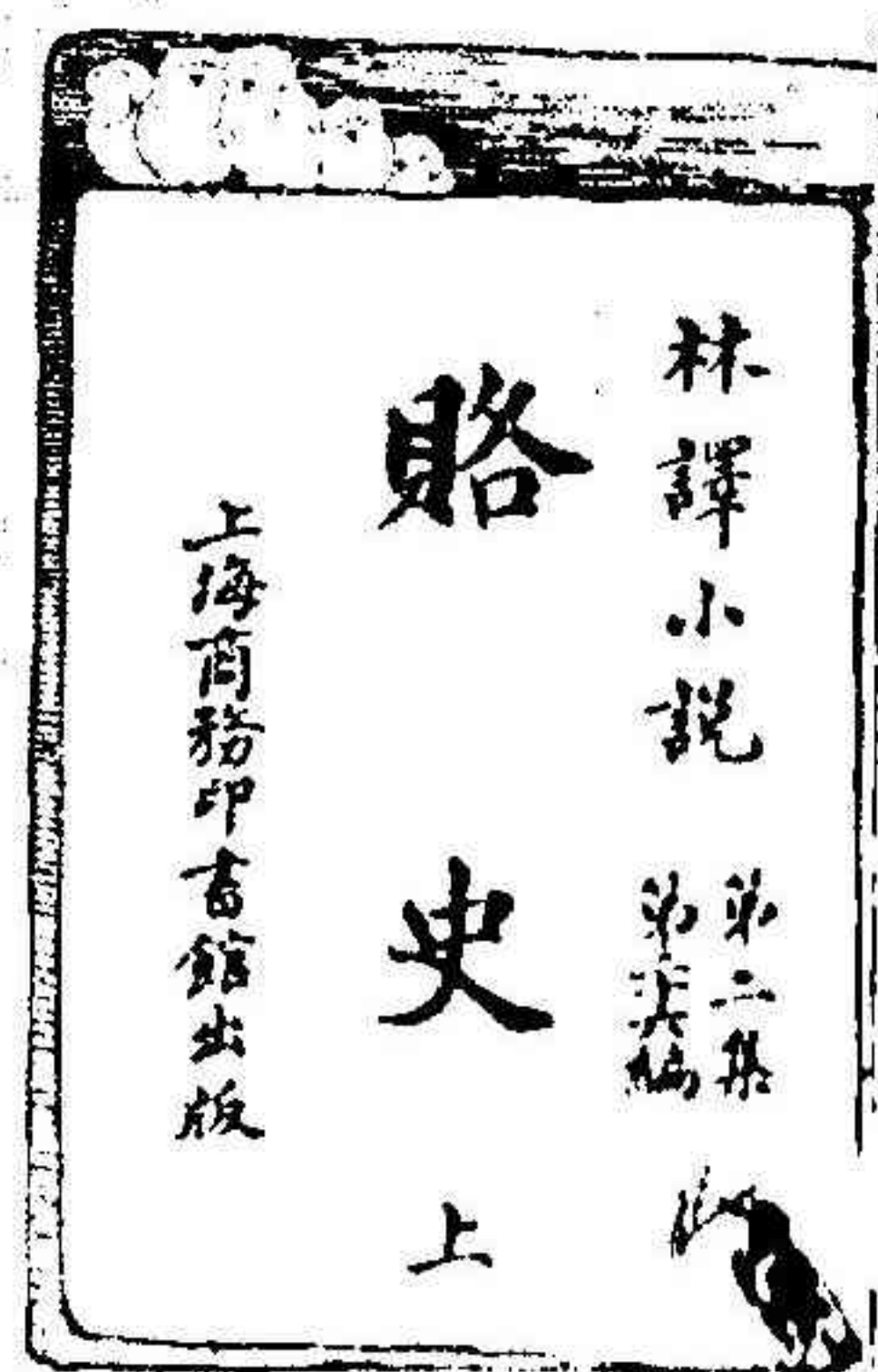
とあるのがそれで、これも未見ながら彼の代表的探偵小説の一に数へられる
『黄色いクレヨン』("The Yellow Crayon") であることは、疑問の余地が
ない。蓋し、『小説管窺録』に、

黄鉛筆 上下二冊全 本社発行

英・斐立潑斯著 無錫章仲謐・季偉同訳。書述索師烹奴公爵之夫人魯西、
忽不別他去。公爵追之。至紐約、為警吏所窘、幾誤行期。旋至倫敦。時
英京貴族有一同盟會。奉王子李尼索為首領、以反對民黨、會中以黃鉛筆
為記。民黨首領為勃洛脫。魯西亦為貴族黨、有殊色、李尼索令其偽名為
伯爵女公子來滕、以結交勃洛脫、使轉移其政見。勃洛脫惑之、卒為民黨
人所戕。李尼索亦欲娶魯西、魯西願從公爵、蓋與公爵在倫敦已晤數次矣。
公爵至柏林、見德皇、因德皇為黃鉛筆會之會長也、面陳王子不法狀、會
遂解散、王子逃往南美洲。公爵夫婦復璧會。訳筆雅飭、处处發明政治實
際、貴族與平民之衝突、於中國前途、足引為龜鑑焉。

と、その梗概を記してゐるからである。華訳者が、オップンハイムの名フィリ
ッポスを姓と誤つて、「斐立潑斯著」とするのは御愛嬌であるが、我が国でも
オルツィを「隅の老人」の名前と勘違ひし、作者をジョセフ・ルノオ(仏訳者)
として紹介した例があるから、一概には笑へない。とはいへ、『管窺録』の筆
者が言ふ様に、優れた翻訳であつたかどうかにも、疑問があらう。蓋し、オッ
プンハイムの文章は非常に暢達したもので、構想にも無理がなく、政治・国際
問題の分析も明快であることは、固り定評があるところで、若し華訳が成功し
たとすれば、原作に負ふところが尠くなかつたと見
られるからである。

『略史』の作者アレン・アップワード (Allen
Upward. 1863-?) は、我が国では、徳富芦花訳
『外交奇譚』("Secrets of the Courts of Europe." 1897) の原作者として、記憶してゐる人が尠くないであらう。ロンドンの名門校ミドル・テンプル
(Sch. Middle Temple.) やブルーク校 (Brooke
Sch.) で法律・哲学を修め、弁護士を業としてゐ



た。¹⁰⁾ その著『陪審裁判と労働運動』(“*Trial by Jury and the Labour Movement: a plea for reform.*” 1891) は、二十四頁の小冊子ながら、草創期の労働運動に正しい指針を与えるものとして、高く評価されたし、『公用について』(“*On His Majesty's Service: the story of tariff reform.*” 1904)・『政治のロマンス他二篇』(“*Romance of Politics; The Fourth Conquest of England; A Sequel to Treason.*” 1904)などは、物語風に英国の当面する政治課題を解明したのものとして、尠からぬ読者を集めた。文壇には、当初、詩人として知られ、詩集『ジックラークにて歌へる』(“*Songs in Ziklag.*” 1888)・『今日の悲劇』(“*A Day's Tragedy., A Novel in rhyme.*” 1897)によつて、吟遊詩人賞(Hon. Bard Nat. Gorsedd.)を獲たが、幾許もなくして小説に転じ、専ら政治小説や国際スパイ小説の類を書いた。彼には、『歐洲のイースト・エンド』(“*The East End of Europe: The report of an unofficial mission to the provinces of Turkey on the eve of the revolution.*” 1908)といふ著書もあつて、密命を帯びて中東で活躍したことがあるらしいが、それだけにスパイ小説は彼の最も得意とするところであつた。『現代秘史』(“*Secret History of To-day: being revolutions of a diplomatic spy.*” 1904)は、さうした彼の作品中でも最も力を注いだものといつてよい。日露戦争前後の歐洲政界を背景としたこの国際スパイ小説には、当然のことながら、当時世界を震撼させてゐた露国虚無党の面々が登場するし、我が国でも迎へられてよい筈であるが、何故か日訳があるのを聞かぬ。華訳は、

武伊武(即亜波倭得)曰、英明之主、固允我敍此一段之事。主曰、武伊武能敍北海之承平事、則愈足以堅英俄二国之交誼、同臻於承平。然余之為此書、而書中之人、恆不欲余述其真名。此事匪余所欲、即余名亦假託。何況諸君、此書出後、而書中假託之姓名、亦不曾有怪我之処、滋可幸也。余在日俄戦之第一年冬日、忽得一書、着余至倫敦、赴巴欽漢姆宮、面畢打利公爵。余亦忘其為何日、以余亡其日記之本。其不敢登之日記者、以余在巴黎中、遇一警察長、覘余秘密。蓋簿中与摩洛哥国王、伝電之密碼、為警察所得。自

10) “*Who's Who in Literature*”, 1927. p. 488. etc.

是遂不復記。公爵者、与余為老友。既見招入、定必有事奉属、不能不赴。吾此時尚在巴黎也、而偵探之總樞、亦在於是。知此行必需時日、遂挈一秘書、匆匆至倫敦。道中細語秘書、属其部署吾事、以塞維亞新王、与巴路極雷亞王、方言和、定新約也。語次火車至义林克老司。余不欲人知吾行動、令秘書勿起送余。余竊下登馬車。此馬車蓋余予以電示公爵、故公爵以車迎。既上馬車、直至逆旅。旅館在斐卡地裏、車過司考羽波街、余按車鈴、御者停驂。余即令移趨巴欽漢姆宮、以余行動、初不令一人知、明言赴旅店、乃偏不赴、防人尋迹耳。既至面公爵、公爵語至簡約、言曰、武伊武、汝知俄国将与日本宣戦乎。余曰、此戦決開、竊觀兩国情勢、万不能弭禍於無形。公爵不懌曰、若以爾行、亦将不能力挽此危局矣。余曰、即行無濟也。公爵以目視余曰、苟与爾以全権、且佐重金、往面聖彼得堡宮中乘権拋勢之人、為之関説、能弭此禍乎。(第一章)

といつた調子のもので、林訳小説としては比較的平易な訳文である。『俄宮秘史』は書名から推して、これ亦、虚無党小説と考へられるが、未見の為、原作を追究するに至らない。

次に、冒険探偵小説に類するものとしては、

大俠紅繫落伝 阿克西夫人著 林琴南 魏易 合訳 商務 光緒三十四年九月 (1908)

(E. Orczy: “*The Scarlet Pimpernel.*” 1905)

女師飲劍記 蒲士拜著 林琴南 陳家麟 合訳 商務 民国六年七月 (1917)

(G. Boothby: “*In Strange Company., A Story of Chili and Southern Seas.*” 1896? 後考を俟つ。)

の如きがある。『大俠紅繫落伝』を、阿英氏の書目に洩してゐるのは疎漏で、『大俠盜邯洛屏』・『大俠錦披客伝』など類似した書名が他にあるからであらう。

『晚清小説史』や『晚清文学叢鈔』・「小説戯曲研究卷」にもその名を録し、殊に後者では林序の全文を掲げてゐる。それに従へば、林琴南は、本書を歴史小説と見てゐたことは明らかで、冒険小説とも見てはゐなかつた。それはそれでよいのであるが、原作者は如上の『隅の老人』シリーズで、探偵小説史上にも足跡を残してゐるし、又『紅はこべ』の主人公パーシィ・ブレークニー卿の神出鬼没の行動には、多分に探偵小説的な興味がつきまといふのであるから、記憶

に止めて置いてよい。因みに、我が国での『紅はこべ』物の紹介はかなり遅れ、大正も末になつてからのことである。国立国会図書館『明治・大正・昭和 翻訳文学目録』には、植松正訳として、紅玉堂書店版（大正四年）・金剛社版（大正十五年）を掲げ、原書として（“*The Scarlet Pimpernel*”）を挙げ、これに従ふ研究書もあるが誤りである。正しくは、『トニー卿夫人』（“*Lord Tony's Wife.*” 1917）、その前半を『紅はこべ』、後半を『恐怖の巷』（金剛社、共に大正十五年刊）とすべきである。訳者は、知る人ぞ知る一橋大学名誉教授、刑法学者として又NHKテレビの解説者として著聞する植松正先生その人で、先生が十九歳、苦学しつつ日本大学予科（夜学——当時は日本大学にしか夜学はなかつた）に通学して居られた頃の小遣ひ稼ぎであつたと聞く。¹¹⁾

『女師飲剣記』は、

時有二入、一為英産、一為西班牙。此二人種類不同、性質亦異。然亦間有同者。其不同者、英人長瘦而訥、雅有謙徳。西班牙人、則侏而胖、喋喋有利口、性尚風華、此其不同也。其同者、則趨捷善鬪、悍不畏死、均放浪於江湖間、相識已数年。然往來不數數也。其所以相識而寡於往來者、正自有故。令且先敘英人。英人名安粗色、為要克之少年、聰明解事、顧乃不習於正。曾在伊登學校、肆業一切功課。初不屬意、則專留意於體育、既而又至阿克司弗得大學^{即牛}、未數日、為校長除名。其父大怒。一日其子負責於外、責家索、逋其父謂安粗色曰、我乃不幸以爾為子、直劣物也。安粗色曰、人固有過。徐當改之。自是以來、父不以為子、而安粗色亦漠視其父、後此其父賜之二百鎊金、斥其遠離、蓋逐之也。安粗色挾金出英國至南斐州乃覓路不得。復由南斐至於南美之智利國。國正革命、安粗色遂入其黨乃不克奏功、快快至巴國。

に始まる小説であるが、恐らくは馬氏の指摘する“*Love Made Manifest*”ではなく、『奇妙な仲間に加して』（“*In Strange Company, A Story of Chili and the Southern Seas.*” 1896）ではなからうか。未だ原書を比照し得ないのではあるけれども、チリやウルグワイなどが舞台となつてゐることは、上掲の

11) 植松 正先生「翻訳書奇縁」（『時の法令』No. 997, 昭和五十三年四月）。

例文に徴しても窺はれようから。

ブースビィ (Guy Newell Boothby. 1867-1905) は、オーストラリア東南部生れの作家で、若い頃から冒険を好み、その足跡は、濠洲各地は勿論、サモア・フィジーなどオセアニア海域の島々から、チリ・ペルーなど南米大陸の国々、はたまたエジプトから南支南洋と、世界中に及んだ。かくて、当初彼は『オーストラリアの土人一東部縦断記一』（“*On the Wallaby: or Through the East and across Australia.*” 1894）・『我がオーストラリア』（“*My Australian Duchess.*” 1903, G. A. Henty との共著）の著者として知られ、又ミステリー風な『幽霊牧童』（“*The Phantom Stockman.*” 1897）の作者として、大衆に親しまれた。1895年、たまたま『ウィンザー誌』に寄せたニコラ博士の第一作『幸運への入れ札』（“*A Bid for Fortune.*” 1895）が非常な好評で、求められる儘に、『ニコラ博士』（“*Dr. Nikola.*” 1896）・『ニコラ博士の実験』（“*Dr. Nikola's Experiment.*” 1899）・『さよならニコラ』（“*Farwell Nikola.*” 1901）と一連の作品を書き、大衆小説家としての地歩を固めた。不老不死の霊薬をめぐる謎の主人公ニコラ博士・国際的大陰謀団・中国の秘密結社などが、上海・中央アジア・ヴェニスと舞台を移しながら、波瀾万丈の死闘を繰返すこの物語は、恐らくアメリカに於けるニック・カーターものの流行に刺戟されてのものであらう。とにかく、「血湧き肉躍る」といつたところがあるから、大いに大衆には受けた。さうした一方で、彼は又『欺偽師のプリンス』（“*A Prince of Swindlers.*” 1897）を、『ピアスン誌』に書いた。これ亦、ニック・カーターものの影響を受けた作品だが、探偵役をも勤める欺偽師クリモ・アリアス・サイモン・カーンの誕生は、かの怪盗リュパンの登場よりは十年も早い。

ブースビィの作品は、我が国では早くから紹介された。水田南陽が、『魔法医者』（“*Dr. Nikola.*”）を『中央新聞』に訳載したのは、明治三十二(1899)年五月のことだから、原書の上梓後僅かに三年のことである。が、その後は余り顧られず、大正十四(1925)年、牧逸馬が『白妖姫』（“*The Beautiful White Devil.*” 1896）を『新青年』に訳載するまでに、細越夏村訳『脱走』（原作未詳、明治三十九年二月、『時代思潮』掲載）その他一二篇があるに過ぎない。これに対して、中国では、紹介こそ日本に遅れたが、かなり多くの作品が訳された。

その嚆矢をなすものは、

(華 訳 名)	(原 作 者)	(華 訳 者)	(発 行 所)	(刊 年)
眩 筐 術	英・白髭拝	烏衣使者訳	小説林社	光緒卅二年 (1906)
巴黎五大奇案	美・白髭拝	仙友訳	『月月小説』 ^{一巻一号} _{以下}	同上

あたりであらう。前者は未見、後者は、当初『月月小説』に、「雙屍案」(一巻一号)・「断袖」(一巻三号)・「珠宮会」(一巻四号)・「情姫」(一巻五号)・「盗馬」(一巻六号)と載されたが、宣統二(1910)年群学社から単行上梓された。

共に原作未詳である。ついで、

(華 訳 名)	(原 作 者)	(華 訳 者)	(発 行 所)	(刊 年)
偵探小説 寶石城	波斯倍	商務印書館訳印	商務	光緒三十三年 (1907)
				(“A Cabinet Secret.” 1900 ?) <i>The Lust of Hate</i>
言情小説 復国軼聞	波斯倍	同上	同上	同上
				(“A Maker of Nations.” 1900 ?) <i>A Sailor's Bride</i>
言情小説 盜窟奇縁	(補) 波斯倍	同上	同上	同上
				(“The Countess Londa.” 1903)
言情小説 海棠魂	布斯俾	薛一譯 陳家麟 共訳	同上	光緒三十四年 (1908)
言情小説 青梨影	布斯俾	陳家麟訳	同上	同上
墮 涙 碑	布斯俾	商務印書館訳	同上	同上

といった作品が訳出せられるが、探偵小説の部類に加えてよいのは『寶石城』位で、他は中国でも「言情小説」として扱つてゐるのは、角書するが如くである。

『寶石城』は、安南に赴いた三人のイギリス人が、古城の近くで、宝物を隠した洞穴を発見するが、慾を起した一人は、仲間を裏切つて宝物を持逃げする。しかも彼は、土民を唆して二人を捕へさせる。二人は盲目とされ、又舌を切られて廢人同様になり、辛うじて帰国する。二人の訴へを聞いた探偵は、八方手を尽して犯人の跡を逐ひ、遂に犯人を捕縛するといった筋。インドシナでは、1899年に聯邦が成立、フランスの植民地化が一応の達成を見ると、旧に倍してベトナムやクメール文化の研究が盛んとなる。既にして、アンコールワットの名はムオー(H. Mouhot)の探険(1860年)以来著聞するところであつた

が、前世紀末から今世紀の初めにかけては、アンコールトム遺跡発掘が人々の関心を誘ふ様になる。文豪ピエール・ロチ(Pierre Loti. 1850-1923)の「地下の寺院」(“Pagode souterraine.”)や「アンコール巡礼」(“Un Pèlerin d'Angkor.”)などは、さうした雰囲気から生れた珠玉の文字である。ロチとブースビィとを同日に論ずるのは、不倫の謗りを免れないが、ブースビィのこの小説の場合にも当嵌る。謂はば、当て込みを狙つた作だが、歴史的にインドシナとは関係の深い中国のことであるから、又格別の興味を以て迎へられたか。『説部叢書』の他に『小本小説』にも収められて流布した。少しく、洞窟探険に向ふ一節を引いて置かう。

啓化徳嘆曰、足下猶弗之信耶。此事固非余一人言之。昔有一支那遊客、曾於某年經過此森林、以弔彼破壞之古城、事後言之歷歷。因顧問可徳曰、可徳、足下曾憶此為何年事乎。可徳応声答曰、此一千二百五十年事也。啓化徳曰、是矣、此支那遊客、曾述此古城歴史、並珍宝之多寡甚悉。黒勒曰、雖然、彼未嘗語人以珍宝所蔵処也。吾等安從尋得之。啓化徳曰、無妨、吾有善策、必可得之。君無慮也。蓋吾輩作事、全視乎智慧。苟吾輩而有特識、即疑難之事、何難立剖。可徳曾遙訳此支那遊客之書。其中有言。戎王引彼觀珍異之室、彼一覩此種種奇宝。驚惑之余、至不敢睜目而視、此足徵其言不謬也。其中又有一節、言国王每決獄、必坐於三頭大象之広場中。余等前往、第覓此三頭大象之処。此処既得、再求其他、当不難迎刃而解也。黒勒曰、足下安知此大宗珍宝之仍蔵其地、而不為他人所発乎。当其国人去其地而他適、豈独忘徒其珍宝之理、以吾測之、珍宝必無在也。啓化徳曰、否否、子毋弁、試聽我說焉。当六月以前、余如母曼、邂逅一法国人、彼久客安南、身擁厚資、任意揮霍、余頗怪之、私叩以其資所自来、則曰、余在某地、発見蔵鏹、其数之多、殆如泥沙。余得任意攜帶。其後為彼処支那人所逐、不能久居。遂逃而至此。吾今將以此冗長故事、約而言之、余後此設計籠絡此法国人。彼遂將蔵宝之区、拳以告我。黒勒曰、如君所言、則此事信不処矣。然君烏知此法国人必不再至其地、而尽取其所有乎。啓化徳曰。以吾觀之、此法国人、決不為此。蓋彼乃一嗜酒之徒、無日不飲、每飲必醉。彼囊中資財既足、飲之不暇、何暇跋渉山川、再履其地乎。可徳曰、以余所聞、則此

法国人，早醉死矣。

(第一章)

かうした作品まで数へあげると、林琴南が好んで訳したハガード (Henry Rider Haggard. 1856-1925) の作品などにも言及しなければならなくなってくるが、それらについては、別稿「林訳哈氏小説攷」に譲る。

(3) ニック・カーター物の氾濫

ブースビィと並んで、^(γ)いや、むしろそれ以上に大衆に迎へられたのは、ニック・カーター (Nick-Carter) ものであらう。その最初の紹介は、光緒三十二年 (1906)，小説林から上梓された呉門・華子才訳『聶格卡脱偵探案』で、同三十四年までに合計十六冊が出た。以下、阿英氏の書目によつて、その細目を示すと次の如くである。

聶格卡脱偵探案 美・訖克著 小説林社刊

第一冊：呉子才訳。光緒三十二(1906)年刊。収「銀行主人被殺案」・「狷太拒捕」。

第二冊：呉子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「雙生案」・「覬産案」。

第三冊：呉子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「車屍案」・「蓄音案」。

第四冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「復仇案」。

第五冊：滄海漁郎・延陵伯子合訳。光緒三十三(1907)年刊。収「宝刀影案」。

第六冊：延陵伯子訳。光緒三十三(1907)年刊。収「奇窟記」。

第七冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「大里斯案」。

第八冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「戕姉案」。

第九冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「仮面女子案」・「続仮面女子案」。

第十冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「瘋子劫殺案」・「飛刀案」。

第十一冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「戕父劫女案」・「仮王案」。

第十二冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「雷護所案」・「炸彈案」。

第十三冊：華子才訳。光緒三十三(1907)年刊。収「姓名名姓案」・「姓名名姓案解決案」。

第十四冊：華子才訳。光緒三十四(1908)年刊。収「紅面党案」。

第十五冊：華子才訳。光緒三十四(1908)年刊。収「一錢酬勞案」・「五玉黍案」。

第十六冊：華子才訳。光緒三十四(1908)年刊。収「飛箭案」・「飛艇案」。

光緒三十三年には、一新書局から別のニック・カーターものが出たらしい。阿英氏の書目には、

聶克卡脱偵探案 美・訖克著 初編，顧明卿訳。二編 顧明卿・顧鵬拳合訳 光緒丁未(1907)一新書局刊。

を録し、別に

美人唇 美・訖克著 冶孫・不才合訳 中国図書公司刊 光緒三十四(1908)年刊。

女魔王(二冊) 美・訖克著 小説進歩社編訳 同 宣統元(1909)年刊 聶克卡脱探案之一

のあることも示してゐる。又、同書目に

玫瑰花下 光緒三十三(1907)年 商務印書館訳印。

とある作品は、原作者名を明示してゐないが、『小説管窺録』に、

玫瑰花下 商務袖珍本

此書亦為聶格卡脱探案之一，発行於上年。旧金山大地震後，有一火車客蓋敦斐，挾銀券往旧金山。途中遭德林祛篋，不意券早失去。由聶偵得，為德林妻妹所竊，查得券於玫瑰花下，始得返趙璧。

とあるから、ニック・カーター物であることは明らかであるし、更に同書目に、

雙環案 美・尼哥拉著 光緒三十四年(1908) 商務印書館訳印

蛇環記 美・尼果拉著 宣統元年(1909) 商務印書館訳印

秘密社会 美・尼古刺著 宣統元年(1909) 商務印書館刊。

などに見えるそれも、愛称の Nick を取らず Nicholas を採つて著者名とした

もので、ニック・カーター物であることは、信じて誤りない。現に、『東方雑誌』六卷二号（宣統元年二月）に見える『雙環案』の広告に、

是書亦尼楷脱偵探案之一。中敘一女子姿容絶美，且襲有絶大之遺産，為奸人所涎，兩度被刦卒喪其生，後經尼輾轉。偵探隻身入賊人巢穴，屢瀕於危，終出險而獲兇犯。情事離奇，訳筆亦曲折有致。

とある。ニック・カーターは、又、「尼楷脱」とも音写されたのである。以上の他にも、佚名氏の作品中に、ニック・カーター物と覚しきものが、若干ある。

とにかく大変な流行である。

正直に言つて、筆者はこれらの作品を、どれ一つ読んでゐる。幸ひ、上に示す様な広告文、乃至は次に掲げる『小説管窺録』の新刊紹介によつて、そのあるものについては僅かながら梗概を知り、原作追究の手懸りを得ることが出来る。例へば『管窺録』には、小説林社発行のその第二冊から第十一冊までの各冊について、

聶格卡脱探案二 本社発行

吳門華子才訳。是書順序之一二，乃冊数，非案数也。与「福爾摩斯探案」標目略異。本冊共兩案：一「雙生案」敘一銀行主女美林出門，方入馬車，即失其踪，遍訪不得。河中忽浮起一女屍，係為人謀斃者，佩飾尽失，乃美林也。聶偵之，悪党已被擒矣，忽全免脱。及案破，乃知死者非美林，為美林之婢。而事实起於美林之妹羅斯。事跡變幻複雜，当以是案為最。一「覬産案」，少女革来姆因弟往学校肄業後失踪，請聶偵察。姐弟係孿生者，於本年將各得遺産二百五十万，其後父串通医生毒革来姆，且藥其弟。医生因巨万財產，欲從而攫之，設種種計劃，卒被偵破，繼父亦自殺，而案遂結。

といった紹介が見えるのであるが、ただこれだけの資料では如何ともならない。勿論、ニック・カーターについての私の知識が乏しいからでもあるが、原作の性格がその追究をいちぢるしく困難ならしめてゐるからである。

そもそも、この探偵を創造したのは、ジョン・コーエル (John Russell Coryell. 1848-1924) といふ男で、ニック・カーターの筆名のもとに、彼が活躍する小説を書いた。それは1884年のことだ (Pierre Boileau et Thomas

Narcejac: "Le Roman Policier." 1964. 寺門泰彦訳あり) とも、1886年だ (ニコラ・マッシュン『殺人読本』) とも、1889年だ (マッシュン) とも言はれ一致を見ないが、1886年9月18日号の『ザ・ニューヨーク・ウィークリー』に見える「老探偵の弟子」を以て最初の作品とする説が、最も有力らしい。¹²⁾ コーエルの書いたニック・カーターは、変装の名人で、絶えず付け髭や鬢をポケットに忍ばせ、上着を裏返すと見分けのつかない別人になり、貴族から泥棒・老婆と変化自在、機敏な行動力と判断力で悪漢を倒すといふ——要するに、少年の夢を満たした英雄であるに過ぎなかつた。コーエルの後を享けて、フレデリック・デヴィ (Frederic van Ronssellaer Dey) がニック・カーターの筆名を襲ひ、書きも書いたり千篇以上の作品を世に送つた。それらは、『ニック・カーター・ライブラリー』 ("Nick-Cater Library") とか『ニック・カーター・ウィークリー』 ("Nick-Carter Weekly") と題した週刊紙の体裁で、ニュー・ヨークは Street & Smith 商会から売出され、所謂「ダイム・ノベル」——実際には五セントのものもある——流行の先端を切つた。デヴィは、ニック・カーターを「酒も煙草も飲まず、嘘もつたことがない正義の味方」と誇り高い男に仕上げたが、これがアメリカ人気質に受けて、以前にも増して読者の人気を集めることとなつたらしい。流石に彼も最後には疲れ、一篇五十ドル、百ドルの値段で原稿を買ふ始末であつたといふ。かくて、彼の許に集つたフレデリック・デーヴィス (Frederic William Davis), サウエル (E. T. Sawyer), ジェンクス (G. G. Jenks) などによつて書繼がれた作品は、1920年頃までに中・長篇合せて千二百冊にも上り、アメリカ国内だけでも三千万部を売上げたといふ。嘗に読書界ばかりではない。かのヴィクトリン・ジャッセ (Victorin Jasset) が、レオン・サーギ (Leon Sergy) の小説にヒントを得て脚色演出した『ジゴマ』 ("Zigomar") が、映画界を席捲するや、やがてニック・カーターが登場して、怪盗ジゴマを相手に手に汗を握る大活躍をする。

更に、これを小説化したものが幾つかあつて、我国でも大谷夏村訳『探偵奇談・ジゴマの再生・ニック・カーター』(春江堂、大正元年九月刊。原作未詳。)

12) William Bridgwater & Seymour Kurtz ed.: "The Columbia Encyclopedia.", 九鬼紫郎『探偵小説百科』, 日影丈吉『名探偵 Who's Who』その他。

といったものが、何冊か出てゐるし、「和製ジゴマ」小説の出現さへ見た。慌てた我が文部省では、青少年の不良化防止のため、ジゴマの名称の使用まで禁止するといふ厳しい措置をとつた程であるし、又ニック・カーターものそのものも、受け容れる基盤に恵まれなかつた所為もあつて、流行は漸く下火となり、さまでの弊害は見なかつたが、アメリカでは、今尚ニック・カーターは民衆のアイドルである。現に、通称キルマスター (Killmaster) によつて息を吹き返したニック・カーターものは、1962年2月の第一作以来既に五十冊近くに達し、売上げ部数も七千万部を超えるといふ。

戦後のそれは暫らく措かう。戦前のニック・カーターものに限つて見ても、これを完全に揃へてゐる図書館はアメリカにもないらしい。エール大学の「バイネッケ文庫」(Beinecke Library) には『ニック・カーター物語』(Nick Cater Stories) の第一号から百六十号までを六巻に製本したものがあつたが、何分にも腰の弱い新聞紙様の紙に印刷されたものであるし、百年近くも経つた代物であるだけに、マイクロフィルムに収めることすら困難な保存状態だといふ。又、筆者の手許には、『宿場の惨劇』("Nick Cater's Mysterious Case, or The Road-House Tragedy.") とか『最大の椿事』("The Strangest Case Record, or Nick Cater's Guessing Contest.") とか題するものがある。その裏表紙には約二百点のニック・カーターものの書名が挙つてゐるが、この程度の材料では原作の追求は困難である。この種の小説の常として、どれもこれも似たり寄つたりの筋書であるから。——といふ訣で、余程の材料でも出て来ない限り、原作の追究は望めさうにもない。

(4) その他の英・米作家と作品

——ヒューム；ドノバン；デラノイ；

リンチ；ル・キュー；ハウズなど——

筆を本論に戻す。モリスンやボトキン、オルツィ等の紹介について注目されるのは、ファーガス・ヒューム (Fergus Hume. 1859-1932) である。ヒュームの伝については、江戸川乱歩氏の前掲書に要を得た解説があるから、今はそ

れに譲る。スコッチ系の濠洲人で、ニュージーランドに育ち、オタゴ大学 (Otago Univ.) で法律を学び、卒業後は弁護士の事務所で手伝ひなどしてゐたといふ。二十七歳の折、處女作『二輪馬車の秘密』("The Mystery of a Hansom Cab" 1886) を書き、メルボルンのフレデリック・トリッシュラー社 (Frederick Trischler & Co.) から出版したが「史上空前の売れ行き」——その生涯に五十万部を売り尽したといふ。但、原稿は買切りで、僅か五十ポンドに過ぎなかつた——を示したことから、創作で身を立てるべく帰英し、エセックスに居を定めて作家活動に入つた。非常な多作家で、生涯に百三十篇ほどの作品を書いたが、その大半は通俗小説で、探偵小説は四十篇程度である。勿論、それらの作品中には、『蓮つ葉女の眼』("The Jade Eye." 1903) や『ランディ・コート の怪異』("The Mystery of Landy Court." 1894) ・『一軒宿』("The Lone Inn." 1903) ・『秘密の抜け道』("The Secret Passage." 1905) の様に、三版も四版も版を重ね、数万部を売り上げた作品もあるが、駄作も尠くなく、『愛の極致』("The Best of her Sex." 1894) の様に赤本紛ひの題名の作品すらあつた。いや、あれだけ爆発的な人気を集めた『二輪馬車の秘密』でさへ、今日から見れば、真に歯掻い作品で、ヴァン・ダインは、「この小説は、探偵小説に何も新しい技巧や問題をつけ加へることなく、既にガポリオー、ボアゴベ、グリーン等によつて作り上げられてゐた線を墨守した作風にすぎなかつた。」(江戸川氏引) と評してゐるし、ヘイクラフトに至つては、もつと冷やかに、「聊か解し難いことだが、金儲けの為に書かれたこのまやかし物は、——今日では、もはや何人も顧ることはあるまいが——名だたる奇型品とも言ふべく、僅かに歴史的な関心を誘ふだけに過ぎまい」と酷評してゐる有様である。¹³⁾

では、何故、その様な作品があつただけの成功を収めたのか。勿論、狡猾な書肆の宣伝に乗せられた点のあることは否定すべくもないが、もつと根本的な理由が他にあらう。その第一に考へられることは、この小説がオーストラリヤを舞台とし、拙いながらも、そこに住むさまざまな人間模様——植民地成金、そ

13) Howard Haycraft: "Murder for Pleasure."; The Lilly Library (Indiana University) ed: "The First Hundred Years of Detective Fiction." 1841-1941 § 23. etc.

の資産を狙ふ流れ者、貧民窟に喘ぐ女等々——を、描き出してゐることである。もともと、オーストラリアは、イギリスの流刑地として、1787年来開拓された大陸であるが、十九世紀も二十年代に入ると、羊毛並びに食糧供給の主要産地として、本国の経済に重要な役割りを果す様になる。そこに、1851年から十年間にわたるゴールド・ラッシュの到来である。夥しい本国資本の投入は、単に鉱山の開発に止らず、鉄道(1854)・電信電話、更にしてはメルボルン・本国間(1872年)及びメルボルン・ニュージーランド間(1876年)の海底電線の開設に及び、これに伴つて急激な人口の増加を見る。これらの人々の中には、一攫千金の夢破れて「巡礼自由労働者」となり、各地をさ迷ひ歩く者、都会の貧民窟に息をひそめる者が尠からずあつたが、中には、61年の土地改革に乗じて大地主となり豊かな生活を送る者も、決して尠くなかつた。故国に伝へられるのは、これら成功者の話ばかりである。'80年代に入ると、欧米列強のアジア進出によつて、イギリスの内外に、澎湃としてナショナリズムが起る。'84年のニューギニアの保護領化、ヴィクトリア議会の聯邦制度の採択など、その端的な現はれであるが、かくてオーストラリアを含めた全極東地域への国民的関心は、一層深まつてくる。ヒュームには、他に『中国の壺』(“*The Chinese Jar.*” 1892)・『金の王府?』(“*The Golden Wang-ho.*” 1901)・『大官の扇』(“*The Mandarin's Fan.*” 1904)・『至尊ミカド』(“*The Mikado Jewel.*” 1910)など、当代のイギリス人のアジア観を窺ふ上で、興味ある作品が幾つかあるが、これらをも併せ考へれば、『二輪馬車の秘密』成功の理由も自づと明らかであらう。謂はば、一種の「異郷趣味」の齎した効果なので、件の書肆が、ロンドンに「ハンサム・キャブ出版会社」(The Hansom Cab Publishing Co.)を起して、一儲けを謀らんだ事実も、これを当込んでのことであるに違ひない。

それから、今一つ。ヒュームの件の作品は、極めて「大衆受けのする文体」で書かれてゐることだ。ガポリオやデュ・ボアゴベイの影響を受けた彼の作品は到る処にあまり重要でない挿話や風景描写などが挿入される。探偵小説としては、無くもがなの記述であるが、文字に飢ゑた植民地の人々は、むしろこれを歓迎したのである。明治の文壇でも、中頃までは「満足に文章が書ける」ことが、作家たることの第一条件であつたが、この場合と事情の一脈通ずるものがある。

る。この場合の名文は、純文学に於ける評価とは違ふ。大衆の心を捉へて放さぬ面白さを備へた文章なのである。『二輪馬車の秘密』には、それがあると思ふ。

それはともかく、この小説の評判は既述の如くであつたから、我が国でもいちやく紹介され、明治二十五(1892)年十一月には、丸亭素人訳『鬼車』が金桜堂から上梓されて版を重ねる。更に、昭和期に入つては、坂井三郎(横溝正史の匿名)訳の『二輪馬車の秘密』が『新青年』(昭和三年六月臨時増刊号)を飾り、ついで博文館『世界探偵小説全集』第六巻に収められ、一般にこの訳名で呼ばれることになる。しかも、ヒュームの他の作品の紹介は、我が国では全く行はれなかつたから、「たつた一冊の本だけで探偵小説史に名を連ねてゐる作家」(江戸川氏)といった印象が読書界には強いが、中国ではどうであつたらうか。

華訳されたヒュームの作品には、次の様なものがある。



(華訳名)	(原作者)	(訳者)	(発行所)	(刊年)
白巾人二冊	英・歇福克	商務印書館訳	商務	光緒三十二年 (1906)
(Fergus Hume: “ <i>The Mystery of a Hansom Cab.</i> ” 1885)				
二桶案	英・許復古	同上	同上	同上
(Ibid: “ <i>The Mystery of the Shadow.</i> ” 1906)				
劇場奇案	英・福爾奇士休姆	同上	同上	同上
(Ibid: “ <i>The Fatal Song.</i> ” 1905)				

等しく「商務印書館編訳部訳印」と銘打ちながら、一人の原作者を、かうも書き分ける悠長さには恐縮させられるが、このことは、これらの訳稿が何れも持込みの原稿であつたらうことを、暗示する。

さて、“*The Mystery of a Hansom Cab.*”を移して、華訳が『白巾人』と題するのは、後篇第六章(華訳第二十八節「索詐」)で、ホワイト氏殺害の真犯人ロージャー・モアランドがフレトルビー邸を訪れ、彼の過去の秘密につけ

込んで五千ポンドを強請つて帰る所を、娘のマッチや恋人のブライアンに見られてしまふ。彼は、『この暑さにも拘らず、白い絹のネッカー・チーフに顔を埋めてみた』とある条りに拠るものであらう。一寸、その辺を抜出して置く。

正要說話，忽聽見報客鐘響。又聽見傭人脚步声，以乎領了一箇人上楼到仏馬克書房裏去。歇了一会兒，那傭人進來点燈。仏得皮小姐問他，来的是什麼人。傭人答道，我不認得。他說有事專誠來見我室主人，所以我領他去的。仏得皮小姐道，我想父親曾經說過，不要有客來擾。傭人道，但是這位先生說是同他約好的。仏得皮小姐道，我父親正厭煩，偏有這些事情來煩他。說了便彈起琴來，唱著法國曲子。費子琦就臥在榻上聽。一箇彈唱的得意，一箇聽得出神。忽然仏得皮小姐戛然中止，便也不管費子琦了，奔出房去，疾忙上楼。這是什麼緣故呢。因為聽見極響的叫喊声音，從他父親書房裏出來。又記得欽司登從前說的說話，說他父親不可受驚，所以奔了去。仏得皮小姐奔上了樓，到了書房門口。將門敲上兩声，卻是鎖的。只聽見他父親在裏頭急急的問道，是誰。仏得皮小姐道，是我。我恐怕你。說到這裏，卻停住了。仏馬克在房裏急忙說道，我沒什麼事，你快下楼去罷。我就出來了。仏得皮小姐只得下楼。到了起坐間相近，但見費子琦立在門口，面上十分憔悴。便問道，什麼事。仏得皮小姐道，我聽見父親在房內叫喊。恐怕有什麼驚動，否則必不如此。現在我去問過他。他說沒什麼，所以就下楼來。又把欽司登說的病情告訴了費子琦。費子琦聽了，也是驚憂。兩箇人便走出屋出，遠遠的在樹陰下坐了談天。只見正厅的門開在那裏，燈光明亮，看得極清。約有一刻工夫，仏得皮小姐的驚恐也定了。兩箇人正講著閒話，忽見正厅上出來一箇人，走到門邊立定了。穿一身時式衣服，当夜雖熱，頭頸裏倒圍了白色綢巾。費子琦便道，這箇人真是怕冷呢，倒也奇怪得很，但見那人將帽子脫下，回頭朝厅上望。那厅上的燈光，射在他臉上，照得清清楚楚。費子琦蹣脚道，羨慕萊，那箇人聽了，連忙四下裏尋人。戴上帽子，急急的飛跑而去。但聽見門一響，便不見了。仏得皮小姐在月光下，忽見費子琦面容失色，不覺一驚，便道，羨慕萊是什麼人。忽然悟道，我記得了，是滑志的朋友。費子琦，輕輕的答道正是，就是大審時的一箇見証人。

(第二十八節 「索詐」)

華訳が、此時代には珍しい白話訳であることは注目してよい。勿論、周密体の訳ではなく、かなり原文の刪節が行はれてゐる個所がある。その為、「文章で読ませる」原作の味が薄れた面はあるが、改作の筆を弄した様な個所はない。又、白話訳といつても、「文学革命」以後のものに較べると、古色蒼然たる観がないでもないが、この場合、却つてヒュームの作品の味を活かすに役立つてゐる。まづ、上の部に属する翻譯と言つてよい。丸亭訳との比照はまだ試みる機会がないが、華訳は直接英文から訳したものであらう。『説部叢書第四集第六編(初集本第三十六編)』として収める他、『小本小説』にも収められてゐるから、かなり好評であつたに違ひない。

『二俑案』は、「達納耳者、一顧影少年也。既美麗，家復康實，歲可得英金五百鎊。性沈敏，暇則鉛槧不去手，而独專志於稗官云々」といふ冒頭の一節を読めば氣附かれる様に、『影の秘密』(“*The Mystery of the Shadow.*”)を訳したものである。『影の秘密』は、『二輪馬車の秘密』に次ぐヒュームの代表作とされるが、博識を以て知られた江戸川氏も遂に読まれる機会がなかつたらしい。古書目録に1907年版の出ているのを発見されて、「ヒュームに、さういふ作があることは、間違ひないやうである」とされるに止まつたが、これは再版のオムニ版で、初版は同じくキャッセル社(Cassell & Co., London)から出た1906年版がそれである。本文279ページ(再版本は132ページ)、スミス(A. T. Smith.)の挿絵十六葉がある赤クロス表紙の本である。物語は——ある日、突然男女二人の殺人事件が至近距離で別個に起る。男のズボンにはJGの頭文字が入つてゐるが、勿論身許は審らかでない。奇妙なことには、女のポケットの中に、六寸ばかりの藍色に光り輝く古色ゆかしい土偶があつたこと、又男の死骸の傍にも同じ様な土偶が落ちてゐて、この二つの事件は関係があることが訣る。「影の少年」と探偵の努力によつて、二人はペルーの愛国黨員で、殺される直前に暗殺の予告を受け、件の土偶を送りつけられてゐたことなどが判明するが、犯人は杏として判明しない。が、遂に入手した秘密文書から、次第に謎が解けて行くといふ筋。勿論、本格派の作品ではなく、冒険探偵小説に類するものだが、土俗的な興味も手伝つて一寸面白い。ペルーは、1821年に一応独立の榮譽を勝ち取るが、スペインの承認を得るまでには、'63年から二年に亙る

戦争を経験せねばならなかつた。その間にも、ボリビアとの紛争は絶え間がなかつたし、'79年には、チリ・ボリビア戦争に捲き込まれ、南部のタクナ及びアリーカ地区を失つてしまふ。両地区の帰属が解決するのは、1929年のことだが、この半世紀の間ペルーの甜めた辛酸は筆舌に尽し難く、秘密結社の活動も盛んであつた。『影の秘密』はさうした史実を織込んだ小説であるが、実際に結社の内面が描かれてゐる訣ではないから、際物的な色彩が強い。

華訳は全二十六章、文言ではあるが、平易で訣り易い。例文として、影の少年が学友パドリオを博物館に訪ね、件の陶偶の鑑定を乞ふ一節を掲げよう。

達納耳少巴得竜五年，軒軒有氣概，巴得竜甫三十，已現衰状。蓋勉於学，瘁心所致。達納耳旋出陶偶曰，請君觀此埃及陶偶，以故実告我。語竟，自就坐。巴得竜注視久之曰，君誤矣。此非埃及物。達納耳曰，我知埃及国俗，人死，漬以塩，暴使為腊。此偶即状其死者像。巴得竜曰，非也。昔秘魯人亦尚保尸法。此偶定為秘魯国物。達納耳甚訝曰，胡由知之。曰不見此偶胸前著日乎。秘魯人崇事太陽，故此偶以日置胸次。蓋出諸英戒当国西班牙前其民称王日英戒今則秘魯自主國矣墓中。厥名曰俑。達納耳曰，俑何所取。巴得竜曰，当時秘魯頗似亞洲国，以野蛮法使生人殉葬於貴者墓中，配司加書中載其事。一英戒死，凡宦官宮妾殉者，多至千人，有時代以俑。語次，指陶偶曰，此俑則代人者。故每一英戒死，作俑必如其僕妾数，斃一墓則俑纍纍且数百，説稿有可証。達納耳納俑入懷曰，君言博瞻，惜未能助余毫末。巴得竜曰，余未解君言。此俑得自何所。達納耳曰，自一被殺之女衣中得之。巴得竜驚曰，奇哉。女何事遭殺，又何以懷此秘魯之俑。達納耳曰，君所問者，即余欲問之詞。巴得竜曰，脱余能助君。言未竟，達納耳止之曰，恐君亦無能為力。遂辞而出。巴得竜乃溺苦於学者，即迴身復入書窟矣。

(第四章)

最後に、『劇場奇案』であるが、筆者がその原作として『死を招く歌』(“*The Fetal Song*.”)に見当をつけてゐるのは、巻末近くでの主人公賚斯礼と那克羅夫人との会話中に、「夫人曰、吾未嘗殺彼。賚曰、爾雖未殺彼，爾實教之歌以致之死，与殺彼同。夫人曰、否；彼自愛此歌，故令吾教之。吾初未嘗強彼学之也云々」といふ一節があるからである。物語の筋は、——モンテカルロからロンドンに帰任した新聞記者賚斯礼は、本社の主筆から愛特門公爵夫人那克羅の失

踪事件の探査を命ぜられる。今でこそ往来は絶えてゐるが、実は愛特門公爵は賚斯礼の伯父であるから、那克羅夫人とも無縁ではない。止むなく受諾した彼は、早速内偵にかかるが、何時の間にか事件の渦中に捲き込まれてしまふ。事件の蔭には、財産相続の問題が複雑に絡んでゐるらしく、続発する椿事に、賚斯礼は翻弄される。以下、華訳の例文として、夫人の足跡を尋ねて某の海浜に赴いた賚斯礼が、旧友霍来斯と偶然に会ひ、共に観劇に赴く一節を掲げて置く。蓋し、華訳の題名は、この一節に基くものであらう。

賚笑曰，爾固常休息者，爾既無事，今夕胡不同游。霍曰，此地殊無足清游，僅有謳者在此。彼中有頤而長之女子，法国歌尚佳。蓋往聽之。賚突聞法国歌一語，斗触那克羅夫人固善法国歌者，心大動，遂偕往舞台下。見台上懸明燈，係支那所製，精巧絕倫。台右設八音琴，左立伶人五，三女二男面羃白網。一伶起按八音琴，一伶手撫月琴，声琤琮悦耳。伶皆服寬博衣，冠銳冠。燈光下視之，頗奇特。万衆視線，悉注台上，一男子方引吭而歌，為阿力斯安在之曲。歌未已，忽無台上一撫月琴者，注視賚。賚以為彼望己身後之友人也。顧視無人，乃知彼実望己。須臾復顧視，則彼已不復望矣。既而一女伶出，欲賡歌。男子拳法国語呼曰，朋来書声歌。賚頓悟曰，此姪氏所善歌也。女子一发声，高下中節，宛如其姪。蓋賚固聞之審矣。既一闋，如夢如醉，幾不能自解，愈信其為那克羅夫人無疑。思彼以公爵夫人之地位，甘為女伶賤伎，在此獻藝，誠屬何心二闋。賚不復能忍，欲躍上台中，質問夫人，胡為背夫至此。正排衆欲前，忽一人服白法蘭絨衣，与賚相似，持刀疾躍上台，逕趨謳者，猛力以刺。謳者仆，其人躍下，疾奔至賚旁，匿入人叢。衆皆驚愕，不能解，目瞪口噤。賚忽趨前挾被刺者起，血流被胸，尸体已僵。賚急去其網，視其面，大驚。蓋被刺者非姪，乃一少女，即曩日杜聞園所見者也。賚蹠其側，俯首諦視。斯時衆男子俱大呼，婦女則駭而遁走，事機極速，不待賚知覺。已有人手拍肩，力挈其領矣。忽聞一醉人之声，巨如剖竹。自衆人中出者，呼曰，捕殺人賊，捕殺人賊。賚急奪其人之手，大呼曰，吾非殺人者，何逼吾為。忽一謳者出曰，吾親見爾手殺人。尚狡賴耶。賚不服。謳者徐去其面網。賚覩其容，大驚退走。蓋儼然一那克羅夫人也。賚又大呼。

(第二章)

因みに、この『劇場奇案』は、商務版『説部叢書』初集第二編に収める。原版の第一集第二編は、雨塵子（周達）訳『経国美談』であつたが、故あつて之を削り本書と差換へたのである。その間の事情は、別稿「商務版『説部叢書』について」に述べて置いた。

ヒュームについて注目されるのは、ディック・ドノバンである。彼の作品で、華訳されたものには、

(華訳名)	(原作者)	(訳者)	(発行所)	(刊年)
多那文包探案	英・狄克多那文	商務印書館編訳所	商務	光緒三十三年十二月 (1907)

(Dick Donovan: "From Clue to Capture." 1898)

がある。商務版『説部叢書』第八集第六編（初集本第七十六編）として上梓された他、『小本小説』にも収められて流布した。

ディック・ドノバン、本名はジョイス・エマーソン・プレストン・マドック (Joyce Emmerson Preston Muddock. 1848-?) は、ジャーナリスト出身の作家で、『チェンバースズ・ジャーナル』("Chambers's JI.")・『イヴニング・ニュース』("Evening News.")・『デイリー・メール』("Dly. Mail.")等の記者をしたり、『蕃からクラブ紙』("The Savage Club Papers.")・『紳士雑誌』("Gentleman's Mag.")・『ストランド誌』・『ピアソン誌』等の編輯に従事したりする傍ら、旅行案内書や小説を書いた。小説の数も、八十篇近くはあるから、大変な精力家である。¹⁴⁾

探偵小説と言つても、彼はドイル以前の作家であるから、その作品も「捕り物帖」式な旧套を脱しないものが多い。その題名を見ても、初期の作品には、『最後の捕り物』("Caught at Last.")・『男漁り』("The Man-hunter." 1889)・『マンチェスターから来た男』("The Man from Manchester." 1890)の様に、ダイム・ノベル式なものが多い。これが、後年の作品になると、ドイルあたりの影響を受けたのであろうか、『ジャマイカ・テラスの怪』("The Mystery of Jamaica Terrace."! 1895)・『ロシア秘密警察ミカエル・ダーネヴ

14) 'Who's Who in Literature,' 1927. p. 324.

ィッチの事件簿』("The Chronicles of Micael Danevitch of the Russian Secret Police." 1897)・『タイラー・タートロック氏の冒険』("The Adventure of Tyler Tatlock.")の様に、題名も内容も幾分かスマートなものになり、探偵小説らしくなつて来るが、それもとりたてて論ふ程のものではない。要するに、彼の作品は、歴史的な過去の存在以上には出るものではない。¹⁵⁾ 因みに

"Who's Who in Literature." 1927年版によると、「彼の作品は、欧洲大陸諸国・インド・日本等で翻訳された」とあるが、邦訳された作品は何か、管見の限りでは明らかでない。

『多那文包探案』は、原書中の「幽霊屋敷の秘密」("The Secrets of a Haunted House.")を省き、次の十一篇を訳出したもので、作品の配列には若干の手が加へられてある。以下、これを表示すると、次の如くである。各項の末に第何話と記すのは、原本の配列である。



猫眼石	The Story of the Great Cat's-eyes.	第5話
罽覬飲器	The Jewelled Skull.	第3話
兄弟会	The Secrets of the Black Brotherhood.	第7話
銀七首	The Silver Dagger.	第6話
隔簾影	The Chamber of Shadows.	第1話
花中蠹	The Worm in the Bud.	第4話
考林社	The Story of an Infamous Cabal, and How it was detected.	第9話
劇場彈	An Unrehearsed Tragedy.	第10話
機器炉	Checkmated.	第8話
瘢手印	The Clue of the Handprint.	第12話
惨愛情	The Misplaced Love.	第2話

15) Ellery Queen: "Queen's Quorum." pp. 27-28.

訳文は、

伯爵米得維者，雄於財。性癖嗜珍異物，有殊絕者，輒百計思購得之。擲多金不悛。所度藏珠璣瑤玉，及陳翫物之巧作詭製。既駢比富積，冠魁一世矣。而伯爵心猶騷然病其未足，欲得一貓眼巨寶石，補所未具，而終以未能即獲一称意者，引為大恨。蓋此石產印度錫蘭島，其美者精湛瑩麗，拳無与比。第至艱罕，未易得。肆所沽，多璣細有瑕疵，間有完善，亦未能特出。米氏熾心是物，物色有年，於各国搜羅殆徧，迄不得一慰渴願。最後錫蘭島，爰見一石，大若雞卵，異光煜煜，表裏洞明，晴若秋水清澄，潑艷欲活，全体無纖豪缺憾，說者謂未施槩琢，已可值英金五万鎊矣。

当此物一出，凡有力者，皆欲収之入掌握中，而卒為伯爵所有，以其不靳巨値，衆莫与之競争。蓋其專使赴錫蘭購取也，瀕行，命之曰，必得此石不問値。越四閱月而此石至英。

(貓眼石)

といった調子のもので、ただ筋を綴る程度の甚だ粗い大意識であるが、一節一節、行を改めてあるのが珍しい。

ドノバンの小説と並んで訳出せられたものに、デラノイ (H. Burford Delannoy.) の作品がある。

(華訳名)	(原著者)	(訳者)	(発行所)	(刊年)
鉄 錨 手	英・般福德倫納著	商務印書館訳	商務	光緒三十二年九月 (1906)
(H. Burford Delannoy: "The Margate Murder Mystery." 1902?)				
一万九千鎊	英・般福德倫納著	商務印書館訳	商務	光緒三十三年八月 (1907)
(Ibid: "Nineteen Thousand Pounds. 1901)				

がそれで、前者は商務版『説部叢書』第六集第五編(初集本第五十五編)として、後者は同じく第八集第七編(初集本第七十七編)として、上梓された。

デラノイについても、筆者の知識は極めて乏しい。『二十世紀著述家辞典』(Kunitz & Haycraft ed.: *Twentieth Century Author*. 1942)を繙いても、彼の名は見出すことが出来ないから、その作家的地位も推して知るべきだが、前世紀末から今世紀初頭にかけて、少しばかり活躍した作家である。作品としては、『喜劇役者のクリスマス晩餐』("The Comedian's Christmas Dinner, and other short theatrical stories." 1897)・『自転車乗り失踪事件』("The

Missing Cyclist, and other stories." 1898)・『線と線との間』("Between the Lines." 1901)・『死人の部屋』("Dead Man's Rooms, A story of Gray's Inn." 1905)など、探偵小説を主体に約二十篇ほどがある。

『鉄錨手』は、『小説閒評』に、

是書凡四十二章，所叙命案重疊。凶手醫師馬^(互)，毒殺情婦雷亞勝之妻，復扼殺雷亞勝，屍為人竊去，遇救得未死。復用毒氣殺青衛而解其屍，又閉死看護婦曼娘。其他殺機時起。欲殺雷萱郎，而凶全得産業，欲殺高偵探以滅口，幸皆無隙可乘，未遭毒手。至於李佐治之自戕，長海雷之癡斃，雖不関馬事，而仍与案情牽連。一波未平，一波又起，後經高偵探查獲証拠，案遂破。高偵探謂自古命案，皆因財色而起，誠哉是言。惟凶狠如馬^(互)，實為世界所僅見。無時不起殺心，即無時不欲逞毒手。總之不外一「貪」字，「色」字一関尚在其次。甚矣，利之害人也，如是如是。

とあるから、記憶に留めてある人も尠くないであらう。その原書については、未だ比照する機を得ないが、私は『マルゲート殺人事件』("The Margate Murder Mystery." 1902)ではないかと、想像してある。蓋し、物語中の医師「馬互」は Margate の音訳と見られるからである。又、華訳の奥附には「商務印書館編訳所訳印」とあるが、これ亦売込み原稿なるべく、訳者は留日学生か留日学生上りの人物であつたらう。訳文は、いささか雅致に闕ける憾みがあるが、その反面、晦渋ならず、平凡に墮ちずといった長所もあり、まづまづの翻訳と言つてよい。殊に注目されるのは、文中に「!」・「?」などの符号や、会話を示す「 」といった記号が、頻用されてゐることである。以下、訳文の一端を示し、翻訳文体が一步一步出来上りつつある跡を、窺ふとしよう。

……「卿妄言耳」言者為一少年。面色蒼白如死灰。倚戸側足而立，一手持鑰作欲啓戸狀。其人業医，馬姓，互名，小字礼佳。時一婦声曰，「否，否。妾何曾妄言者」。言訖作乾笑。婦長身玉立。風致娟好。衣灰色，領袖俱白。一望而知為看護婦也。少須，婦指馬互而詈曰「惡賊！ 殺人賊！」馬互顛声曰，「卿妄言耳」。婦冷笑曰，「君惟能言此四字耳。謀殺楼上之婦人者，非君也耶？ 君目妾為毆耶？ 当君潛入彼室時，妾佯寐以窺之。厥後注炭強水^{酸質之}於婦口者，非君也耶？ 納強水瓶於婦手者，非亦君也耶？」。馬

互曰、「渠已死！」。婦曰「胡陽託不知為哉？ 殺之者實即君耳。君既殺之，復以瓶置其手，俾人見之，信為自裁。君須知今日之妾，不似一載前之愚蠢，易為人播弄矣」。馬互曰，「卿將何求？」。婦曰，「君固雷亞勝愛妻之情人也。適雷其婦死，戚甚，已返寢室，雷君誠篤人也。前此從未嘗一疑及其不貞之婦。其婦因亦心感之，欲於未死之前自承。君百計阻之不克，乃說計殺之。殺之以毒藥」。

(第一章)

『一万九千鎊』は、大金の紛失と殺人事件とが絡みあつて、意外な方向に発展して行くといった趣向の作品であるが、これ亦原書と比照する機会を得ない。蓋し、デラノイの作品で再版されたことがあるのは、僅か二点あるに過ぎないし、「傑作選」などに収録される程の作品も残してゐないからである。訳文は、

羅律師之去其弁事所也，足顛身震，既不能歩。風声車声，皆以為躡其後之警察。每見警察，即瞻戰心驚，怖懼欲死。

忽憶唐言三日之内必無拘之者，懼心漸消。但慾心乘懼心之消而入。不一刻間，驚懼全忘，而慾心已大熾。念彼一万九千鎊者，常置於心而竟不能得，乃為紐約偵探所有，心殊不甘。

当唐極樂誑之吐實時，其神情實似偵探。故律師心中，但知唐即偵探，既聞其索函与英倫銀行。遂信其必已獲金，而唐所云須三日後，拘羅之偵探方至。羅亦深信不疑，決欲於三日內逸去。但身無長物，旅資何出。即能幸逃法網，終至窘苦以死，豈得計哉。且殺人舟中，為欲得一万九千鎊也。其後不知金之所在，無自設策。今已知矣。豈可不一試再試，以期必得哉。遂決欲計誑偵探而攫其所有。

(第二十四章 「設計」)

といった調子のもので、文章の呼吸が、何処となく泥臭い。矢張り留学生あたりの手に成るものであらうか。

デラノイについて語つた序に、

(華訳名)	(原作者)	(訳者)	(発行所)	(刊年)
雙指印	〔英・培福台蘭拿〕著	商務印書館訳印	商務	光緒三十一年六月 (1905)

に一寸触れて置きたい。この小説は、もと『東方雜誌』の二巻一号から五号(自

光緒三十一年二月至同六月)までに連載され、同年六月に単行上梓され、後商務版『説部叢書』第三集第一編(初集本第二十一編)に収められ、更に『小本小説』にも収められたものである。阿英氏の書目には、これを別訳の如く扱ひ重出させてゐるが、他の例に倣つて一項目中に整理すべきである。

ところで、この小説の原作者については、『説部叢書』本では奥付にその記載がなく、誰とも判明しない。従つて、阿英氏の書目にも、これを逸してゐ

るが、『東方雜誌』掲載の方には、「英・培福台蘭拿著」とある。これを何と訓むか。「般福德倫納」と同列に置いて、H. Burford Delannoy の音訳と見ることも不可能ではなささうであるが、未だその自信はない。蓋し、『雙指印』の原書に適はしい様な題名の作品を、彼の創作リストの中に見出せないからである。

それはともかく、この小説が筆者の関心を誘ふのは、これが立派な指紋小説であるからである。——英京ロンドンのとある百貨店の婦人服売場で働く娘路山が、一日何者かに扼殺される。警察は間もなく容疑者として惠廉を逮捕し投獄する。惠廉には宝蘭といふ恋人があり、二人は結婚を夢見てゐるが、夢は悉く破壊されてしまふ。ふとした機縁で宝蘭を知り、その訴へを聴いた小説家の頼華は、惠廉が冤罪で獄中に伸吟してゐることを確信する。彼は、惠廉や宝蘭の周辺の人々から事情を聞き、真相を究めようと調べ歩く裡に、その妻も何者かに斬殺され、事件の背後に大きな闇の力が働いてゐることが、次第に明らかになる。彼は嘗て警察に勤めたこともある約翰生の力を借りて、猶も犯人を追求し、遂に捕へるのに成功する。極め手となつたのは、犯人の指紋であつた。

至是約始知已有警員守此。度彼或預知盜至，而狙伺之，而盜已為予得，乃復力持之。即啓局，二人入。非警察裝。約復疑盜党，即左持盜項，右手槍欲發。忽戶外有牛眼燈者，問曰，爾何人耶。約曰，余亦欲詰爾，余所為悉遵法律。賊已受執，汝曹復欲破戸，何故。曰，余警察員也。起外服以隱記示之。約曰，然則汝曹以捕此賊來乎。曰，此非賊，乃与我共事者。約駭



絶。彼又曰、釈君手、吾任其無他。約曰、吾在倫敦職警察、歴二十一年。無論其為主捕從捕、未見所為有若此者。言次、前二人入圃、僅手燈者語約曰、若輩並与偵事、日夜守此宅者、已三日。蓋室中有重係、樓以下各隔悉扃、不得入。故令一人梯入其樓之後隔、啓前扉。使我曹可進而從事。約曰、余固知君輩所欲得之兇徒、必在其中、無疑義。手燈者聞言、目爍爍視約。約曰、君盍与二人守圃。即向室隅取燈。燭前所持者、非他人、探長撥膝耳。約遂啓前室門、中寂然、相与偕入。約曰、今日余得此主室者之書。撥曰、其頼華耶。曰然、且附鑰二、謂已繫兇徒舍中、於二年前麦監脱案。語未畢、撥驚問曰、麦監脱案乎。君誤矣。此兇乃斃頼華婦者、三日前入此。君以為即頼華所云麦監脱案犯乎。約曰否、彼僅言兇徒耳。曰、予尾此兇、數星期矣。彼法人也。約曰、法人耶。若是則案益顯。曰、吾窺之夙。吾以謂撥曰、已得其血中之鞣印、及指摹。約亦探囊出指印、乃得自法主獄所者。攝影法、符否。撥用鏡展較之曰、悉類、無毫末差。約撫掌曰、不意吾兩人所踪跡者、竟同為是人、既爾、吾曹速覓之。(第十一章「約翰生捕犯事」)

この少し前の所で、犯人が跛行者であることを推測する条りに、カーボン紙で容疑者の靴底を型取りすることが記され、次いで、コップに残された指紋を採取することが語られてゐる(第十章「撥膝偵察事」)が、具体的な方法については書かれてゐない。

ところで、指紋小説と言へば、まづ我々の脳裡に浮ぶのは、フリーマンの『赤い拇指紋』(Austin Freeman: "The Red Thumb Mark." 1907)である。が、これより七年も早く出版されたヘルバート・キャデットの『ある新聞記者の冒険』(Herbert Cadett: "The Adventures of a Journalist." 1900)の冒頭の短篇「指紋の手掛り」("The Clue of the Finger-Prints.")が、「指紋による犯人の個人鑑別を描いた最も早い作品の一つ」であることをクィーンは指摘し、¹⁶⁾ 更に忘れてはならないものに、マーク・トウェンの『ミシシッピ一河の生活』(Mark Twain: "Life on the Mississipi.")の第三十一章の一篇と長篇『抜けウィルソン』("The Tragedy of pudd'nhead Wilson." 1894)が

16) Ellery Queen: "Queen's Quorum." pp, 44-45.

あると説く。これを受けて、江戸川乱歩氏は、明治二十五(1892)年六月、講談落語雑誌『東錦』第三号に、英人ブラック(後述)口演・石原明倫速記として掲げられた『岩出銀行血染の手形』(同年十二月、今村次郎速記に改め、『幻燈』と改題して、三友舎より単行上梓)が、矢張り指紋小説であり、マーク・トウェンの『抜けウィルソン』より二年も早い作品であることを力説して居られる。¹⁷⁾ 勿論、ブラックの小説は、イギリス小説あたりから筋を借用したものであらうことは、江戸川氏も示唆せられる通りであるが、今はそれを追究すべくもない。翻つて、『雙指印』は、光緒三十一(1905)年に上梓されてゐるのであるから、原書が出版されたのは、少なくともその前年でなければならぬ。仮に、1904年のこととしても、それは上記キャデットの小説に遅れること、僅かに四年のことである。イギリスで、今日世界の多くの国々が用ゐてゐるヘンリー式指紋分類法が採用されたのは1901年のこと、指紋研究はまだ草創の域を脱してゐなかつた。上記ドノバンの『癩手印』は、素材的には斬新な作品であつたと見られるが、これは指紋(Finger-Print)ではなく手形(Handprint)が極め手となるのであるし、『ノーウッドの建築師』で偽指紋を犯行に用ゐさせたドイルでさへ、『アベ・グランジの惨劇』では之を利用する発想を得ず、「指紋鑑識について何も知らない」(江戸川氏)様な趣きを示してゐる。これを以てこれを見れば『雙指印』の新しさは、改めて見直す必要がある。

とまれ、この小説は、指紋小説として珍しいばかりでなく、その構成法が又珍しいのである。「第一章 麦監脱案之縁起」・「第二章 宝蘭自述」・「第三章 約翰生述」・「第四章 頼華述」・「第五章 反格里末述」といふ様に、事件関係者の回想や供述を積み重ねながら、作品を構成して行くが、当代に華訳された小説で、この様な手法を以て綴られた作品は、他にあることを知らぬ。かう見て来ると、『雙指印』の清末探偵小説史上に占める位置は、極めて重要なものになる。

因みに、阿英氏の書目によると、『雙指印』と前後して、尚三つの指紋小説が華訳されてゐる。すなはち、

17) 江戸川乱歩「明治の指紋小説」(『続・幻影城』、全集巻15所収)。

(華訳名)	(原作者・訳者)	(発行所)	(刊年)
血手印	茂原周輔訳・陶懋立重訳	文明書局	光緒三十年 (1904)
血手痕	英・布拉克著・笑我生訳	『江西』掲載	光緒三十二年 (1906)
血指印	〔佚名〕・田鑄訳	香港・中国小説社	宣統一年 (1909)

である。何れも未見の為、大胆な推測に過ぎないが、田鑄訳『血指印』は、或いは上記フリーマンの『赤い拇指紋』であらうか。英人布拉克のそれは、疑ひもなくブラックの『岩出銀行血染の手形』(後述)で、明治三十五(1902)年十二月、浅草の弘文館から再び原題に復して再刊されたものが底本となつたに相違ない。残る『血手印』であるが、これは茂原訳も見てゐないので、原本が何であるか、全く知るところがない。しかし、これが重訳されたのは、『雙指印』より一年も早いことは、これ亦注目に値しよう。

デラノイと並んで、ローレンス・リンチ(Lawrence Lynch.)の作品が、紹介されてゐる。リンチも亦我国では余り馴染みのない作家であるが、イギリスでは最も大衆的な女流作家として、当代に知られた存在であつた。1880年代の初め、ロンドンのワード、ロック、アンド・ラウトレッジ社(Ward, Lock & Routledge & Co.)から、「六ペンス文庫」とも名付くべき廉価本が多数出版されたことがあるが、彼女の小説の大半は、このオムニ版の形で出た。彼女は、本名エンマ・マードッチ(Emma M. Murdoch.)、結婚後はヴァン・デベンター夫人(Mrs. E. M. M. van Deventer)の名で親しまれる。彼女は、決して多作家ではなかつた。作品の数も、長・短合せて二十篇余りであらうが、創作の筆は未婚時代から執つてゐた。当初はリンチの筆名を用ゐたが、やがて本名をも併用し始め、結婚後も筆を絶たなかつた。作家としての彼女は、比較的恵まれた道を歩んだ。処女作『三人の影』("Shadowed by Three. 1884)でその手腕を認められた彼女は、一躍文壇の寵児となり、翌'85年にはシカゴのアレックス・T・ロイド社(Alex T. Loyd & Co.)から、『危険な地盤』("Dangerous Ground, or the Rival Detective. 1885)を出版する。これは大探偵ヴァン・ヴァーネット(Van Vernet)とリチャード・スタンホープ(Richard Stanhope)の対決物語で、緑色の美しいクロス本だが、別にサムナー社(H.

A. Sumner & Co.)の挿画入り本もある。かくて彼女は、アンナ・カサリン・グリーン(Anna Katharine Green. 1846-1935)に次ぐ女流探偵小説家として迎へられ、アメリカの探偵小説史上にも、その名を留めることとなつた。華訳された彼女の作品には、

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
✓ 三人影	美・楽林司朗治著	商務印書館訳	商務	光緒三十四年一月 (1908)

(Lawrence Lynch: "Shadowed by Three." 1884)

がある。商務版『説部叢書』第十集第三編(初集本第九十三編)として印行されたものの他、『小本小説』にも収められた。物語は、ロンドンで起つた猶太人富豪兄妹の殺害事件、一富豪の遺産相続に絡む詐取事件、シカゴで起つた夫殺しを、それぞれ三人の探偵が調べる裡に、事件が一本に絞られ、互に協力して犯人を追跡するといふ筋。舞台が欧洲と米大陸とに跨つてゐるだけに規模が大きく、波瀾に富んだ読み物となつてゐるが、登場する探偵は、未だ旧式探偵の埒外に出るものではない憾みがある。華訳は、勿論周密体のもではないが、まづまづの出来と言つてよい。



俄而門陡闢，銃聲一發，窗櫺皆震動。李娜拉手中藥瓶，驟被擊落。狼藉滿地，郝生驚倒臥牆隅。手中銃墜地，一手猶緊握利刀。突有一婦立於二人之間，左右持短銃，指郝生之胸。婦非他，即所謂女偵探啞利而夫人是也。指郝生疾喝曰，無賴狗，伏彼勿動。少動，銃彈將直貫汝身。又轉向李娜拉曰，速取地上短銃，毋為彼所得。李從之，持槍向郝生而立。郝生是時以一臂撐地，拳首怒吼曰誰！汝何人，敢闖入人之內室。曰，吾特來救此可憐之女郎。郝生驚稍定。覺其音甚熟。審之，始知即彼所信任之女偵探也。遂低首不語。悔恨莫及。啞利而曰，吾隨汝偵探已久。凡爾所為，吾已悉，吾將拯此女郎去，速棄手中之利刀。咄，爾不願乎。李娜拉其來助吾。李娜拉應聲而前。女偵探忽變男子音，問曰，爾能發彈命中乎。李曰，雖非所善，尚不致空擊無準。爾不見吾之腕力乎。曰，然則請拔機指定彼額，吾將往奪其

手中之利刃、而縛其手足。苟彼稍稍抵拒者、爾立擊之可也。……

(第三十七章)

この辺りで、少々気分を変へよう。

既述オッペンハイムと並んで——といふよりは、むしろこの分野を開拓した人として、スパイ小説・暴露小説に得意の筆を振つたのは、ウィリアム・ル・キュー (William Tufnell Le Queux. 1864-1927) であらう。表向きにはジャーナリストで、実際にイギリスの秘密牒報員であつた彼は、観光に名を借りて、欧洲全土は勿論、当時「欧洲の火薬庫」と目されてゐたバルカン半島の国々——セルヴィア・アルバニアからトルコ地方にも足跡を印し、その政情や欧洲各国の秘密牒報機関の内幕にも通じてゐた。彼が屢々欧洲各国の外交顧問に委嘱され、セルヴィア・イタリー・メキシコ等から勲章を授与されてゐる事実は、その存在が並々のものではなかつたことを物語つてゐる。『やましい同盟』 (“Guilty Bonds.” 1890) 以下、作品はすこぶる多く、優に百篇を超すが、質的にもクーパー流の「スパイ小説」(J. Fenimore Cooper: “The Spy.” 1821) あたりに低迷してゐたそれを、文学として耐へ得る水準にまで高めた作家として、ジュリアン・シモンズなどは高く評価してゐる。¹⁸⁾ 当初、彼が最も得意とした分野の一は、露国虚無党関係の暗黒小説で、『虚無党奇談』 (“Strange Tales of a Nihilist.” 1892) はじめ、『秘密機関』 (“A Secret Service.” 1896) ・『^{ツァー}皇帝のスパイ』 (“The Czar’s Spy.” 1906) など、これを扱つたものが数篇ある。我が国でも、『虚無党奇談』が松居松葉によつて訳出¹⁹⁾ (明治三十七年九月、警醒社刊) されて以来、お馴染みの作家であることは、更めて説く必要もあるまい。

彼の作品で華訳された最初の作品は、『月月小説』第一号から第十六号 (光緒三十二 [1906] 年九月—三十四年 [1908] 八月) まで、断続的に連載された

18) Julian Symons: “A Short History of the Spy Story”; (in “Bloody Murder.” pp. 221-236)

19) 旧稿「晚清に於ける虚無党小説」(『天理大学学報』第八十五輯) で、『虚無党奇談』の原作を、旧説に従つて “The Czar’s Spy.” かといふ」と記したのは誤。訂正すべきである。

(華訳名) (原作者) (華訳者)
 三玻璃眼 英・葛威廉著 羅季芳訳

(Le Queux.: “The Three Glass Eyes., A story of to-day.” 1903)

である。阿英氏の書目には、「月月小説本。不完」とするが、訳者は第十七章の後に「結語」まで置いてゐるのであるから、一応の完訳と見てよい。

これと並んで、『月月小説』には、「威林筆記」と角書きして、楊心一訳「十年一夢」(第一号)・「国事探偵」(第二号)・「美人局」(第四号)・「緑林豪傑」(第七号)を掲げる。何れも短篇で軽いもの、『女たらしの告白』 (“Confessions of a Ladies’ Man. Being the adventures of Cuthbert Croom of His Majesty’s dipromatic service.” 1905) からの選訳と、『東方雑誌』の広告にあつたのを記憶するが、検証を試みてゐる訣ではない。『新新小説』所載の陳冷血訳『虚無党奇話』(光緒三十二年, 1906) は、原作者の名を明示してゐないが、上記松居松葉訳からの重訳なるべく、単行上梓されたものとしては他に商務印書館訳印の『三名刺』(光緒三十三年, 1907 原作未詳) があるが、未見である。

楊心一は、又『月月小説』に、「海謨偵探案」として「^ク剣術家被殺案」(三号)・「^ク守銭虜再生記」(六号)・「^ク墓中屍案」(八号)の三篇を訳載してゐる。何れも短篇で、原作者として「哈華德」の名を記すが、これはウォルター・ハウズの『奇怪な男たち』(Walter Hawes: “The Mystery Men.” 1905) の選訳である。ハウズについては、他に『^{クラウド・ランド}雲上国無宿』 (“The Waifs in Cloud-land, being their surprising adventures in the kingdoms of Cumulus and Nimbus” 1910) といふ作品があることを知るのみ、伝記も詳らかでない。

(5) 周作人訳『玉虫縁』(ポウの『黄金蟲』)

当代中国に紹介された英・米探偵小説家は、勿論、以上の数に止まらなかつた。商務版『説部叢書』に収められた作品に限つてみても、

(華訳名) (原作者) (華訳者) (発行所) (刊年)
 桑伯勒包探案 [佚 名] 商務印書館訳 商務 光緒三十二年二月 (1906)

円室案	英・葛雷	商務印書館訳	商務	光緒三十三年八月 (1907)
金絲髮	英・格離痕	同上	同上	同三十三年七月 (1907)

などは、未だ原作追究の望みを果せないし、阿英氏の『書目』に見える

偵探新語	索公訳	光緒三十年(1904)	昌明公司刊	内八篇
(一) 塔尖之自縊		夫概原著		
(二) 郵票毒		華士曼原著		
(三) 誘拐公司		雷比原著		
(四) 異形之腕		穆爾司原著		
(五) 復仇		佚名原著		
(六) 暗殺党		葛史克原著		
(七) 石炭窟中之偵探		愷陀斯敦原著		
(八) 試金室之秘密		幡蘭德原著		

なども、訳本を披見し得ぬ儘に今日に至つてゐる。

雑誌掲載の作品に至つては、調査が一層不備である。『東方雑誌』第四卷五期(光緒三十三年[1907]年五月)以降に屢時掲載されてゐる美国・加撒林克羅女史原著、甘作霖訳『兼説陶人案』・『數縷髮』・『黒幻像』・『車中語』・『拯三厄』などは、カサリン・グリーン(Anna Katharine Green. 1846-1935)の作品を、ダイジェストしたものかと思當をつけてゐるが、確認してゐないし、『小説林』第一号(光緒三十三年[1907]年正月)以下に連載する美・威登著、張瑛訳の『黒蛇奇談』なども、未だ原作を明らかにし得ぬ有様である。

かうした有名無名の作家、玉石混淆の翻訳作品に混つて、

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
玉虫縁	美安倫坡	碧羅訳・初我潤	小説林社	光緒三十一年 (1905)
(Edgar Allan Poe: "The Gold-bug." 1843)				

の名を見出すことは、吾々にとつて嬉しいことである。蓋し、訳者「碧羅」女史が、周作人の匿名であることは、周知のことであらうか。その間の事情については、『雨天的書』に収める次の一文に詳らかである。

今回既然成功、我便高興起来、又将美国亞倫坡(E. Allan Poe.)的小説

黄金蟲訳出、改名山羊図、再寄給女子世界社的丁君。他答应由小説林出版、併且将書名換作玉蟲縁。至於訳者名字則為「碧羅女士!」。這大約都是一九零四年的事情。

(学校生活的一葉)

残念ながら、筆者は未だこの訳も見てゐない。従つて、軽々に論ずることは勿論許されないが、当時氏は未だ江南水師学堂に在学する学生で、日本留学の夢さへ果してゐない時分の仕事なのであるから、その成果は推して知るべきであらう。殊に、この時分の彼の翻訳は生硬な文語で為されて居り、林琴南の翻訳の様に文言でも一気呵成に書上げられたものではない。桐城派の文章といふと、とかく槍玉に挙げられ勝ちであるが、本来は温雅醇正な姿を標榜するものである。のみならず、其処には玄人と初心者との格差もあるであらう。余り高く評価することは、危険である。

とは言へ、これを光緒三十一年(1905)年——実際にはその前年——といふ年代に置いて、更めて考へて見ると、その意義は極めて大きいことに気付く。蓋し、光緒三十一年と言へば、上記『降妖記』や『馬丁休脱偵探案』の上梓された年で、翻訳文学流行の萌しが見え始めたとはいふものの、商務版『説部叢書』は未だ結集されてゐない。雑誌にしても、『月月小説』・『小説林』等は未だ創刊されるには至らず、『新小説』は殆んど休刊の状態にあり、文学専門誌としては僅かに『繡像小説』が、綜合雑誌としては『新民叢報』と創刊後間もない『東方雑誌』とがあつた程度の時代である。

しかも、ここに紹介されたのは、近代短篇小説の祖とされ探偵小説の手法を確立したポウであり、ポウの作品でも傑作の一に数へられる『黄金虫』である。これは、訳者の文人的素質——鑑賞眼の鋭さを示す何よりの証拠といつてよい。興味深いことには、この翻訳を契機として、周作人自らも大きく文学的に成長する。彼は、この後間もなく、ユーゴの『クロード・ギュ』(Victor Hugo: "Claude Gueux.")の影響を多分に受けた『孤児記』を創作し、留日(光緒三十二年)後は、息つく間もなく羅達哈葛徳・安度蘭俱の共著『紅星佚史』(光緒三十三年刊。原書は、H. R. Haggard & A. Lang: "The World's Desire."——すなはち、ホーマーの『イリアッド』に基く小説。民国九年三月上梓された林琴南・陳家麟合訳『金陵神女再生縁』と同一書)やハンガリーの

作家育珂摩爾の『匈奴奇士録』(光緒三十四年刊。原書は, Jokai Mor: “Egg az Isten.”) を訳出し, 更には兄の魯迅に協力して, 『域外小説集』(二冊。宣統元年刊) の出版に当る。『アリババと四十人の盗賊たち』あたりに停迷してゐた時代とは, 大きな相違である。しかも, この兄弟が, 近代中国文学史上に大きな足跡を遺したことから見ても, 『玉蟲縁』の訳出は, 重要な意味を有つて来る。それと共に, ドイルから遡つてポウに辿り着くといふ探偵小説創始期の路線は, 次章以下に述べるガポリオーやデュ・ボアゴベイの紹介と相俟つて, 一応の完成を見ることになる。(未完)

(なかむら ただゆき)

補 訂

前号掲載の蕪稿中, 次の二項に補訂を加へる。

- 1)
- | (頁・行) | (作品名) | (誤) | (正) |
|----------|----------|----------|------|
| P. 19・14 | 銀光馬案 | 六・八・九期 | 六期 |
| //・16 | (次を挿入する) | 墨斯格力夫禮典案 | 八・九期 |

従つて, P. 22の邊りには若干の補正が必要である。

- 2) P. 33~P. 34

光緒三十一(1905)年には, 又次の譯が出た。

怪案 人鏡學社編譯處譯。人鏡學社發行。廣智書局印剛。光緒三十一年八月二十二日刊。

原作は, 『降妖記』と同じく Doyle: “The Hound of the Baskervilles.”

(以上, 樽本照雄君示教)。

金松岑と曾樸の『孽海花』

麦 生 登 美 江

『孽海花』を最初に構想し執筆したのは曾樸の友人の金松岑¹⁾であるが, その金松岑の原作は第一回と第二回の二回分だけが『江蘇』²⁾の第八期に掲載されている。曾樸は1934年, 『孽海花』の創作動機について,

光緒30年(1904), 私が上海で病氣療養中に小説林書局を創立し, 蘇州の金一(字は松岑)が『孽海花』と題した原稿を送って来た。計六回分であった。私はそれを書直し, さらに賽金花を縦糸とし, 清末三十年間の朝野の軼事を横糸として一冊の長編小説を作るよう手紙でもちかけた。金一はその氣力がないのでそれをすべて私に委任すると返信して来た。だから初版の『孽海花』の第一回にはなお金一の手筆が残っている。³⁾

と語っているが, 金松岑はこれについて以下のような補足説明を加えている。

曾樸が語っている『孽海花』創作の動機はすべてがその通りというわけではない。この書は私が江蘇省の留日学生が編輯していた《江蘇》のために

- 1) 金松岑(1874-1947)即ち金一。名は天羽, 天翻, 号は鶴舄。筆名は麒麟, 愛自由者, 天放楼主人など。江蘇吳江の人。1903年, 上海で愛国学社に参加。1904年, 『自由血』(ロシア虚無党史の翻訳)と『三十三年之落花夢』(宮崎滔天著『三十三年の夢』の翻訳)の盛行により政府の弾圧を受け郷里に隠棲。民国初年には江蘇省議員に当選したが, 後半生は教育に力を注いだ。
- 2) 江蘇同郷会が編輯した雑誌。日本の東京で発行。1903年4月に創刊され, 翌年4月, 12期で停刊。本稿で筆者が使用したのは中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会蔵本, 中華民国57年9月1日影印初版, 羅家倫主編《中華民国史料叢編》A7.4であるが, 『孽海花資料』(魏紹昌編, 中華書局出版, 1962年4月第一版, 以下『資料』と略記)に引用されているものとの間には表2(64頁)のように若干, 字句の異同がある。
- 3) 「東亜病夫訪問記」『資料』140頁。魏氏の注釈によれば, この訪問記はもともと上海の申時通訊社の記者, 崔万秋が書いた新聞記事で, 1934年11月25, 26日, 上海の《申報》, 《新聞報》などに掲載された。

清末探偵小説史稿(三・完)

—— 翻訳を中心として ——

中村忠行

(三) 大陸の作家と作品

——ガポリオー；デュ・ボアゴベイ；ルブラン；ルルー——

この辺りで、大陸の作家達——といつても、フランスの両大家ガポリオー(Émile Gaboriau. 1832-1872)とデュ・ボアゴベイ(Fortuné du Boisgobey. 1824-1891)が中心となるのだが——の華訳を、一寸覗いて置かう。実を言ふと、この二人の作品は、黒岩涙香訳から重訳されたものが、半ばを占める。本稿では、それを分つて説明したいと思ふのであるが、それには若干の理由がある。それは、涙香訳の多くが翻案で、時としては創作に近いものすらあるといふばかりではなく、かうした方法を採用することの方が、清末文学史上に占める日本文学の位置を、より鮮明な形で浮彫りして呉れると思ふからである。

さて、この二人の作家のうち、前に紹介されるのはデュ・ボアゴベイで、一足遅れてガポリオーも紹介される。が、フランスの探偵小説と言へば、まづガポリオーに指を屈するのが通説だから、この方から筆を起しても、差支へあるまい。

ガポリオーについては、殆んど探偵小説史が、大なり小なり触れてあるし、手近かなところでは、ヘイクラフトの『娯楽としての殺人』(Haycraft: "Murder for Pleasure.")やそれに拠つた江戸川乱歩氏著『海外探偵小説作家と作品』・九鬼紫郎氏著『探偵小説百科』等にも要を得た解説があるので、縷説する必要を認めない。ソーヨンの公証人の子として生れた彼は、父の希望に

叛いて騎兵隊に入り、除隊後は運送会社などの雑役に雇はれて、やや奔放な青春の日を送る。が、やがて当時ジャーナリストとして知られてゐたポール・フェヴァル(Paul Feval. 1817-1887)の知遇を得て助手となり、時には代筆をするなどかなり酷な仕事に従つた。身体の酷使は、彼が流行作家となつてからも続き、彼の短命も過労がその主因であつたといふ。

彼は、処女作『ルルージュ事件』("L'Affaire Lerouge." 1866)で、一躍文壇の寵児となつた。この小説は、世界最初の長篇探偵小説として輝しい榮譽を担ふが、それも実は廃刊の日も迫つた『ル・ペイ』("Le Pays.")紙に連載されたものである。彼はこの小説で、タバレ爺さんといふ素人探偵を登場させる。非常な金持ちで読書家。日頃は、「ある警官の回想録」を読んでゐてヒントを得、事件の解決に当るといふ趣向である。これには下敷があつて、当の回想録とは、当時評判であつた『怪盗ヴィドックの回想録』(F. E. Vidocq: "Memoires de Vidocq, Chef de la Police de Sureté, Jusqu'en 1827, Paris, Tenon. 1828-29)を指すのだといふ。ユージェヌ・ヴィドック(François Eugene Vidocq. 1775-1857)は、大革命時代が産んだ奇物。詐偽・強盗などで逮捕・脱獄を繰り返して、一時はパリ市民を恐怖させるが、後に改心して、警察に協力し、漸次申し上つて司法長官になり、パリ警察機構の改革まで手を染めたといふ経歴を有つ。その回想録は、ユーゴー(Victor Hugo, 1802-'85)・バルザック(Honore de Balzac. 1799-1850)はじめ、海を越えてはディケンズ(Charles Dickens. 1812-'70)やポウ(E. A. Poe. 1809-'49)なども愛読してゐたことは、既に先学の指摘するところである。

ガポリオーは、続く『書類百十三号』("Le Dossier No. 113. 1867)で、前作ではタバレ爺さんの脇役であるに過ぎなかつたルロックを主役に立て、『オルシーバルの犯罪』("Le Crime d'Orcival." 1867)・『ルロック氏』("Monsieur Lecoq." 1869?)でも、この若い探偵を活躍させる。彼も亦前身は犯罪の経歴を有つ探偵なのだから、この辺にも怪盗ヴィドックの面影が残つてゐる。

閑話休題。華訳となつたガポリオーの作品は、次の通りである。便宜上、重

訳も含めて、年代順に表示しよう。

- | (華訳名) | (原作者) | (華訳者) | (発行所) | (刊年) |
|--|---------|------------------|------------------|------------------------------------|
| 奪嫡奇冤 二冊 | [佚名] | 商務印書館訳印 | 商務 | 光緒二十九年
(1903) |
| (黒岩涙香訳『人耶鬼耶』の重訳。原作は、“L’Affaire Lerouge.” 1866) | | | | |
| 寒桃記 | 日・黒岩涙香著 | 吳禱訳 | 商務 | 光緒三十二年二月
(1906) |
| (黒岩涙香訳『有罪無罪』の重訳。原作は“La Corde au cou.” 1873) | | | | |
| 少年偵探 三冊 | 法・愛米加濮魯 | 寄生虫
無腸合訳 | 小説林社 | 光緒三十二年一
三十三年
(1906-1907) |
| (未見。原作は，“Monsieur Lecoq.”) | | | | |
| 毒薬罇 | 法・嘉波留 | 商務印書館訳印 | 商務 | 光緒三十三年八月
(1907) |
| ("The Mystery of Orcival." 1887, tr. from "Le Crime d'Orcival" 1867) | | | | |
| 第一百十三案 | 法・加宝耳奧 | 陳鴻璧訳 | 『小説林』自一期
至十二期 | 光緒三十三年正月
一三十四年九月
(1907-1908) |
| (宣統二年単行，二冊。“File No. 113.” Translated from “Le Dossier No. 113.” 1867) | | | | |
| 情天孽障 | 法・賈波老 | 晴嵐山人訳 | 『新小説叢』自一期
至四期 | 光緒三十三年
一三十四年
(1907-1908) |
| (未完。“File No. 113.”) | | | | |
| 李覚出身伝 三十二回
四冊 | 法・加破虜 | 陸善祥訳・
邱菽園評註改訂 | (?) | 宣統三年
(1911) |
| (未見。“Monsieur Lecoq.” 1869) | | | | |

如上の理由によつて、前二者は此処では省く。

『少年偵探』は、『小説管窺録』に次の様な記事があつて、原作推考の手掛りを与へて呉れる。

少年偵探 三冊全 本社発行

是書自第一章至第二十二章，敘酒室中械鬪殺人案起之原因。自第二十三章至四十二章，追敘老公爵時与楽希納交渉，横暴無礼而楽希納父子報仇慘殺，以致彼此同歸於尽。結尾始回顧少年偵探羅高，見公爵証明前事而案結。

ドイルは、ホームズをしてルロックを「哀れむべき無器用者」と酷評させたが、それはガボリオの探偵小説が本来家庭小説的な面を有ち、犯罪に至るまでの家庭内の情事や秘密に筆を弄することが多く、本格派の推理小説の様に緻密で論理的に構成されたものではない不満を洩したものであらう。『管窺録』の筆者が臆げながらもそれに気附いてゐるのは、注目されてよい。因みに、阿英氏

の書目には、今一篇林少琴訳『少年偵探』(宣統二年，上海中興社刊)のあることを告げるが、彼此同一のものか否かを詳らかにしない。

『毒薬罇』は，“Le Crime d’Orcival.”を訳したもので、恐らく英訳からの重訳であらう。英訳にも、Vizetelly社の1885年版(“Gaboriau’s Sensational Novels.”)・G.Routledge & Sons社の1887年版，同1894年版(“Caxton Novels.”)などがあつて，同一訳なのか別訳なのか，華訳はその何れに拠るか詳らかでない。又，本邦初訳とされる丸亭素人の『大疑獄』(明治二十五年，今古堂・金桜堂刊)との関係も，披見し得ぬ儘に未調査である。物語は，遊蕩で金を使ひ果し自殺寸前にまで追込まれた男が，友人の伯爵に助けられる。しかも，彼はその恩に酬いどころか，却つて伯爵の財産と美貌の夫人を奪はうとする。男の奸計と妻の不倫を知つた伯爵は，死の床で二人への怨みを晴らす——といふ筋だが，例によつて作者の饒舌が多い。華訳は全二十六節，勿論大意訳だが，斧鉞の跡に斑があり，甚しきは，一節を三四頁位に圧縮してしまつた個所がある。訳文は平易だが，少しく粗い。例として冒頭の一節を示す。

哲姆攀德与其子名腓力者，居雪弗村。父子共操一小舟。以刼掠为生。一千八百六十年，七月一号，天方破晓，二人各携器械，赴西姆河边。盖彼等操舟往来，必过勿理村，是村屈来馬伯爵府第在焉。时小舟适停河干。哲姆父子既下舟，见舟中有积水。欲取杓辱而出之，忽覩杓质朽损，不堪应手。哲姆呼谓其子曰，腓力，汝盍赴岸伐取一木，以修此杓。腓力应命，即一躍登岸，竟往勿理草園，繞伯爵府第而行。約步数十步，更踰一壕，見壕旁有枯柳一株，倒垂及地。方欲取刀進伐，忽又見垂柳之側，厯然臥一物，半横於水。怪之，乃狂呼其父曰，父，速来。其父哲姆遙聞其声曰，何事。腓力又大呼曰，父其速来。請視此。哲姆知有異，遂急往其处，視之。見壕边蘆葦中有一女屍，身衣白羅衫，血泥狼籍殆遍。上半截倒臥水中，頭面俱不可見。腓力訝然曰，視此婦死状，得非被人戕害耶。其父諦視久之曰，然。汝意此婦為誰。予疑其為伯爵夫人。(第一節 詢蹤)



等しく文言であつても、林琴南などの訳文とはまるで違ふ。訳者は留学生か何ぞであらう。因みに、この小説は、商務版『説部叢書』第七集第八編（初集本、第六十八編）に収める他、『小本小説』にも収められてゐるから、かなり広く読まれたものと考へられる。

『第一百十三案』は、当初『小説林』に訳載されたが、同誌の廃刊によつて完結に至らず、宣統二年完訳の上改めて同社から単行上梓された。訳文は、原文の二章乃至三章を一章に圧縮し、会話なども地の文に移した形のものとなつてゐるが、まづ良心的な翻訳と言つてよい。

畢柏魯被禁至今九日矣。是日為礼拝二早晨，獄吏入告，以判司所判決。仍領至前日被逮時，搜其衣囊之吏前，還其時表小刀及零碎物。命其在一紙上簽名。然後引之出一暗巷，啓門，促之出，僅旋踵。門即闔，視之，則在聖河畔之碼頭處。孑然一身，絕無行人。噫，自由！判司已不能搜出証拠，以表其罪。噫，自由！伊可以隨其所欲之，呼吸自由之空氣矣。然家家當以閉門羹相待。嗟呼曾子殺人，賢母投杼。何況尋常酒肉之交耶。惟定案後，始能復往日之名譽。往來親友中，若案懸未決，則物議郡疑，其酷也，尤烈於日對獄中之四壁。柏魯至此，雄心頓挫，廢然嘆曰，我無罪也。惟上帝寔知之。時適有二人走過其旁。聽其喃喃自語，憐之。謂其伴曰，斯人狂矣。可憫哉。柏魯是時壯志忽消。擬萌短見，聖河滔滔，忿投於中，以了此身世。既而又轉念曰，否否，吾不応自殺。吾必証明無罪而後死。在獄中時，日夕惟思復仇，常恨吾何故不能自由，竟如籠中之鳥。欲有為而不得，使吾一朝被積，吾必復仇以雪此恥。嗟乎，今非其時耶，非竟被積，亦不覺所擬議之難。凡案之出，必有一犯罪者，設不能覓出真犯，則自己之罪，終不能洗刷，然則如何能得真犯。一至要問題也。柏魯於時雖無成見，然亦未十分絕望。隨向故居去。（第六章）

訳文は少々原文を離れて走り過ぎた観があるが、確かにガポリオーの小説の一面は捉へてゐる。少くも、これまでに華訳された探偵小説の中で、これほどまでに心理描写に筆を弄した作品はないであらう。さうした点でも、ガポリオーの小説の紹介は注目されるのである。因みに、訳者に女性の名を用ゐるのは、上述した碧羅女史（周作人）の場合と同様にこの頃の風潮で、仮托である。又、

雑誌では、各章の末に「覚我贅語」と題する東海覚我（徐念慈）の評語がある。偵探小説，為我國向所未有。故書一出，小説界呈異彩。歡迎之者，甲於他種。雖然，近二三年來，屢見不一見矣。奪產爭風党會私販密探，其原動力也。殺人失金竊物其現象也。偵探小説數十種，無有挾此範圍者。然其擅長處，在布局之曲折，探事之離奇，而其缺點，譬之構屋者，若堂，若室，若樓，若閣，非不構思巧絕，佈置井然，至於室內之陳設，堂中之藻繪，敷佐之簾幙屏榻金木書畫雜器，則一物無有，違論雕鏤之精粗，說色之美惡耶。故觀者每一覽無余，棄之不顧。質言之，即偵探小説者，於章法上占長，非於句法上占長，於形式上見優，非於精神上見優者也。善讀小説者，當亦韙余是言。本書之第一章，其上半則一尋常銀行被竊案耳。所失之三十万法郎，必非傅安德所竊，亦非畢柏魯所竊。余觀叙二人之容貌辭氣，則固已知之。想讀此書者，亦必能見及此。其特色處，即在後半傅安德對書記長之語。其句法則委曲仁厚，其精神則奕奕如生。此等動人性情之語，於家庭教育小説中，尤不多見，不意於偵探小説中遇之。是書之所以為傑作也。（第一章末尾）といつた調子のもので、時人の探偵小説観を窺ふ上で甚だ興味深いものがあるが、今は略して簡に従ふ。

『情天孽障』は、阿英氏の書目でも増補版に、「補遺」として初めて収録された。『新小説叢』は、林紫虬を主編に香港で出版された翻訳小説中心の雑誌で、当時シンガポールに僑居してゐた邱煒菱（菽園）・王星如などが筆を振つた。光緒三十三年（1907）十二月創刊。每期二百頁に近い大冊であつたが、収支償はなかつたか、文字通り三号雑誌で終つたらしい。¹⁾ それだけに、今日では珍しい雑誌とされ、管見に入つたのも、香港中文大學図書館所蔵の第二期（戊申年元月）と第三期（戊申年五月）の二冊に過ぎない。

却説、『情天孽障』も亦『書類百十三号』で、矢張り英訳からの重訳であらう。披見し得たのは、

第三回 困跡監牢憐生意外 愴懷身世灰尽雄心

1) 阿英氏『晚清文芸報刊述略』（上海古典文学出版社，1958）p. 35「新小説叢」参照。尚、同氏編『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』に、林文聡「新小説叢祝辞」・邱煒菱「客雲廬小説話」などを収める。

第四回 情深舐犢妄擬傾家 意感啼鳥終期出獄 (第二期)

第五回 助夫謀主婦防客婦 從妻教小巫見大巫 (第三期)

の三回で、全体を品評するのは不倫の謗を免れないが、まづまづの出来と言つてよい。訳文は、陳鴻璧訳と較べると、聊か古風で垢抜けしてゐないが、簡潔な良さがある。例に倣つて、訳文の一端を示さう。

范鞠躬作別去後、李進臥房、摘去金絲眼鏡、除去假髮一時。衆人所識之李覺、現出本来真面目、は一美少年、広額高額、両目灼灼如火。対鏡理妝鏡前小桌、陳列各種色粉香皂假髮假鬚、色色俱備。李執小掃、細細勻掠、不移時、又是焦氏所遇之赤面赤鬚之胖人。対鏡四照已畢、自語曰、各事俱備、今日可以用計矣。但願范化律謹守所囑、勿耗時刻。范出門直向府署、至時尚候一句鐘久、府官始至。范即將李覺所言所為、作自己所查所試者、細細稟白、又將影図呈上。府官聽畢曰、既然如此、我当今日叠成文案。明早將犯人釈出。於是執筆書曰、

准第一百二十八条刑律控告、布露士之証拠、未足仰司獄官、即將該犯人釈放。

書畢、謂書記曰、此又一難破之案也。可將案卷編明号数、置諸待查之列。

書記遂將文件封、好標記其上曰、第一百一十三宗。(第五回)

訳者晴嵐山人とは陸善祥のこと。好んでフランスの探偵小説を訳した。或いは、幾分かフランス語に通じてゐたかも知れない。既に陳鴻璧訳もあることとて、『情天孽障』は完訳に至らなかつたものと見られるが、彼は更に筆先を転じて『ルコック氏』(“*Monsieur Lecoq.*”)を訳出し、邱菽園に潤筆を求めた。『李覺出身伝』がそれである。

『李覺出身伝』も未見に属するが、幸い阿英氏の『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』に、邱菽園の序と遙遊の評語を収めてゐて、概要を窺ふ参考になる。

……友人香港陸晴嵐、嘗自六千里外郵致近訳『李覺出身伝』、殷以相属、辞之不可、迺發全扁、商兌加密、日既卒業、撮其大意於総序曰：此書之允称奇情者五。一結構、二筆法、三宗旨、四事实、五詞藻也。今夫説部雖多、結構凡二、或取裁著述、如昔之『水滸伝』・『金瓶梅』、或仿效割記、如近之『聊齋誌』^(異脱カ)・『新齊諧』。是作章回、至三十有二、固師前之長者。惟其匠

心独運、幹中有幹、支中有支、以李覺為幹、而偽五月則幹中幹也、以馬利安為支、而老利毡尼・伊士哥和伯・葛都尼侯三家人、則支中支也。此是大營包小營法、須看他步步為營、好整以暇、指揮若定之真本領。又若五城十二樓、空中現之、天風散之、但留印各人之腦筋、無処尋煙雲之陳迹、技至乎此、良云無憾。然或高才而不能細心、洪流而不能曲折、篇章之間、殊少余味、猶未盡善也。……(中略)……書為伝李覺、而李覺以對於馬蘇侯而顯、馬蘇侯以逼於利志安而來。李覺為偵探要素、馬蘇侯為写情中堅、而利志安實為彼兩方之枢紐。故欲諭書中宗旨、利志安其奕奕有神矣。吾聞諸西俠、則有維羊氏之説曰、加対家以暴烈之行為、乃吾人正当防衛法、惡來害己、己必反之、是以直報者也。次、馬沙耳曰、凡欲得真実之平等、惟有捐棄目前一切、彼障礙吾之進行者、誓当擊碎之。三、古路流曰、無人可為吾意中之主人。四、彪修氏曰、恐怖者、政治行為之利器也、当非常之際、必須用之。五、巴枯寧曰、吾党唯物家也、無神論者也、而以唯物家・無神論者為良貴者也。六、拉瓦耳曰、為求幸福、無論施何種之手段、社会不能過問。七、来佈由曰、吾人之恋愛、宜取自由主義、勿為法律礼儀所束縛。八、日内華会之党章曰、敵与敵遇、万不能以兩立、吾人当先向彼宣戰、勇往直前而莫退。九、高潮雪曰、兩間最可惡者為權力、以其絶对的、無容平等之地也。權力之所司者維何? 無非以其為命令之主、而使人服従焉、烏得為平等? 十、恐怖党之恒言曰、目的認手段。吾觀夫志安、於此十義、均各有当、李覺・蘇亦俱有其一体、読之而興頑立懦之志油然而生、明恥勵行之思、怦然而動、此書真不苟作矣。……(下略)……

今日の眼からすると、聊か奇異に映るが、流石に見るべき個処は見てゐる。邱菽園は、「新小説品」(『客雲廬小説話』卷四)の著者として、当代に知られた小説通であつた。

ガポリオーが、フランス探偵小説の始祖として人々の記憶に残つてゐるのに對し、フランス本国では殆んど忘れられ、却つて日本で今尚幅広い読者層を有つのは、デュ・ボアゴベイであらう。彼は、ガポリオーと並んで、ナポレオン三世治下のフランスを代表する大衆小説家で、かなり多くの作品を書いてゐる

が、詳しい伝記は訣らない。僅かに、ロレンツ：ジョルデル共編の『仏蘭西図書総覧』(Lorenz et Jordell: "Catalogue général de la librairie française.") や旧版の『世界百科辞典』("The New International Encyclopedia." 1921) などに若干の所見があり、それに基く先学の研究がある。²⁾ それに拠ると、彼は、1824年マンシュ県のグランピールで生れ、廿歳の時に陸軍省に務め、経理部員として働いた。その間、アルジェリアに出張したり、中東諸国を遊歴したこともあるといふ。小説を書き始めたのは、四十歳を超えてからで、処女作『二人の喜劇役者』("Duex Comédiens." 1868) では余り認められなかつたが、『囚人大佐』("Le Forçat Colonel." 1872) が成功を取めた頃から注目され始め、作家として漸く自立する様になつた。当初、彼はポウやガポリオーに私淑し、ポウの『マリー・ロージェの秘密』("The Mystery of Marie Rogêt.") に倣つたミステリー小説『マリー・ローズの隠れ家』("Les Cachettes de Marie-Rose." 1880) やガポリオーの生んだ探偵ルコック氏を借用に及んだ『ルコック氏の晩年』("La Vieillesse de Monsieur Lecoq." 1878) を書いた程であつたが、決して小さな孫生^{ひこばえ}に終らなかつた。ポウに習ひつつも長篇小説に志し、又ガポリオーが通俗家庭小説に安住したのに対して、歴史の中に素材を求め、新しい時代小説の分野を開拓することに努めた。彼が好んで扱つた時代は、ルイ王朝末期から大革命時代にかけてであつた。大仏次郎の『パリ燃ゆ』の種本ともなつた『^外赤色党』("La Bande Rouge." 1886) はじめ、『恐怖時代の娼婦達』("Le Demi-Monde sous la Terreur." 1877)・『美人の手』(一名『片手美人』, "La Main Froide." 1889)・『鉄仮面』("Les Deux Merles de M. de Saint-Mars." 1878) 等々、すべてさうである。この時代の史実について彼は該博な知識を有してゐたらしく、それを駆使しての創作手腕も亦確かなものであつた。現に、木村毅博士の如き、「探偵・犯罪ばかりでなく、広汎にわたつて社会万般に取材すること、純文学におけるバルザックの様な大手腕」³⁾ とまで、高く評価する先学さへある。大衆小説家として、

2) 江戸川乱歩『海外探偵小説・作家と作品』, 木村毅「ボアゴベのこと」(筑摩版『明治文学全集』47「黒岩涙香集」解題) その他。

3) 木村毅氏「ボアゴベのこと」(前掲解題 p. 382)

これも優れた鑑識眼を具へてみた黒岩涙香が、彼の小説を好み、十六篇も翻案してゐるのも、亦故ある哉。

さて、デュ・ボアゴベイの作品で華訳されたものには、次の様な作品がある。

- | (華訳名) | (原作者) | (華訳者) | (発行所) | (刊年) |
|----------------------|---------|--------------|----------------------|--|
| ✓ 美人手 | [佚名] | 香葉閣鳳仙
女史訳 | 『新民叢報』自三十六号
至八十五号 | 光緒廿九年六月
至三十二年七月
(1903-1906) |
| | | | | 後、広智書局より単行上梓。二冊。 |
| | | | | (黒岩涙香訳『美人の手』の重訳。原作は、"La Main Froide." 1889) |
| ✓ 紅茶花 ^{十六回} | 法・朱保高比著 | 陸善祥訳 | 香港・聚珍書樓 | 光緒三十一年十月
(1905) |
| | | | | (未見。原作は、"La Bande Rouge." 1886) |
| ✓ 指環党 | [佚名] | 商務印書館訳 | 商務 | 光緒三十年十月
(1905) |
| | | | | (黒岩涙香訳『指環』の重訳。原本は、"L'Oeil du Chat.") |
| ✓ 決闘会 | [佚名] | 小造訳 | 『新新小説』 | 光緒三十一年
(1905) |
| | | | | (黒岩涙香訳『決闘の果』の重訳。原作は、"Les Suites d'un Duel." 英訳名 The Consequences of a Duel.) |
| ✓ 決闘縁 | 法・佚名著 | 同文滬報館訳 | 同館 | [刊年未詳] |
| | | | | (『同文滬報』の性格から言つて、前項の別訳と見てよい。) |
| ✓ 巴黎繁華記 | [佚名] | 商務印書館訳 | 商務 | 光緒三十一年十月
(1905) |
| | | | | (黒岩涙香訳『玉手箱』の重訳。原作は、"Porte close." 1885 といふ。) |
| ✓ 秘密囊 | [佚名] | 小造訳 | 『新新小説』 | 光緒三十一年
(1905) |
| | | | | (黒岩涙香訳『武士道』一名『秘密袋』の重訳。デュ・ボアゴベイものといふが、原作未詳。) |
| ✓ 鉄仮面 三冊 | 法・波殊古碧 | 聴荷女士訳 | 広智 | 光緒三十二年九月
一同三十五年十月
(1906-1907) |
| | | | | (黒岩涙香訳『鉄仮面』の重訳。原作は "Les Duex Merles de Monsieur de Saint-Mars." 1878) |
| ✓ 劇盜遺囑 | 法・朱保高比 | 林紫虬
李心霊合訳 | 香港・聚珍書樓 | 光緒三十三年十一月
(1907) |
| | | | | (英訳名 "The Felon's Bequest.") |
| ✓ 色謀凶財記 二冊 | 日・涙香小史 | 黄山子訳 | 改良小説社 | 光緒三十三年
(1907) |
| | | | | (未見。黒岩涙香訳『似而非』一名『悪党紳士』の重訳か。とすれば、原作は "Bouche Cousue." 1883 であらう。) |

- ✓ 天際落花 日・黒岩周六著^(譯) 褚靈辰訳 商務 光緒三十四年五月
(1908)
(黒岩涙香訳『塔上の犯罪』の重訳。原作は“*La Voilette Bleue.*” 1855)
- ✓ 八孀秘録 法・朱保高比 李心靈^譯 林紫虬^譯 『新小説叢』第一期以降 光緒三十三年一
同 三十四年
(1907—1908)
(“*Le Secret de Berthe.*” 1884?)
- ✓ 巴黎麗人伝 法・白華哥比著 張万宇訳 『国風報』第一卷第廿九号以下 宣統二年十月
廿一日—
(原作は“*Bouche cousue.*” 1883)

前例に倣つて、涙香物の重訳は後に譲る。

✓ まづ、『紅茶花』(未見)であるが、阿英氏の『晚清文学叢鈔・小説戯曲研究卷』に、題詞二題を収める。

一

潘 飛声

悩煞遺離語未通，艱危劍氣走豐隆。英雄甘任恩仇報，祇在佳人一笑中。
羅刹紅茶幻影幽，蛇針酒奔屢殲仇。白人智巧徒爭競，一点神燈已碎舟。
冷舟高樓泣素衣，侯門風景尚依稀。即今聚首鄰家屋，草地安閒話落暉。

二

賀 彝

變幻離奇色亦空，欲將首尾擬神竜。滿腔熱血憑君灑，却在秋波一轉中。
俠態狂情激射來，那知樂處寓悲哀。可憐絕代如花女，一縷遊魂下劇臺。
孤雛如子口如瘡，拋撇歧途太忍心。不有解人甘任俠，盤冤長此九淵沈。
記曾變相說金剛，竟使神姦不可方。却笑尚疎施毒針，蛇針到底露鋒鋸。
屢蹈危機命若絲，果能雪恨又何辭。花魂喚起應含笑，一彈遙飛貫臆時。

(原載『紅茶花』卷首)

この題詞から推すと、原作は『*La Bande Rouge.*』(1886)であることは、想像して誤りあるまい。訳者陸善祥には、上述の如くガポリオーの翻訳もあつて、多少はフランス語に通じてゐたかと思はれるけれども、華訳は英訳“*The Red Band; or, the Siege and the Commune.*” (1887)からの重訳であらう。

次に、『劇盜遺囑』は、表紙に『フェロン氏の遺囑』(“*The Felon's Bequest.*”)とあるから、英訳からの重訳であることは明らかだが、原題名を何と言ふかは、未だ突き止めてゐない。蓋し、この作品名乃至はそれらしき作品名が、

管見に入つた二三の書誌や大英博物館の蔵書目録等に見当らぬからである。華訳は、卷末に「此書原本西文，為心靈氏述給紫虬氏筆牘，演繹華字，共編二十七回。脱稿后復郵星洲，請菽園居士校定之，因刪削繁重，增飾章段，以就祖国歴来小説範圍，重加詮次為三十回，使再版以行焉云々。」とあるので、林訳小説などと同じ様に口述筆記といふ方法が採られたものであること、華訳は章回体小説の形式がとられ、その所為もあつてか、かなり刪節潤筆が施された。従つて原作とはかなり異つた趣きを有つ作品に変貌してゐるであらうこと。その最も著しい改変は、勸懲主義の立場から謂はば「警世之書」にしてしまつた(これは原文を読まなくても、想像に難くない)ことなどが訣る。

勿論、ポウ以前の作品だから、純粹な探偵小説ではないし、スリラー小説にも程遠いものである。その筋は——冤罪で投獄された証券取引所の仲買人賈蘭惜は、獄中、二十年の刑に服してゐる大盜賊伯利から、彼が隠匿する財産を譲らうと、その所在を教へられる。やがて、嫌疑が晴れて、賈は出所するが、原の職場では誰も相手にして呉れぬ。孤兒院に育ち、奨学金を得て学業を終へたといふ彼の経歴も、その立場を一層不利にした。相談に乗つて呉れるのは、新聞記者の華霹靂ばかりである。絶望した彼は乱脈な生活を送るが、ふと例の伯利の言葉を想ひ出し、一夜廢屋に忍び込んで大金を手にする。が偶然この廢屋で自殺を図つた金史露を救ふこととなる。実は、この廢屋は、銀行家であつた彼女の父の所有で、彼女も此処で育つた。不幸にも、その父が夜盜に殺されてから、家産は傾く。彼女は、造花などの手仕事を始めたものの如何にもならず、死場所をこの廢屋に選んだのであつた。二人の仲は、急速に親密になるが、同時に暗雲が二人の周辺を取巻き始める。金史露をスペインの貴族司文嘉の妾に売込まうと図る娼婦の杜比鴉、「獅子皇后」と呼ばれる猛獸使ひの女孀蘭、脱獄した伯利など。高孀蘭は、実は伯利の娘で、親許を逃れてサーカス団に入り、今はその花形となつてゐる。賈蘭惜に慕情を寄せる彼女は、見物に来た金史露を猛獸の檻に誘ひ込み、重傷を負はせるが、賈の為にこの折も助けられる。一



方、賭博で折角手にした大金を磨つてしまつた賈蘭惜は、再び廢屋に忍び込むが、別件の犯人を追つてゐた警察の捜査網にかかる。が今度は疑はれることもなく釈放される。かくて、賈・金の二人は結ばれる。——まことに、他愛ない物語だが、資料的な珍らしさはある。

府官斯時極留神注聽，見高說得如許確實，心頗信以為然。乃照高所言，飭令二捕差，將金錢逐層逐捲，搬出点数，看看將盡。高忽連呼曰，日記簿，日記簿。一捕差應曰，完矣。底下全是細紗。高曰，如此則被人劫去矣。捕差忽呼曰，我撈得有物，我撈得有物。但不是日記簿，甚似人骨也。捕差方說出此語，衆人大為震動。偵探長，巡捕官，及巡理府，俱行近烟甸邊，洗唐雖不敢十分行近，然心中顫動，以為金錢堆下，尋出死屍，則我此次探得之新聞。又屬有一無二。惟高辣伯利則雖似見奇，然却不甚露。復自言曰，噫，不難此屍，即是銀行帶書信人馬田乎。難道我第二晚，當醉入睡鄉時，馬淘沙即將他謀死。天下竟有如此負心人。前晚方數人共事，別晚作事，即並將我瞞騙。高言時，捕差在沙內，陸續取出白骨一大堆，並在沙內搬出霉爛衣布一幅。其中有銅鈕一枚，鈕上鑄有B及C二字，則與賈蘭惜末次所取出之日記簿上，所刊字無殊。偵探長見此即曰，此二字母，即銀行被劫人之減筆也。此時尋出之骨，諒即是銀行帶書信人之屍。高曰，不差。所料定合，馬淘沙將馬田擊斃，埋在其下。幸我不在場。若當日在場，無難並我害却。但他謀斃馬田，又不知何人將他謀。斃惟不論何人，他死亦甚值矣。他已取去日記簿內金幣，復將金錢多捲取去。豈不抵死有余。（第二十五回 奇中奇金錢埋朽骨 案外案劇盜述遺書。）

『八嬭秘録』も、李心霊・林紫虬二氏の合訳に係るものであるから、英訳からの重訳であらう。「俠情小説」といふ角書^{つのがき}がある様に、純粹な探偵小説でないことも決る。披見し得たのは、僅かに

第二章 旧友説新歡帷燈匣劍 情恨種疑竇蛇影杯弓

第三章 赴博場無心逢暴客 談命案有意涉雌嬭

の二章に過ぎないし、原作と対照する機会を得ないので、全くの推測の範囲を出ないが、恐らくは“*Le Secret de Berthe.*”（『バルト嬢の秘密』、英訳名“*Berthe's Secret.*”）であらう。以下、原作追究の手掛り^{よすが}を得る縁として、第

二章冒頭の一節を示す。

上章所説李波露所鍾情之雌嬭馬夫人，固一販羊毛商之女，父名裴憐打以營業致富。畢生勤勞，照他所見，拳世無一完人，惟以生非世家，常思張大閭，過于所生，因是好高貪勝。曾三次運動國人，公拳他作議員，卒至三次無成。始大掃興，轉思不如將女嫁與貴族中人，以增門楣聲望。裴作是想，正非大願難償。因其女八嬭，豔名噪一時，又美而慧，有奩金五十萬，將來尚有百萬遺產，總可希望承享，以如許重資，且兼有美名之女子，欲求一貴介聯婚，固甚易事耳。裴早鰥，祇一女，愛若掌珠。幼年送入女學校，至十八歲時，出校居家，些些情性，所有世務，完全不識。有馬仙嬭伯爵者，年四十許，惟尚足以博出校少女之歡。女與伯爵，年歲雖懸殊，後見得男子以愛情相感，亦暫就協洽，且樂作伯爵夫人，由是結婚。自嫁後，女身頓作夫人，自喜甚有聲望，翁婿來往，更不待言。

最後の『巴黎麗人伝』は、英訳“*Sealed Lips.*”に拠つてゐよう。同じ英訳本から、黒岩涙香も『似而非』（改題して『悪党紳士』）を訳してゐるが、両者直接の関係はあるまい。原作は、陰惨で筋も複雑だが、幾分か退屈なところがある。例文として、デミモンドの女の下宿先で、仕掛けられた吊り天井に女（マリイ）が圧殺されるのを、主人公が覗き穴から目撃するといふ凄惨な一節を、掲げて置く。

却説、此室專為窺人而設，恐漏光線，故無窗牖。又恐礙窺視者之潛蹤，故一無陳設。惟地上厚鋪茵毯，以便行步無聲。壁間兩穴，光線熒熒然射入，此羅甸娘子特設之機局，所以便喪節敗行之倫，偷窺鄰室，以求遂其所圖謀者也。媼至是，乃決計必一窺之，于是探手摸索而前。俄而手觸壁間，膝下亦覺有障礙物，撫之知為匠牀，上有墊褥者，即踞于其上，壁間兩穴，直接於目，中心怦怦，若有所畏怖，未敢即窺。久之乃強自鎮定，放眼一窺鄰室。但見一壯麗之牀，牀角四柱，皆作扭絲形，上承重大之穹蓋，流蘇四垂，純然古式之華美牀，而牀中不施帷帳，牀頭障版，適向對立之牆，而自孔穴窺視牀中，了無障礙。此臥室為四方形，左方設暖炉，炉上承物處，陳設古銅器及瓷器數事，右方乃一巨大之衣廚，旁設休息几榻二，別有漆木架，承二瓷檠，二燭輝映其上。初不見此中有人，久之察見一几案，上置女帽，

細弁其式様，知為適間劇場中所見者，乃知其人確已在室。又久之，始察得其所在。蓋彼適負牆而坐，正在兩穴処之下方，寂然不動，垂其首，俯視壁欲驚醒之，而壁間亦厚加墊蓋，有如坐褥，雖猛擊，而依然無聲。再一窺穴，見臥者卒不少動，而穹蓋下垂之勢，則刻刻加甚，羌不知其所底止，而其機振之巧滑円転，直若兩柔相受而無聲。媿媿觀此，震駭無極。（第二回 窺比鄰奮身救同類 囚暗室設誓脫危機）

ガポリオー，デュ・ボアゴベイの時代から一時代を置いて，フランスの探偵小説界に活躍するのは，ルブラン（Maurice Leblanc. 1864-1941）とルルー（Gaston Leroux. 1868-1927）とである。清末も，光緒から宣統に移る頃ともなれば，そろそろこの二人が紹介されてもよい筈であるが，実際にそれが見られるのは，民国に入ってからのことらしい。

今，手許の資料の不足から確認するには至らないが，ルパン物の最も古い紹介の一つとしては，

（華 訳 名） （原作者）（華訳者） （発 行 所） （刊 年）

✓ 福爾摩斯之勁敵 〔佚名〕 心一訳 『小説時報』第十五号 民国一年四月五日

が挙げられるであらう。その冒頭には，「法蘭西有劇賊亜森魯品者，詐詭百出，名震全欧，不特其技有同鬼蜮，而其踪跡亦殊神秘不測云々」といふ三百字ほどのルパンの紹介があるので，原作は何かと首を傾げさせられるが，

一日，竇聞置酒堡中，客為村中牧師葉礼，画師范而蒙，及陸軍士官十余人。酒酣，主人笑顧范而蒙曰，尊容何以劇賊亜森魯品之甚也。范而蒙微愠，旋曰，誠然耶。竇聞正色曰，君誠似渠，言至是，笑而続曰，設余不知君為画師者，余且招警吏来矣，言訖大笑。一座為之粲然。已而戲曰，亜森魯品先生，堡中多古物，君設欲盜之者，盍先往一覽乎。座客益笑。竇聞乃起，導客入別一室。古物均儲其中，一壁有西盤磨斯尼門六巨字，字以木製，嵌壁上而塗以金色。巨字之下為一古書架，架中均古書画。羣客有審察古椅者，有玩弄古物之陳列几上者，有徘徊於古画之下者，有称美不絶於口者。竇聞忽又戲顧范而蒙曰，亜森魯品，君果欲盜之者，今夕為末一夕矣。范而蒙亦戲問曰，何也。竇聞曰，翌日午後四時，英国大偵探福爾摩斯將抵此。福爾

摩斯既来，縦有十亜森魯品，尚何能為。

といった辺りまで読めば、『強盜紳士』（“*Arsène Lupin, gentleman: cambrioleur.*” 1907）中の一編「遅かつたり，シャーロック・ホームズ」であることは，すぐ訣る。華訳は，勿論，英訳に拠つたものであらう。ド・マトス（Alexander Teixeira de Mattos）の訳が，“Newnes' Sixpenny Novels.” か何かの一冊として，いちやく出てゐる筈である。

これに続いて，民国三年から四年にかけての『中華小説界』には，徐卓呆・包天笑合訳『八一三』（“813.” 1910）が連載されているし，中華書局版『小説彙刊』（民国六年一月刊）には，周瘦鵑訳『亜森羅蘋奇案』（選集か）・『水晶瓶塞』（“*Le bouchon de cristal.*” 1910）・『八一三』が収められてゐる。前に誤つて創作の様に記した『雙雄闘智録』も，ほぼ前後して訳出されたものであらう。これは，正しくはルブランの『怪人对巨人』（“*Arsène Lupin contre Herlock Shormès.*” 1907）であつた。蔣瑞藻の『小説考証・続編』巻四に，周瘦鵑の「懷蘭室雜俎」を引いて，次の如く見える。

英倫海峡一衣帶水間，有二大小説家崛起於時，各出其酣暢淋漓之筆，発為詭奇恣肆之文。一造大偵探福爾摩斯，一造劇盜亜森羅頻。一生於英，一生於法。在英為柯南道爾，在法為馮利塞勒勃朗。勒勃朗者，振奇人也。所為小説多種，半言劇盜亜森羅頻事。其風行於歐洲也，与福爾摩斯同，而文字思想，亦正与柯南道爾工力悉敵。法人嘗自誇，謂不讓英吉利以福爾摩斯驕人也。予居恒頗好勒氏書。其描写劇盜之行徑，真有出神入化之妙，筆飛墨舞，令人神往。所著長篇，有『亜森羅頻』・『亜森羅頻与福爾摩斯之比較』

（此二書予已訳出，一名『法筵之王』，一名『雙雄闘智録』）・『空針』・『八一三』・『水晶塞』・『虎口』諸作，短篇可三十種。予嘗移訳其半，而諸書中之最有神味者，允推『雙雄闘智録』，勁敵相遇，各出其奇智以相角，擲筆空中，栩栩欲活，令読其書者，如見字裏行間，躍然有一福爾摩斯，一亜森羅頻在也。

この文は，民国十二・三年（1923～24）頃に書かれたものであらう。これによると，如上のもの他にも，（周瘦鵑の訳に係る『法筵之王』（“*Arsène Lupin, gentleman: cambrioleur.*” 1907）・『雙雄闘智録』（“*Arsène Lupin contre*

Herlock Shormès.” 1907)・『空針』(“L’Aiguille-creuse.” 1910)・『虎口』(“Les Dents de tigre.” 1921)はじめ、かなりの数の作品が、訳出されてきたことになる。これらは、多く文言訳であつたらうが、やがて白話訳に改められ、民国十四年(1925)には大東書局から、長篇十種・短篇十八種を収めた周瘦鵬・沈禹鍾・孫了紅編『亞森羅平案全集』が出た。

ところで、中国には、ルパン物を受け容れるに十分な素地があつた。『水滸伝』に象徴される緑林の豪傑を主題とする武俠小説の伝統がそれで、ニック・カーター物の流行などとも軌を一にする。かくて、孫了紅は、「東方のアルセーヌ・ルパン魯平」を主人公とする一連の『俠盜魯平奇案』を創作するが、その中の一篇『鬼手』では、大探偵霍桑を登場させる。霍桑は、程小青が創作した「中国のシャーロック・ホームズ」で、ワトソン役の包朗によつて語られる小説の主人公である。これに劣らじと、陸澹盦は、アルセーヌ・ルパンが、中国の探偵李飛に挑戦状を送る趣向を案出(『怪函』)すれば、張碧梧は、俠盜羅平と探偵霍桑とが知謀をめぐらせて死闘を繰返す『雙雄闘智記』を綴つた。後者が、上記の周瘦鵬訳『雙雄闘智録』を、のつけから振るものであることは贅するまでもない。⁴⁾ルブランが、実在の人物 Arsène Lupin 氏の抗議に遭つて、主人公の名を Arsène Lupin に改め、ドイツの手厳しい批判を受けて、Sherlock Holmes を Herlok Sholmès に変へたことは一寸した逸事だが、中国では却つてそれが、読者の喝采を浴びたのである。

因みに、陸澹盦の創造した探偵李飛は、大学生の素人探偵だが、これは明らかに少年探偵ルールタビユ(Rouletabille)の変形であらう。ガストン・ルルーの作品は、さう多くは紹介されなかつたらしい。ただ一つ気になるのは、

少年偵探 林少琴訳 上海・中興社 宣統二年(1910)

だが、未見の作品でもあり、且、上記の如く同じ題名のガボリオの作品もあることなので、俄かに判断し難い。

以上の他にも、フランス物としては、

4) 范煙橋「民国旧派小説史略」(魏紹昌編『鴛鴦蝴蝶派研究資料』所収)六「翻訳小説」,七「偵探小説」の項。同『中国小説史』第五章第二節「最近之十五年」参照。

- 毒蛇園 法・鮑福原注 知新室主人訳 『新小説』自第八号 自光緒二十九年(1903)八月十五日 至卅一年十二月
 妒婦謀夫案 法・紀善 周桂笙訳 『月月小説』第六号 光緒卅三年(1907)二月
 (高竜偵探第四案。『新菴九種』所収)
 紅痣案 同 同 同 同 第十一号 光緒卅三年(1907)十一月
 (高竜偵探案之一案。同前。)
 納里雅偵探譚 法・哈倫斯 商務・訳 商務 光緒卅四年(1908)
 収「七粒珠」・「三水手」・「鼓琴図」・「寄電匣」
 碧血巾 四冊 法・佚名 蔣景緘訳 時事報館 宣統元年(1909)

などがあるが、後の二者は未見、爾余のものも未だ原作を究明するに至つていない。

(四) 日本訳から重訳された作品

上に一言した様に、当代に華訳されたガボリオやデュ・ボアゴベイの作品の大半が、黒岩涙香訳の重訳であるといふことは、彼我の文学交渉の密接なことを物語るものである。それは、決して怪しむべきことではなかつた。

ドイツの「シャーロック・ホームズもの」を、中国に最初に紹介したのが、梁啓超の編輯する『時務報』であつたこと、又それが、中国に紹介された西洋種の探偵小説の嚆矢であつたことについては、本稿の冒頭に記したところである。その梁啓超は、戊戌政変(1898)後日本に亡命し、横浜で『清議報』を創刊する。政客でもあつた彼の文学観は、極めて功利的なものであつたが、それだけに当代の人々に与へた影響は大きかつた。『清議報』に訳載された小説は、梁啓超訳『佳人奇遇』・周達訳『経国美談』といった政治小説に限られたが、次いで創刊された『新民叢報』(光緒二十八年正月創刊)や『新小説』(同年十月創刊)になると、少年文学・科学小説・探偵小説・家庭小説と内容的にも幅を見せ、新文学の胎動を促す。これらの雑誌に訳載された小説の殆んどが、日本語から移訳されたものであることは、贅するまでもない。かくて清末民初の文壇には、明治文壇の影響が、さまざまな形で現はれる。探偵小説流行の気運も、その一である。

勿論、如上の現象の背後には、広い意味での文化（政治・経済・教育・軍事・警察など）交流がある。就中、文壇と密接な関係があるのは、書肆・出版社の大陸進出であらう。宮島大八の善隣書院・岸田吟香等の楽善堂及び勸学会・伊沢修二等の泰東同文局・下田歌子の作新社と、この種の出版社は、明治三十年（光緒二十三年，1897）頃から進出を始めるが、中でも注目すべきは、「上海商務印書館」と我が金港堂との提携であつた。すなはち、光緒二十八年（明治三十五年，1902）夏、同書館は名称を「中国商務印書館」と改称すると共に、組織を改めて合辦とし、新に編訳所を設け、折柄教科書疑獄事件に失脚して悲運を歎つてゐた長尾楨太郎（号雨山。元高等師範学校教授）・小谷重（元文部省図書審査官・金港堂編輯長）等を顧問として招き、活発な出版活動を開始する。勿論、当初は緊急を要した教科書類の出版が主であつたが、翌光緒二十九年になると、上にも引いた『繡像小説』を創刊（五月一日）、又『夢遊二十一世紀』（“Anno Domini 2071.”, translated from Dr. Pseud Dioscorides's “Anno 2065, een Blik in de Toekomst.” by Dr. Alex. V. W. Bickers., (William Tegg, London. 1871)・『売国奴』（登張竹風訳『売国奴』、原作は Hermann Sudermann: “Der Katzensteg.” 1891）はじめ、上述した『華生包探案』・『奪嫡奇冤』といった小説類の出版も始めるし、光緒三十二年（1906）には、世界文学全集とも謂ふべき『説部叢書』の刊行を開始し、ついで『林訳小説叢書』・『欧美名家小説』、それらの廉価選書たる『小本小説』・『袖珍小説』等々、清末までに幾多の文芸叢書を出版した。かうした出版物の中には、例へば上記『売国奴』の如く、原典たる登張竹風訳より華訳の方が先に出版されるといふ、常識では一寸考へられない様な珍本も存在するのである。

金港堂・商務印書館の合辦事業は、僅か十二年ほどで幕を閉じた。しかも、その初期に於ては、金港堂側に「教科用図書検定違反事件」（明治三十二年五月～三十五年十月）・「教科書疑獄事件」（明治三十五年十二月～三十七年六月）といふ難題があつて、原亮三郎父子は起訴される身であつたから、公表することさへ憚られた趣きであるし、民国に入つてからは、民族資本の独立経営を望む声が彼に起り、金港堂も次第に熱を失つて、遂に利権を譲渡してしまふ。か

うして、原亮三郎の懐いた夢は崩壊するが、その間に果した功績は大きい。

因みに、金港堂・商務印書館の合辦事業については、樽本照雄君に詳しい研究がある。参考すべき論文である。⁵⁾

(1) 徳富蘆花の『外交奇譚』

却説、明治の探偵小説で、最初に華訳されたのは、徳富蘆花訳『外交奇譚』（Allen Upward: “Secrets of the Courts of Europe.” 1897.）中の諸篇である。当時、蘆花は『不如帰』の成功によつて、一躍文壇の寵児となつてゐたけれども、この場合は、蘇峰の弟の訳著といふことで、親しまれたものらしい。梁啓超は、徳富蘇峰に私淑し、自ら「中国の徳富蘇峰」たらんことを期した。「筆鋒常に情感を帯びた」かの「新民体」の文体の如きも、実はマコオレイばりの文章を得意とする蘇峰のそれから来てゐることは、これ迄にも屢々指摘して置いたところだ。⁶⁾

(華訳作品名)	(華訳者)	(誌名・号数)	(刊年)
2024 百合花	佚名	『新民叢報』十二号	光緒二十八(1902)年 六月十五日
(蘆花訳「百合の花」。原題名 ‘A Scandal at the Elysée.’)			
313 俄皇宮中之人鬼	曼殊室主人訳	『新小説』二号	同年十一月十五日
(蘆花訳「冬宮の怪談」。原題名 ‘The Ghost of the Winter palace.’)			
602 外交家之狼狽	中国某訳	『新民叢報』第廿七・ 第廿九号	光緒廿九年二月十四日・ 同三月十四日
(蘆花訳「鉄公の退隱」。原題名 ‘Prince Bismarck's Fall.’)			
703 竊皇案	中国某訳	『同』第卅三・ 第卅四号	光緒廿九年五月十四日・ 同五月廿九日
(蘆花訳「王の紛失」。原題名 ‘A Stolen King.’)			
101 白絲線記	披髮生訳	『新小説』六号	光緒廿九(1903)年 六月十五日
(蘆花訳「白糸」。原題名 ‘The White Thread.’)			
75 返魂香	喋血生訳	『浙江潮』第八期	光緒廿九年八月廿日

5) 樽本照雄氏「金港堂・商務印書館・繡像小説」(『清末小説研究』3); 拙稿「商務版『説部叢書』について」(『野草』27号), 「吳禱訳『売国奴』その他」(『中国文芸研究会会報』24)。

6) 拙稿「徳富蘆花と現代中国文学」(『天理大学学報』二輯・三輯), 同「梁啓超の文体」(『中国語学』第十五号)

(前掲「王の紛失」の別訳。原題名 'A Stolen King.')

マ 瑪 腦 印 佚名訳 『外交報』第七十二・第七十七期 光緒卅年(1904)二月十五日・同四月五日

(蘆花訳「法王殿の墓」。原題名 'The Tomb in the Vatican.')

ウ 埃 及 妃 佚名訳 『同』第七十七・第九十二・第九十三期 同年四月五日・九月五日・九月十五日

(蘆花訳「一億万法の賭博」, 後改題「一億万法」。原題名 'The Perfidy of Monsieur Disraeli.')

ク 紅 花 球 佚名訳 『同』第九十三・第九十六期 同年九月十五日・十月十五日

(蘆花訳「大使夫人」。原題名 'Madame the Ambadressess.')

カ 波 斯 剪 佚名訳 『同』第九十六・第九十七期 同年十月十五日・十月二十五日

(蘆花訳「土京の一夜」。原題名 'A Seraglio Secret.')

キ 一 条 鞭 佚名訳 『同』第九十七・第九十八期 同年十月二十五日・十一月五日

(蘆花訳「鞭の痕」。原題名 'The Honour of an Empress.')

ク 易 児 説 佚名訳 『同』第九十八・第九十九期 同年十一月五日・十一月十五日

(蘆花訳「とりかへ子」。原題名 'Prince Citron.')

ケ 三 刺 客 佚名訳 『同』第九十九・第一百期 同年十一月十五日・同二十五日及十二月五日合併号

(蘆花訳「三刺客」。原題名 'A Royal Freemason.')

以上の内、「俄皇宮中之人鬼」は、『飲冰室專集』にも収められ、梁啓超の訳と見られてゐるが、『新小説』には「曼殊室主人訳」とあるから、麦孟華の訳であらう。麦孟華(1874~1915)、字は孺博、号は蛻庵、広東省順徳の人である。光緒十九年挙人に貢せられたが、やがて康有為の万木草堂に学んだから、梁啓超とは同硯の誼がある。戊戌政変後、彼も来日、梁が在米華僑の招きでハワイに赴いた後を承けて『清議報』を主宰し、又大同高等学校の校長代理を勤め、光緒三十三年(1907)には政聞社を興して、保皇立憲を唱へた。「外交家之狼狽」以下の訳者「中国某」は、これが『説部腋』(新小説社刊、光緒三十一年)に収められた際には「披髮生訳」と改められてゐるから、羅普(孝高)の訳である。羅普も亦順徳の人、麦孟華の妹婿である。戊戌政変後、彼も渡日して、東京専門学校(早稲田大学の前身)に学んだ。同校に学んだ中国人学生の第一号である。煙山專太郎著『近世無政府主義』に素材を仰いだ虚無党小説『東欧女豪傑』の作者に擬せられる他、梁啓超訳『佳人奇遇』や『十五小豪傑』(森

田思軒訳『十五少年』の重訳)の助筆も勤めた。⁷⁾

『返魂香』は、大意訳に近いが、矢張り蘆花訳「王の紛失」に拠つてゐる。参考の為に、羅普の訳を併せ掲げ、冒頭の一節を覗いて置く。

曩年欧美新聞、喧伝西班牙王約芬十三世、是閱兵帰、驟罹奇症、不省人事。太后驚痛欲絶、日夜待湯藥、王師傅奧維垂僧正、与宰相格湯、及御医二人、亦不離左右、惟以勢危故、問疾者多不許入觀。韶華駒走、惡事逼人、勿藥之喜終無日卜。時余適居駐劄西班牙法国公使之任滿、旅京城馬德里(マ、)士。余為公使時、頗与約芬十三世雅愛。惟既挂冠、入覲亦非易事。奈何群情洶洶、恐大關係於国際問題、不敢嫌唐突、進謁太后以覲王請、不料竟遭擯謝、怏怏帰。(「返魂香」)

二年前某月某日、忽有電報達於欧洲各国之新聞紙館。皆称西班牙幼王阿豊瑣第十三世有疾、不能聽朝。病雖非劇、頗慮伝染。時太后摂政、自率兩侍者与王同居、親視湯藥、又下令禁絶交通。其時許出入王之病室者、侍医之外、惟師傅奧利威暨宰相鴉士他拉兩人。此消息伝播遠近、人莫不信以為真、而不知王実非病、盖被拐耳。有願聞其詳者、余請述之。

卻説某月某日、西班牙首都举行大閱之典、王当与太后臨觀。治駕将発、忽從郵政局飛一書至、乃通呈太后者、表題急報二字。太后披閱畢、大驚欲絶。(「竊皇案」)

羅普訳も周密体のものではないが、かなり忠実に原文の跡を逐つて居り、殊に平易な文章で、ふくらみのある蘆花訳の呼吸を多少なりとも写さうと努力してゐるのに対し、喋血生訳は生硬な大意訳と、対照的である。加之、喋血生訳では、「素より余は該国に駐劄したるにはあらず云々」(蘆花訳、三)といふ一節を繰り上げて冒頭の一節に接続せしめ、觀兵式当日の太后充の怪文書的一件・王の失踪等の記事を、その後に移すといつた改作を施してゐる。その為、屈折した探偵小説的味はひは薄れ、平凡な実録風の読み物に墮してしまつたことは、否定出来ない。

7) 拙稿「晩清に於ける虚無党小説」(『天理大学学報』第八五輯)。

「瑪腦印」以下七篇は、湯友誠氏によつて、新しく指摘されたものである。⁸⁾ 訳者は明示されてゐないが、羅普と推測して誤りあるまい。蓋し、ここに訳出された七篇は、既訳の作品を注意深く省いてゐる。殊に、『新民叢報』に訳載された「百合花」の如きは、雜俎欄に「海外奇譚」として掲げられた二篇中の一編で、編輯の内幕に通じてゐた者でなければ、氣附く筈はない。又、この時期に、羅普は康有為の密命を受けて上海に赴き、狄楚青・梁啓超と共に『時報』創辦のことを議し、やがてその総主筆となつて、同地に居住することとなる。⁹⁾ 彼を措いては、他に考へられないからである。因みに、梁はこの年（光緒三十年）一月香港で開かれた保皇会大会に出席、二月下旬日本へ戻る途中上海に潜入、日本名吉田晋（吉田は吉田松蔭にあやかるものである）を名乗つて、虹口の日本旅館「虎廬家」に投じたもので、その行動自体が甚だスリルに満ちたものであつた。

「百合花」以下の数篇については、旧稿に訳列を引いて説いたことがあるし、上にも引いたから、今は略して簡に従ひ、「瑪腦印」の冒頭の一節を参考までに挙げて置く。

外交小説

本書原名歐洲朝廷之秘密。蒐述奇聞，都十余則，係刺取當時實事，而潤色点竄之者，虛耶實耶，讀者作小説觀可也。訳文間有増損，期鑿閱者之目而已。

瑪腦印

羅馬教皇披士第九在位時，予借用著者口氣，
其實假託也為法國公使，駐節此邦，蒙教皇倚信甚篤，意殊自得。惟引以為難者，身居羅馬，而與義大利朝廷諸人，不能不斷絶往来耳。蓋教皇與義政府，冰炭不容，已非一日。嘗憶曩年，葡萄牙王行幸羅馬，欲見教皇，則慮失歡於義王，欲訪義王，則又得罪於教皇，卒兩不拜謁而去。凡通曉羅馬情形者，當已諗知此事矣。雖然，予不能公然

8) 湯友誠「晚晴の翻譯小説——中島利郎編『華訳日文小説編年目録』補遺」(『啞』第12号)

9) 楊家駱主編『梁任公先生年譜長編初稿』卷十三，光緒三十年の条。包天笑『鉤影樓回憶録』の「新聞記者開場」・「時報懷旧記」の項その他。

出入義廷，而廷臣中亦有與訂私交者，如費斯迦羅伯爵，即其一人也。伯爵性情誠摯，聞見駭博，系出名閥，家亦多財。惟不知何故，頗不孚衆望。予固外人，末由知其委曲。惟聞其歲受恩俸於政府，故疑其召謗之由，即在於此。此外絶無可指摘者。且伯爵夫人，美而知礼，待予頗殷勤。故予常過從其家，未嘗薄視之也。伯爵與予皆有嗜古癖，見玉石碑印之類，輒相與評賞為樂。大抵義大利貴族，皆好古玩，與我法人之好女伶，英人之好拳法好蓄犬，殆不相下。范的康宮中，有一博物院，搜藏古貨至夥，入其中者，但覺光彩奪人，目不暇給。予幸奉使此都，覓有余暇，輒縱遊其間，以飽眼福。惟每赴博物院，途遇伯爵，邀之偕往，皆假故見卻，予以嗜好如彼，獨不肯一赴博物院。

かうした外交小説乃至は国際スパイ小説が、彼に於てどの程度歓迎されたかにはやや疑問があるけれども、やがて既述するオプンハイムやル・キューの紹介に連り、清末・民初の頃に一寸したブームを捲き起す。それについては、尚後に少しく触れよう。

(四) 涙香物の重訳

ところで、明治の探偵小説と言へば、まづ黒岩涙香に止めを刺す。新聞人としての存在も、蘇峰に比肩して劣るものではない。かくて、涙香物の華訳は、探偵小説以外の著作をも含めるとなると、凡そ二十種ほどになる。その嚆矢をなすのは、

(華訳名)	(原作者名)	(華訳者)	(掲載誌)	(刊年)
離魂病	佚名	披髮生	『新小説』自第一号至第六号	自光緒廿八(1902)年十月十八日至同廿九年六月十五日

(黒岩涙香『探偵』〔創作])

で、完訳後間もなく単行上梓された。阿英氏の書目に、「光緒二十九年(1903)広智書局刊」とあり、顧燮光の『小説経眼録』には、別に「文明書局本一冊」のあることを伝へ、併せて

披髮生訳述。本書所演奇案，乃美国事實，年月無考，約二十年前事也。所記乃美之奧利安州厚利銀行失銀一事。中如阿松之貞，雁英之義，院長之酷虐，真二福太阿桃之陰險，余金藏之病，縷晰言之，一洗翳障。惟訳筆間

有冗復，然演義体固宜爾也。

とその概評を記す。以上の他，単行本ではないが、『新小説彙編』巻二にもこれを収める。

『離魂病』は，華訳された最初の長篇探偵小説であつた。その原作者及び原作について，上記の資料には何も明示してゐないが，黒岩涙香の『探偵』である。伊藤秀雄氏の研究に拠れば，この小説は，もと明治二十三年（1890）春頃の『都新聞』に掲載され，同年七月扶桑堂から単行上梓された『涙香集』に収められたもので，涙香得意の翻案物ではなく，創作であるといふ。¹⁰⁾『涙香集』に収める他の諸篇には「涙香小史集」と署されてゐるのに対し，本篇には「涙香小史著作」とあること，及び本篇と小品「広告」（『絵入自由新聞』掲載）とを抜いて別冊とし，『探偵』と題するものが同時に出版されてゐるから，創作たることはまづ疑ひない。もつとも，この時分，涙香は未だ十分創作に習熟して居らず，面白い材料を扱ひながら幾分か持てあまし気味で，途中から嫌気がさしたか描写が粗雑となり，結末を急いだらしく，傑作とは評し難い。而して，華訳に『離魂病』と題するのは，小説中の重要人物中井銀行の頭取中井金蔵が離魂病（夢遊病）の持主で，黒田真一から預つた五万円を，夜中手提金庫から地下室の壁穴に移したのを全く意識せず，大金紛失と狼狽したことが，事件の発端になつてゐるからである。訳者披髮生を『東欧女豪傑』の作者（嶺南羽衣女士）に擬するとすると，彼は同時に創作・翻訳小説の筆を執つてゐたことになる。しかも一方で，「政党論」（『新民叢報』自第廿五号一至第廿七号。自光緒廿九年一月至同年二月）といった真面目な論文も書いてゐるのだから，大変な精進ぶりだ。訳文は，

這時恰可獄卒進來報會面時限滿了。阿桃便悻悻然不顧而去。小谷見阿桃去了，正在呆立妄想。忽見那屋裏的黑魁，走出一個人來，拉着小谷手說，妙哉妙哉。我懂得了。小谷驚定一看，原是包探這件案情的賽孫。只見賽孫再向小谷說，我即前去尾着阿桃，晚上纔得歸來，你坐等消息罷。說者，大踏

10) 伊藤秀雄『黒岩涙香・その小説のすべて』（桃源社刊。昭和四六年）。因みに，本稿に於ては，氏の研究に負ふところが多い。新聞初出の時期は，その儘氏の調査に従つた。

步出了獄門，見前面有一女子，急足而行。認得正是阿桃。於是遙遙跟着，如影隨形，左灣右轉，無何到了余宅門口，只見阿桃左右望了幾眼。正欲入門去，賽孫突如電光一閃，早閃身走近阿松身邊，附耳語道，你想帶着小谷自獄中逃走嗎。真算大胆的了不得。阿桃聞說，變了面色，回頭一顧，見賽孫正在自己身後，急伸手在衣袋拿出一扇短鎗，向着賽孫一閃。可憐賽孫噉咬一聲，便倒在地下，脉也停了，氣也絕了。

といった調子のもので，まづまづ原文通りであるが，時に

這個疑團，不讀到這本小說結尾那一葉，終是不解約。訳者屢想把那黑幕，預先開了，免得看官著急，總恐犯了小説的体例，只得忍著不說。

といった饒舌を混へてゐる。『小説経眼録』の著者が，「惟訳筆間有冗復，然演義体固宜爾也」と言つてゐるのは，半ばはもたつた涙香の原文の責任でもあるが，半ばはこの種の饒舌の挿入を指すものと見てよい。序でを以て言へば，同じ著者が，「本書所演奇案，美国事实，年月無考，約二十年前事也」と言つてゐるのは，華訳の冒頭を引くもので，御愛嬌であるが，裏を返すと，未だ「探偵小説」に目馴れぬ時人の小説観を窺はせるもので，決して一笑に附し去るべきではない。

今一つ。華訳では，中井銀行が厚利銀行。頭取の中井金蔵が余金蔵，その長男金太郎が福太，娘の桃子が李阿桃，会計長の小谷常吉が范小谷，船乗りの黒田真一が田真一，探偵の水嶋浮が賽孫といふ様に，改められてゐることである。勿論，涙香流の翻案態度を模したものであることは贅するまでもないが，海外文学に馴染みの薄い読者に対しては，採られてよい手法の一つであらう。後出の翻訳作品中にも，その顰に仿ふものが多かつたことは，既に見来つたところである。

『離魂病』に続いて，翌光緒二十九年（1903）には，

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(掲載誌)	(刊年)
美人手	法国某	香葉閣鳳仙女史	『新民叢報』自第卅六号一至第八十五号	自光緒廿九年六月廿九日至同卅二年七月一日

(黒岩涙香訳『美人の手』，改題して『片手美人』。原作は du Boisgobey : "La Main Froide." 1889)

があるが、これについては別稿で詳説したことがあるから、今は再説しない。¹¹⁾ただ、原作についてであるが、“*La Main Froide.*” [1889] (『冷たき手』) の英訳 “*The Cold Hand.*” とする木村毅・柳田泉説と、“*La Main Coupée.*” [1880] (『斬られた手』) の英訳 “*The Severed Hand.*” とする田中潤司説とがあつて、今の私にはその何れとも決し難い。実は、旧稿では田中説に従ひ “*La Main Coupée.*” としてあるのだが、それは “*La Main Froide.*” だとすると、1889年は即ち明治二十二年で、その年の五月から涙香訳が『絵入自由新聞』に連載されるのだから、同年上半期のうちに原作から英訳、英訳から涙香訳と転訳されたことになり、時間的にも無理な様に考へられたからである。しかし、涙香は、デュ・ボアゴベイが余程好きであつたらしく、時としては驚く程早く翻案してあるものがある。例へば、明治二十二年(1889)十一月四日金桜堂・今古堂から上梓された『指環』 (“*L’Oeil du Chat.*”) は、前年中の『都新聞』に連載されたものと目されてあるが、H. L. Williams の英訳 “*The Cat’s-eye Ring.*” が G. Routledge & Sons 社及び Guildford 社から上梓されたのは1888年のことである。¹²⁾ とすると、如上の疑問は一応解消することになる。又、「英訳が “*The Cold Hand.*” (義手) というので、これは明確うたがいようがない」(筑摩版『明治文学全集』47『黒岩涙香集』解題、三九四頁) と言ふ木村毅氏の発言は甚だ確信に満ちたもので、田中説を念頭に置いての発言とも受け取られる。涙香の蔵書は、その歿後、白石実三氏の許に保管されてゐたが、大正の末期頃市場に出、かなりの量が木村毅氏の架に帰した(その一部は、後に江戸川乱歩氏などに贈られたといふ)。氏の発言は、さうした資料を踏まへての発言であり、柳田泉氏もこれを認めてゐるとすると、暫くこれに従ふのが

11) 拙稿、前掲「晩清に於ける虚無党小説」。尚、田中潤司氏「海外探偵小説総目録」のデュ・ボアゴベイの項には、江戸川乱歩氏の追記がある。

12) 因みに、“*The Cat’s-eye Ring.*” には、ヴィゼトリー社 Vizetelly & Co. から出た “*Sensational Novels.*” に収める廉価本があり、涙香はこれに拠つた可能性はあるが、手許のノートには刊年を記しそびれてゐる。又、田中氏の「海外探偵小説総目録」に “*Le Plongeur.*” (1889) (潜水夫) 英訳 “*Nameless Man.*” 海底の重罪 (涙香) 明治22」とするは誤。“*Nameless Man.*” の原題名は “*L’Homme sans Nom.*” 1872 である。『海底の重罪』は、明治廿二年一月三日から『都新聞』に掲載されたものと推定されるから、“*Le Plongeur.*” では原作より涙香訳が早く出たことにもなる。

穩当の様である。後考に俟つ。

『美人手』と並んで、この年には、又、

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
奪嫡奇冤・二冊	[佚名]	商務・編訳所	商務	光緒二十九年 (1903)

があるのが注目される。『説部叢書』所収の本は、紙型印刷による後刷本で、一冊に合綴されてゐるが、原本は二冊であつた跡を示す。巻首に、光緒二十九年孟冬彼岸居士の序があり、訳者も商務印書館編訳所となつてゐるが、何人か定かではない。

本書にも、涙香物の重訳たる明示はないが、黒岩涙香の『人耶鬼耶』の重訳であることは明白である。言ふまでもなく、原書はガボリオの『寡婦ルルーシュ事件』で、涙香はその英訳によつてゐる。ジョン・カーター (John Carter) の記すところによると、ガボリオの小説の初版本は、今日では到底入手し難い稀本に属し、英訳は、フレッド・ウィリアムズ及びジョージ・アーネスト共訳の “*The Widow Lerouge.*”, tr. by Fred Williams & George A. Q. Ernest (James R. Osgood & Co., Boston 1873) が、最も古いといふ。イギリスでは、アメリカより十二年も遅れて、1885年ロンドンのラウトリッジ社 (G. Routledge & Sons Co.) から上梓されてゐる¹³⁾ が、涙香が何れに拠つたかは詳らかでない。恐らくは、後者であつたらうけれども。

さて、涙香訳『人耶鬼耶』は、当初『今日新聞』(明治三十 [1887] 年十二月十四日以降) に掲げられ、翌年十二月四日小説館から単行上梓された。単行上梓されたのは、同じ新聞に一足先に掲げられた『法庭の美人』(明治二十年十月) よりも早いから、処女出版と言つても差支へない。而して、涙香が本書を訳出するに至つた動機なり目的なりについては、自ら緒言に記すところがある。

予今回訳述する「人耶鬼耶」と題せる此一篇ハ仏国にて古来其例なき大疑

13) John Carter: *Detective Story Catalogue*, Scribners.; Ibid: “Detective Fiction.” (in “*New Paths in Book Collecting.*”) p. 40.



獄の顛末なり、大疑獄とハ其の事件の大なるには非らずして其事柄の疑はしく罪人の判じ難きを云ふなり。余が此篇を訳述するハ世の探偵に従事するものをして其職の難きを知らしめ又た世の裁判官たるものをして判決の苟しくもすべからざるを悟らしめんが為なり。之を切言すれば、一ハ人權の貴きを示し一ハ法律の軽々しく用ゆべからざるを示さんと欲するなり。

華訳者の意図も、亦同様であつた事は彼岸居士の序に徴しても明らかであるし、読者も亦さうした受け取り方をしてゐたことは、觚菴の『觚菴漫筆』に偵探小説、余甚佩『奪嫡奇冤』一書、即一名『枯寡婦奇案』者、不僅案之反覆曲折見長、即搭司官之裁判時、其審度寬嚴、折衷至當、實足令人五体投地、且有裨於臨機斷事不淺。

として、タバレー爺さんから、犯人は皇族で侯爵たるコモリン・レトーの長男伯爵コモリン・アルバートであることを知らされた判事のダブロンが、如何すべきか去就に迷ふ一節（第十二章）を引用してゐる事によつても、明らかである。訳例は、右の文例だけでも十分であらうが、煩を厭はずに巻末の一節を挙げて置く。蓋し、華訳が涙香訳に基くものである事を明示してゐるからである。

正欲向楼下衆捕役等有所言、突有鎗声二響、発自楼上理野亜房中。奇藍古辣聞之、知彼等已自尽、不覺欣然、衝口自語曰、好好、彼等之事畢矣。於時捕役諸人、亦一擁上樓、随同奇藍古辣急往理野亜房中視之。其情形實為可慘。当見沙參儒与理野亜並坐一長椅之上。各以手鎗擊其咽喉、洞穿而死。其傍置有遺書二通。即沙參儒瀕死之所親写。其書一以貽奇藍古辣、一以貽搭司官者。奇藍古辣当即遣人急召医生驗視。迨医生驗視訖、則二人之死殊絕、已無可如何。奇藍古辣乃令捕役將二人屍骸守護、随自將沙參儒遺書、收藏衣袋、立往公堂見搭司官。見時、即將沙參儒貽搭司官之遺書一通取出、交与搭司官、書中所言、乃沙參儒自陳其刺死枯羅甸之事之始末、詳晰具備、与奇藍古辣前此所查得者無異、並請司官速即將爾卑爾德省釈等語。搭司官乃立將爾卑爾德釈放、而爾卑爾德從此乃始得逍遙自在。復其青天白日自由之身。至沙參儒与理野亜之屍骸。則由奇藍古辣庫摩靈理野墮及沙參儒夫人之弟某三人昇去、如法營葬。葬畢、奇藍古辣歸。乃始將沙參儒所与之遺書取出細

閱、其文録下。

世間最易致誤之事、殆無如公堂之判案者。且雖已致誤、而初不自知、至於無罪之人而処之以死刑者、亦復不少。彼人既被処死刑。既死之後、無口申訴、其誤終無由而知、即使或知之、而斷者不可復続、死者不可復生。終無由以償其命。吾知足下固見義勇為之人。伏望速籌建設一協會、使万国廢除死刑、足下誠与吾有同心者、則吾頃者向理野随索得銀二万円、現其銀尚藏於吾之牀下、吾甚願將此銀交出、以捐助此会、為創辦費之一分、此事如能有成、則吾与理野雖死之日、猶生之年、幸甚幸甚。（第四十四章）

原作の巻末部では、サーデーノールの自決後、その愛人ヂリエーは八万法の所有者となり、幸福な生活を送ることとなつてゐる。これを改作して二人とも自決するといふ様にしてしまつたのは、涙香の東洋的な処世観からであらう。¹⁴⁾従つて、例示する遺書の条りや死刑廃止協会の事などは勿論原作にはない。

『奪嫡奇冤』が涙香訳の重訳たることを明示すると同時に、死刑廃止といふ極めて近代的な刑法観が、いち早く中国に紹介されてゐる点から言つても、興味深い資料なのである。

それはともかく、『奪嫡奇冤』は、かなり好評であつたらしい。侗生の『小説叢話』にも、『福爾摩斯偵探案』や『降妖記』と並べて賞揚してゐることは、既述の如くである。

翌光緒三十年（1904）には、

（華訳名）	（原作者）	（華訳者）	（発行所）	（刊年）
三縷髮	涙香女史	陳冷血	時中書局	光緒三十年 (1904)

（未見。陳冷血訳『偵探譚』第三冊）

がある。未見のものではあるが、涙香の『探偵三筋の髮』であることは、『偵探譚』中に尚数篇日本の小説が収められてゐることから推しても、想像に難くない。これ亦涙香の創作で、当初『無慘』と題して出版（明治二十三年二月、上田屋書店刊）されたが、明治二十六年（1898）十月、上記の如く改題して再版された。この時分、訳者と涙香ファンであつた羅普とは未だ交渉がなかつたの

14) 伊藤秀雄氏、前掲書、二十三頁参照。

であらうか、涙香を女流と誤認してゐることには苦笑させられるが、これを選んだ爛眼は讚へられてよい。蓋し、この小説は、筋の面白さといふよりも、事件の推理解剖を中心とした純粋な探偵小説で、しかも創作されたのが、ドイルがホームズ物に手を染めるより三年も早い作品だからである。¹⁵⁾

訳者陳冷血とは、後に『時報』・『申報』の主筆・総編輯などの要職を歴任した「報館佬」陳景韓（1878—1965）のこと。江蘇省松江県の男で、早歳湖北武備学堂に学び、やがて日本に留学した。『時報』時代——時に総経理は狄楚青、総主筆は羅普であつた——同僚であつた包天笑は、当時のことを追想して、

陳景韓（筆名冷血）也在時報上写小説的。他写的小説，簡潔雋冷，令人意遠，雖然也有許多訳自日文的，但訳筆非常明暢，為讀者所歡迎。那時候，正是上海漸漸盛行小説的当兒，讀者頗能知所選擇，小説与報紙的銷路大有關係，往往一種情節曲折，文筆優美的小説，可以抓住了報紙的讀者。楚青的意思，要我与冷血的小説，輪流登載（那時的報紙，每日只登一種小説），以饜讀者之望。

と記してゐるが、¹⁶⁾ 景寒・華生・冷血・冷・不冷・新中国之廢物などの筆名を使つて書かれた小説は、当代に人気のある読物だつた。しかも彼は、単なる一介の流行作家ではなかつた。包天笑は、又、「景韓的文章，簡潔老辣，即写時評，小説亦然」とも記してゐるが、その政治評論・社説は、寸鉄にしてよく人の肺腑を抉るものであつた。それが、如何に青年達を魅了したかは、戈公振の『中国報学史』に引く胡適の「十七年的回顧」（同書 144頁～147頁）に詳しいが、ここでは、寧遠の要を得た回憶文の一節を引いて置く。¹⁷⁾

他写的社論見解精闢，筆録犀利，在當時（大約在一九〇五年至一九二〇年之間）上海報界中，公推第一，拋說有不少定閱申報的人，就是專門為了要讀冷血先生写的社論。

15) 柳田泉「隨筆探偵小説史稿・四，涙香の創作小説『無慘』について」（『統隨筆明治文学』所収）

16) 包天笑「新聞記者開場」（『鈞影樓回憶錄』）。尚，包氏の『回憶錄』中には，隨所に陳景韓のことが見える。

17) 寧遠「回憶陳冷血先生」（『小説新話』）

光緒三十一年（1905）に入ると、探偵小説流行の波に乗つて、涙香物の紹介も急激にその数を増す。以下、任意にこれを拾ふと、まづ第一に

(華 訳 名)	(原作者)	(華 訳 者)	(発行所)	(刊 年)
✓ 憤情記 二冊	(佚 名)	商務・編訳所	商 務	光緒三十一年四月 (1905)

（黒岩涙香訳『妾の罪』の重訳。原作未詳）

がある。初め単行本として上梓され、後に商務版『説部叢書』第二集第八編（初集本第十八編）に収められた。角書して「言情小説」とするのは、涙香訳が一人称で語る一女性の憤悔といふ形を採つてゐるからであらう。純粋の探偵小説ではないが、一種の裁判小説で、犯罪が絡つてゐる小説だから、此処に加へて置いてよい。涙香訳は、当初六十二回に亙つて『都新聞』に連載され、明治二十三年（1890）九月大川屋から単行上梓された。原作は、アメリカ物といふだけで、詳らかではない。蓋し、涙香の翻案は、普通に考へられる以上に自由な翻案なので、例へば『法庭の美人』（Hugh Conway: “The Dark Days.”）の前文に記すが如く、「一たび読みて胸中に記憶する処に従ひ自由に筆を執り、自由に文字を駢べ……（中略）……稿を起してより之を終るまで一たびも原書を窺は（ず）、…原書を書斎に遺し置きて筆を新聞社の編輯局にして執」るといふ極端なものすらあつた。現に、『妾の罪』にしても、後半部は、『法庭の美人』の改作めいた個所がある位であるから、原作の追求は容易ではない。

閑話休題。華訳文は比較的忠実な訳文で、誤訳も少ないのは、同書館内に、長尾雨山の様な錚錚たる人材が顧問として在つたからであらうか。例文として、旅商人に身をやつした古山とハナとが、スペインに入国すべく乗つた列車の中で、村上の幻影に怯えて下車し、宿をとつた条りを示して置く。

那時我正在呆想。陡然当著我的旁边，聽見悽悽切切的声音，好似哭泣又似怨恨。我回過頭去一看。原来，不是別的，乃是和我睡在一牀。福雷曼夢囈的声音。福雷曼難道也做什麼夢麼。難道夢裏也看見了什麼嗎。看官。當著夜深人靜，世界上万籟蕭森，草木都眠著，一些声息也没有的時候，忽然聽見夢魔囈語之声。該是害怕不害怕，況且我的枕旁，還有泥水穆郎亡故的面貌，滿眼含著怨恨，在那裏瞪我呢。啊，我知道了，穆郎的亡魂，見我今天晚間和福雷曼，同牀共睡，起了悔恨之心。因此現出來警戒我麼，無奈這

家客寓，房屋甚少，以外再也没有可以另住的地方，這便如何是好呢。穆郎啊，如果你有靈，總該知道這個。可憐我是万不得已。我禱罷，要想起坐牀來。誰知再也不能動彈。只得暫時閉眼，凝一会神。忽然心裏一清，暗想那壁上影子。莫是擺在牀前玻璃蘭泊燈土蔥花罩子燈外面五色罩子形如蔥花一般的影子麼。那罩子上頭四面一圈一圈的突起，猶如水波紋，每一個水波紋下面，刻画著很濃厚的花紋，映在壁上，宛然似一個有頭的人，立在那裏一樣。啊喲，原來穆郎的面貌，就是這個東西，我真是又昏又鈍。我把蘭泊燈移開些到別處去。影子自然沒有了。想得端正，就在牀上伸手去拿，剛剛把燈柱握定。啊喲，看官呵，那碗燈從旁晚時点起，直到此時，時候過久，燈檯已燒灼得猶如湯火一般熱。我陡被他一燙，叫一声哎唷，手指一鬆，那燈望空拋下。睡在外邊的福雷曼，睡得已如死人。蘭泊燈正跌磕在他身上，燈碗裏剩下的煤油，從他頭上澆滿了一身，火一見了煤油，立刻燃個正著，轟轟烈烈燒了起來。福雷曼驚醒突起，雖則飛也似跳下牀去，無奈身上到處煤油，万万不能消滅，越是亂抖亂撲。那火燒得越熾，福雷曼的身体，猶如火樹火棍一般，滿屋子裏火光，幾乎旁邊四下裏，都著了火。只聽見火人裏面，透出了說話声音，道快些幫救我呀，無奈我要想救，也不能救，惟有手脚忙亂，咳嗽唏噓，喊也喊不出來。（第十回 旅邸迴燈假夫斃命 捕房託足看役談奇）

この訳でも亦白話が用ゐられてゐるのが，注目される。又，当時の新聞や雑誌に掲げられた本書の広告の中に，「此書可反觀吾国聽訟法之不善，而亟宜大加改良。故名曰裁判小説」とあるのも，当代に於ける中国人の受取り方を示すものとして，興味深い。全体としては，良質の部に属するもので，顧燮光が，「訳者仿章回体出之，写情頗覺栩栩」（『小説経眼録』）と評してゐるのも肯ける。とまれ，かうした小説の紹介が，従来「比事物」に終始した中国の案件小説にどの様な影響を与へたかは，今後に残された課題の一つであるに違ひない。

『饑情記』に一足遅れて，上記の

（華訳名）	（原作者）	（華訳者）	（発行所）	（刊年）
指環党	〔佚名〕	商務・編訳所	商務	光緒三十一年十月 (1905)

が上梓されてゐる。これ亦，単行上梓された後，商務版『説部叢書』第三集第四編（初集第二十四編）に収められたものか。もつとも，同叢書は光緒三十二

年春から刊行を開始し，それと同時に三十点ほどのものが発売されたらしい。とすると，当初から『説部叢書』に組込まれたもので，それが初出本であるかも知れない。その辺，上記『饑情記』とは幾分性格を異にするか。¹⁸⁾ 本書にも，原著者の名も，原訳者の名も明示されてゐないが，黒岩涙香訳『指環』（明治二十二〔1889〕年十一月^{14/12}，金桜堂・今古堂刊）であることは，明らかである。原作は，デュ・ボアゴベイの『猫眼石の指環』で，涙香訳はウィリアムズ（H. L. Williams）の手になる英訳“Cat's-eye Ring.” 1888 に拠るものと一応見て置かう。英訳の出た翌年に涙香訳が上梓されてゐることは注目してよい。この華訳でも，牧野采蘭を謝小野，黒瀬柳心を柳子貞，手花贅庵を花贅菴と改めてゐるが，蓋し，既述『離魂病』のそれに仿ふものであらうか。以下，少しく訳文の一節を覗いてみよう。^{モルグ}漏具街の死体縦覧所の一説である。

不一時，已至存仁巷屍骸縦覧所，見人擁擠異常。蓋屏西村事既登新聞，巴里街談巷議，無不詫為奇案，因此來觀者每日不下數千人。少野側身入内，見内陳屍骸甚夥，見溺死者服毒死者自縊者皆陳其中，各標木標誌其死之年日。再進，見左旁新陳死骸一具，即前屏西村縊殺之少年也。少野目不他顧，直至死骸前仔細觀察。見少年蹙額切齒，麻絙猶隱隱纏項上，熟睇之似曾與相識。又見其雙目懨懨視己，似欲自訴其冤而求為報仇者。少野正傷感間，忽覺電光一閃，有一物直觸少野之目，則一光耀射人之貓眼石小指環也。此指環製法大小，恰如伯爵夫人所嵌者無絲毫之異。少野大驚，自計曰，此少年何故與夫人嵌同様之指環，且貓睛正復成對，又轉念此少年豈與夫人故有瓜葛乎。或偶然相同乎，是真不可思議之事，左思右想，不能解此問題。更に，次の訳例を見よ。

因緩歩行數里，至銀行，甫欲入門，見一四十許肥胖紳士，自銀行事務所出，正是伯爵夫人所夜會時所見花贅庵。少野佯作未見。贅庵既出，忽又一少年

18) 拙稿「商務版『説部叢書』について」（『野草』27）参照。



自内出，乃子貞也。子貞垂頭喪氣，蹣跚而前，若有所思。少野迎面呼曰，子貞君，癡癡何所思，子貞陡一驚拳首曰少野君＝僕＝君＝少野笑曰，君真迷醉乎勿憂＝事當諸子貞知其意，謂與伯爵夫人結婚事，急答曰否。＝否。＝勿戲言僕＝僕＝言至此又止。少間又曰君。＝君。＝言至此又止。少野益疑，曰。君何故抑鬱不樂。子貞曰僕。＝僕＝不幸。少野急問何事不幸。子貞曰免職。＝免職＝少野聞免職二字，不禁笑曰，免職固何傷，大丈夫磊落，何處不可容身，使無此銀行。君能不啖麵包乎。子貞曰否。＝否＝不但免職而已，若但免職自無傷耳，僕今受无妄辱矣。……

黒瀬柳心が手花贅庵の出入する銀行の頭取森村茂蔵から、鍵を預けたら三万円が紛失したと、難題をふきかけられて免職となつた一段である。ここで、切迫つまつた会話のやりとりを示すのに、行を改める事などせず、＝乃至は＝といった符号を用ゐてゐるのが面白い。勿論この様な方法は成功せず、爾後も殆んどその例を見ない。尚、この訳文には、伯爵・倶楽部・公園・銀行・夜会など、日本製の訳語が、しきりに用ゐられてゐる。「盲人瞎馬之新名詞」と騒がれた日本語（和製漢語・和製訳語）の流入を反映するものである。

同じ光緒三十一年に訳出された

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
✓ 決闘会	(佚名)	小造	『新新小説』	光緒三十一年 (1905)

(未完。黒岩涙香訳『決闘の果』の重訳)

✓ 秘密囊	(佚名)	小造訳	同上	同上
-------	------	-----	----	----

(未完。黒岩涙香訳『武士道』一名『秘密袋』の重訳)

については、未だ涙香訳との比照を試みてゐない。『決闘の果』の華訳には、他に同文滬報館訳『決闘縁』四十回（刊年未詳）がある。これは回数も涙香訳と一致するので、先づ忠実な訳と目されるが、未だ披見する機会がない。因みに、『同文滬報』は、東亜同文会が『字林滬報』を買収して継続刊行した日系の漢字日刊紙である。

涙香訳『玉手箱』が華訳されたのも、この年である。

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
✓ 巴黎繁華記	(佚名)	商務・編訳所	商務	光緒三十一年十月 (1905)

『玉手箱』を移して『巴黎繁華記』と題するのは、涙香訳の凡例に、「原書ハ小説に兼て巴里繁昌記とも云ふべく、貴賤男女金の為に忙はしき其有様を穿ちたる者」とあるに拠る。その原作について、柳田泉先生は、「原本ボアゴベイ『閉ぢられし扉』といふ」とのみ記して、英訳名を示されなかつたが、何時の間にか“*The Closed Door.*”とされ、これが通説となつてしまつた。これは何に拠つたのか。按ずるに、“*Porte close.*” (2 tom., Paris. 1885) であるならば、涙香が拠つたのは H. L. Williams 訳“*The Condemned Door.*” (G. Routledge & Sons, London. 1887) ではなからうか。英訳を披見し得ぬ儘に確認を怠つてゐるが、『指環』や『此曲物』（後改題『塔上の犯罪』）など同じ人の訳に拠つてゐること明白であるから、さう思へてならない。英訳には、共に‘*Authorised copyright translation.*’といふ注記がある。

この小説は、もとより純粹な探偵小説ではない。一種の風俗小説と言ふべき作品であることは、涙香の凡例にも記すところ、華訳も亦「社会小説」と角書してこれを扱つてゐる。しかし、玉手箱の秘密をめぐつて、謎の多い松村男爵夫人の行動は、読者に探偵小説的興味を懐かせずには措かないし、夫人の弱味に付け込む明日原男爵の強請、夫人と明日原との間に生れた盲目の娘の殺害といった犯罪も語られるのであるから、ここに加へて置いてよい。例文として、夫人が娘の屍体を直視する一節を抽いて置く。

第三十九回 見屍身夫人驚絶命 挾槍銃総理大尋仇

話說麥夫人瞧見箱子裏物件，驚得目瞪口呆，言動不得。你道是什麼。原来是這幾時費尽心血尋了又尋，再也求之不得。麥夫人親生瞎眼愛女的屍骸。這屍骸不是早晚死的，乃在七箇禮拜以前死了，裝入箱子，寄存銀行庫箱之中。只因時在寒冬，氣候嚴冷，所以還沒腐爛淨盡。但兩片嘴唇，已經不見，露出一寸來長的牙齒，頭見死的時候，心裏不甘，緊咬着牙關，切齒痛恨。那雙瞎眼，早已爛得空空，只見兩箇黑洞洞窟籠，還像怨恨無情的父母，瞪眼看着麥夫人一般。頭髮已經沒有，處處有禿落之痕，兩頰陷落，兩顴突出。凡人對着這副形容，任是鉄石心腸，也要悲傷憐惜。何況麥夫人是親生之女，多年想望着不得一見，到了今日纔得遇見，只落得這樣情形，何消說得。當時幾乎人事不知，只落得肚子裏陣陣悲酸，夾着驚怕，那淚滴溜淅瀝

猶如泉湧。好半天，五臟經裏，比刀割針刺還要難堪，叫声哎喲，回身逃出廊下，直到樓梯那邊，身上沒了力，陡然跌倒在地，暈絕過去。可憐麥夫人莫是追趕他苦命瞎眼女兒同上黃泉麼。這且攔下慢表。

この華訳でも、松村男爵は麦慕倫、その妻は麦夫人、悪漢明日原は夏士華、遠森は都慕黎字して雪南、丸島は馬希孟字は坎図といふ様に翻案してゐるが、訳そのものは涙香訳に忠実で、よく訳してゐる。

因みに、デュ・ボアゴベイのこの小説には、『忍び夫』と題する水田南陽の別訳があつて、明治二十五年十二月扶桑堂から上梓されてゐることを、附言して置く。

この年には、又

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
法國著名偵探談 雙金球・二冊	(法・佚名)	祥文社	清国留學生會館	光緒卅一年四月 (1905)

(黒岩涙香訳『大金塊』の重訳)

がある。これ亦未見の訳であるが、寅半生(鐘駿文)の『小説間評』巻二に、「法蘭西小説。日本黒岩涙香原訳」と注して、次の一文を掲げてゐるから、『大金塊』(明治二十六〔1893〕年二月、扶桑堂刊)の重訳であることは間違ひない。

是書凡四十回。叙英國貴族竹田男爵家藏金兩球，重九百四十斤。年老無子，作一遺言書，託青山老人作公証人。竹田有女甥二，一柳娘，法人，一桜娘，英人。竹田喜桜娘而不喜柳娘，視如奴婢。又有一忠實黑奴，名片助，甚勤謹。一日疾篤，遺言以金球一与桜娘，未及簽名而卒。於是青山老人開發遺言書，由荒川医士作証，書中備述幼年曾与法國貧女清水娘結婚，生一子清水岩夫，一切家産及金球，均与岩夫承受，並留十萬元作尋訪之費，有照片作証。柳娘一見甚喜，謂此即伊未婚夫，衆皆驚異。突來一少年自称清水岩夫，与照片相合，除片助外無人能識，而片助已於前夜被人刺死，兩金球亦失去。衆論譁然，乃囑岩夫回国取証拋，一面報警察請偵探探案。偵探乃疑公証人因謀産起見，特雇人將片助刺死，另覓假岩夫承受家産。荒川医士信之，私偵公証人，果覺形迹可疑。適岩夫為人刺死，另來一人，自称真岩夫，攜有証拋，遂羣疑公証人所為，共入警署。後查得前岩夫係假冒，皆柳娘所為。柳娘者，亦非真柳娘，案破逸去。公証人遂得白其冤，真岩夫乃与

桜娘結婚。金球亦並未竊去，片助恐為人盜，藏入男爵棺内，失而復得。岩夫遵男爵遺言，仍分一金球与桜娘云。既曰公証人，必為男爵素所信服者，何人不可疑，乃竟疑及公証人？殊出情理之外。觀柳娘一切舉動，不及桜娘万万，想竹田早洞悉其奸，故視如奴婢云。

涙香の抛つた原作については、従来フランス物とのみ伝はつて未詳とされてゐたが、卷末に、

余が曾て死美人を訳し初めしとき偶然にも府下に似寄りたる死美人の現はれし事ありしが此大金塊を訳し初むれば又偶然にも之と似寄りたる山田伯邸の五千金紛失事件あり、去れど余の趣向ハ、ジョージ、マンヒル、フェン氏の『暗き家』(ゼ・ダーク、ハウス)とハルリス氏の『身を殺す願ひ』(ゼ・フェータル、リクエスト)を訳したる者なれば勿論掛構ひなし云々」とあることが、伊藤秀雄氏によつて指摘され、George Manville Fennの“The Dark House.”と、Harrisの“The Fatal Request.”二書を訳出折衷した変則的な翻案であることが、今日では明らかとなつてゐる。¹⁹⁾ Fenn(1831—1909)は、イギリスの少年文学作家として、若干知られた人である。

以上の他この年には、涙香物の重訳として、次の二書が出てゐる。

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)
銀行之賊	美・佚名	謝慎冰訳	小説林社刊

(黒岩涙香訳『魔術の賊』、後改題して『銀行の賊』の重訳。原作は、米國探偵叢話中の一編『ドナルド・ダイキ』といふ。)

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)
黒行星	西蒙紐加武	東海覺我訳	小説林社刊

(黒岩涙香訳『暗黒星』の重訳。原書は、Simon Newcomb: “The End of the World.”)

共に、未見の為、多くを語るを得ないが、後者については寅半生の『小説間評』に、

全書叙一黒行星，与太陽衝突，將太陽外殼衝破，其元質使流散地球，焚燒殆尽。此外別無事實，科学家或有意味可尋，非小説家所能索解也。

19) 伊藤秀雄：前掲書，百七十三頁—百七十九頁。

とある様に、探偵小説ではなく科学小説に類すべきものである。もつとも、SF探偵小説が、将来の中国文学に発生した暁には、梁啓超訳『世界末日記』(徳富蘆花訳『世界の末日』の重訳。原作は、Camille Flammarion のものだが、原題名未詳)などと共に、そのはしりとして、脚光を浴びることがあるかも知れないが。因みに、ニューカム(1835—1909)は、ホプキンス大学(Johns Hopkins Univ.)の数学並びに天文学の教授であつた人。涙香が『暗黒星』を『都新聞』に訳載したのは、明治三十七(1904)年五月六日から同二十六日までのことで、偶々同教授の娘マッギー女史が来日したのを歓迎する為であつたといふ。東海覚我(徐念慈)は、『小説林』の主持者、日本語にも通じ、押川春浪の冒険小説など幾つかの作品を訳した人として、我々の耳には親しい。

ところで、光緒三十年(1904)から三十三年(1907)にかけては、商務印書館と小説林社とが、華々しい商戦を展開した時期であつた。樽本照雄氏の調査によると、光緒三十年小説林社から出版された翻訳小説は九点、商務印書館の出版は六点到過ぎないが、光緒三十一年になると形勢は逆転し、小説林社十九点、商務印書館二十一点と、その数に於ても飛躍的に増大する。²⁰⁾かくて、光緒三十二年に入るや、商務印書館は一挙に覇を制すべく『説部叢書』の刊行を開始するが、その巻き返しに小説林社が選んだのが、コナン・ドイル、アーサー・モリスン、ニック・カーターの紹介であつた訣である。

閑話休題。光緒三十二年(1906)に入つて、最初に訳出された涙香物は、上記の『説部叢書』第四集第一編に収める

(華訳名)	(原作者・原訳者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
寒桃記	日・黒岩涙香(著)	呉禱訳	商務	光緒卅二年二月 (1906)
(黒岩涙香訳『有罪無罪』の重訳)				

である。原作は、ガボリオアの『首の綱』(É. Gaboriau: "La Corde au Cou." 1873.)で、涙香訳は明治二十一年(1888)九月九日の『絵入自由新聞』第一千六百五十九号の附録として、第四回の途中までが訳載され、ついで同日の本紙から同年十一月二十八日までに連載された後、翌二十二年十一月、魁真楼書店

20) 樽本照雄氏「目録つて何だ」(『大阪経大論集』第124号。)

から刊行された。勿論、涙香が扱つたのは英訳であるが、"In Peril of his Life." (London, Vizetelly & Co. 1882 [2d ed]); "In Deadly Peril." tr. by Sir. G. Campbell, (London, Ward, Lock & Co. 1888); "Within an Inch of his Life." (London, G. Routledge & Sons, 1888)の何れであるかは詳らかでない。もつとも、涙香が扱つたのは、"Sea-side Library"などに収められた廉価版が多かつたと伝へられるし、後者では時間的にも少し窮屈なので、私案としては"In Peril of his Life." (Gaboriau's sensational novels I)に見当をつけてみるけれども。

さて涙香訳『有罪無罪』を移して、華訳に『寒桃記』と題するのは、涙香訳の巻末に、

探偵棟日は辞職して林町の別荘に引移り菓物の手入に余念なし。巴里の料理屋にて珍客に供ふる第一等の寒桃ハ此別荘より出る者なり。看客若し巴里に到らば忘れずに其桃を味ひ給へと爾云ぬ。

とあるに拠る。訳者呉禱は、商務印書館の編訳所にあつた人であるらしいが、詳しい伝を知らぬ。日本語はかなり出来た様で、良心的な訳を数多く残してゐる。

第一回 克伯爵火裏遭槍 沈巡官村中勘案

話説西歴一千八百七十年，恰当咱們中国同治八年，正是法蘭西国被德意志国兵打败，節節攻取，直欲打入法京巴黎都城之時。這第二年，当中国同治九年。七月二十二那天晚間十二下鐘，時候恰好夜半，巷折正打三更，巴黎近处有個市鎮，合鎮人民，都已夢入黒甜，享那睡鄉風味。那時參橫斗轉，万籟無声，月淡如煙，夜涼如水。忽有一条街上，風馳電掣一般，駛過來一頭快馬。馬上騎著一個好似農夫模樣的人，儘著放開繮繩，向前飛跑。沿街舖戶家人，有幾個被他驚醒，只聽得馬蹄四足，和成兩声，撇撇拍拍，跌打著馬路碎石子響。寂靜中帶著凄切声音，覺得狠為詫異。隨有那好事的披衣起来，推開二三層楼上窗戶，探頭出望，誰知那馬早已駛去小半里遠近。雖則明月当天，那能見他身影，却側著耳朵，還隱隱聽的馬蹄得得的声音。啊呀，料想必是近处那戶人家，出了什麼事故。前往巡察官和中國巡署，呈報案情，看官，你們道這話猜得錯不錯呢。啊。果然，那馬駛到巡檢署前，陡然收繮停了步。農夫颯的跳下馬來，急急掣那大門土門鈴，一面極声喊道，巡

長沈老爺，快些有事求見。沈老爺……沈老爺。

華訳は、もとより周密体の訳ではない。涙香訳によりながらも、むしろ飾つたところがある。それは、中国古来の文章観のなせる業で、誤訳といふには当らぬ。人物名も、梅姿（ハホイス）・関登（セグノポス）などは、涙香訳そのままのものが用ゐられてゐるが、仙田長永（センデス・チャール）は沈岱士，黒戸伯（クロデュス）は克洛凶，富地（トームジョン）は杜美薰，軽箆（ガルピン）は葛爾貞といふ様に，中国風に改めてゐるのは、『離魂病』・『懺情記』などの場合と同様である。

原作は、もともと探偵小説といふより裁判小説と言ふべきもので、涙香訳の場合でも裁判の重要さを社会に警告する意図のあつた事は、中江兆民の序文や涙香の凡例に徴して明らかであるが、同様なことは、華訳の場合にも言ひ得るところであつた。華訳中に、割書してそれらを注する所以である。

上記デュ・ボアゴベイの『鉄仮面』が重訳されたのも、この年である。これは、素材そのものが怪奇的で、探偵小説以上に面白い。鉄の仮面を被せられて、バスチユ他一二の牢獄に三十年も幽閉され、生涯を終つた悲劇の人物は誰か。ルイ十四世と美人の噂の高かつたルイズ・ド・ラ・ヴェリエールとの間に生れたヴァルマンド大公なのか、ルイ十四世と双生の兄弟なのか、生母アンヌ・ドートリッシュと妖僧マザランとの間の私生児なのか、君権神授説を唱へたルイ十四世は僭王で、実はアンヌの産んだ件の私生児であり、鉄仮面の主こそ、本当のルイ十四世たるべき人であつたのか等々、諸説紛々として、詳らかでなく、それ故にこそ詩・劇・小説に素材を提供してゐるのである。²¹⁾ だから、当然此処で取扱つても差支へないのであるが、やはり本質的には伝奇小説の部類に入れるべき性格のものであらうし、華訳も亦「歴史小説」と角書きしてゐるから、今は採り上げない。一には、君朔（伍光建）訳『俠隠記』（Alexandre Dumas père: “*Les Trois Mousquetaires*”）・『続俠隠記』（Ibid: “*Vingt ans après*”）・『法宮秘史』（Ibid: “*Le Vicomte de Bragelonne*.”）や、上記

21) 江戸川乱歩：前掲書，pp. 313-316；マルセル・パニヨル著，佐藤房吉訳『鉄仮面の秘密』（Marcel Pagnol: “*Le Secret du Masque de Fer*.” 1969）

『大俠紅鬃落伝』などを含めて併せ論じ、清末民初の武俠小説・歴史小説との関聯を考察したく考へてゐるからである。

因みに、この年には、涙香物と認められる次の二書が訳されてゐる。

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
✓ 妖塔奇譚 二冊	美・佚名氏	無欽羨齋訳	広智書局	光緒三十二年 (1906)
(黒岩涙香訳『 ^{奇中} 幽霊塔』か)				
✓ 莫愛雙麗伝	涙香小史訳	佚名訳	有正書局	同
(黒岩涙香訳『古王宮』か)				

共に未見であるから、大胆な推測を試みる以外にないが、前者は、恐らく『幽霊塔』であらう。原作はベンジスン夫人の『ファントム・タワー』（Mrs. Bandison: “*The Phantom Tower*.”）で、夫人をアメリカ人とするのは訳者の誤認であらう。イギリスの作家である。

『莫愛雙麗伝』も、阿英氏の『書目』によつて知る以外に、知るところはない。『古王宮』の重訳と判断するのは、小説中、故柳園伯爵の居間に掲げられてゐた古水保治の母の肖像の下に「愛せり失へり」とあり、遺産に目が眩んだ菱江が、心を許してゐた戈田武男との交情を捨てて、保治との結婚を承諾する辺りに、華訳名の由来があると想像するからである。若し、この推測が許されるとするならば、包天笑訳『古王宮』（『月月小説』第二卷第十・十二期，光緒三十四（1908）年十月・十二月）と、同一書の別訳といふことになる。原作は、バアサ・クレイの『我が身との戦ひ』（Bertha Clay: “*At War with Herself*.”）と言ふ。勿論、探偵小説ではなく、家庭小説として扱ふべきものであるから、此処では除外してよい。

本題からは逸れるが、涙香訳によるバアサ・クレイの作品は、翌光緒三十三年（1907）年にも出てゐる。商務版『説部叢書』第九集第五編（初集本第八十五編）及び『小本小説』に収める

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
✓ 駕盟離合記 二冊	日・黒岩涙香	湯爾和訳	商務	光緒三十三年十月 ²²⁾
(黒岩涙香訳『人の妻』の重訳。原作は，Bertha Clay: “ <i>A Women's</i> ”				

22) 刊記は上海図書館編『中国近代現代叢書目録』に「1907年10月版」とあるに拠る。

Error.”)

がそれで、阿英氏の『書目』には光緒三十三年刊とするが、管見に入つたものには、「戊申正月初版」とある。訳者湯爾和は、光緒二十九(1903)年、我国に派遣された最初の留日学生の一人で、民国二十七(1938)年、北支臨時政府が成立した折に、推されて教育総長となり、北京大学総監督・東亜文化協議会会長などを兼ねた人。中国医学界にも大きな足跡を遺した。この訳は、金沢の医学専門学校に学んでゐた当時の手すさびに成るものであらうが、人が人だから、一寸書き添へて置く。

同じく、光緒三十三年には、既述の

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
✓ 色媒図財記 ^{二十回} _{三冊}	日・涙香小史(著)	黄山子訳	改良小説社	光緒卅三年 (1907)

が出てゐる。これ亦未見の訳であるが、書名から推すと、或いは『似而非』、改題して『悪党紳士』(明治二十三年三月、明進堂刊)ではなからうか。とすれば、原作はデュ・ボアゴベイの『他言無用』(du Boisgobey: “*Bouche cousue.*” 1883.)、英訳名『封ぜられし唇』(“*Sealed Lips.*”)といふことになる。

翌光緒三十四年(1908)には、

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
✓ 天際落花	日・黒岩周六(著)	褚靈辰	商務	光緒卅四年五月 (1908)

(黒岩涙香訳『塔上の犯罪』の重訳)

が出た。これは、もと商務版『説部叢書』とは別の企画で上梓されたものらしいが、故あつて『佳人奇遇』が削られることとなつたので、その差換へに充てられ、初集本では「第一編」として収められ、後『小本小説』にも収められた。

又、涙香訳『塔上の犯罪』は、当初『此曲者』と題して『江戸新聞』(明治二十二年十一月三日～至二十三年一月二十八日)に訳載、同年四月二十五日薫志堂から上梓されたが、翌二十四(1891)年十月再版の際『塔上の犯罪』と改題され、この名が通用されてゐる。その原作について、柳田泉教授は「フォルチュネ・ボアゴベイ “*The Angel of the Chimes.*”」とされ、田中潤司編「海外探偵小説総目録」には “*The Angel of the Bells.*” の名を掲げて、「フラン

ス原本中にそれらしき題名の見当らぬもの」に数へてゐる。共に誤つてはゐないが、十分ではない。蓋し、前者がグリーンング社(Greening & Co., London)から出版されたのは1903年(明治三十六年)、後者が『オルディン近代小説傑作選』(Aldine Masterpieces of Modern Fiction.)中の一冊として出されたのは1897年(明治三十年)で、涙香訳よりも数年乃至十余年も遅いからである。デュ・ボアゴベイのこの原作は、実は『青いヴォワレット』(“*La Voilette Bleue.*” 1885.)といふので、涙香が扱つたのはマックスウェル社(J. & R. Maxwell, London.)から出された『パリジャン文庫』(“*Parisian Library*”)中の一冊 “*The Blue Veil.; or the Angel of the Belfry.*” 1886. であることは、まづ間違ひない。これにも、‘Author’s copyright authorised translation.’といふ注記がある。他の場合も併せ考へて、涙香は、当時日本では未だ十分に認識されてゐなかつた著作権問題に、いちやく関心を寄せた一人であつたと見たい。

さて、華訳は、涙香訳で五十回のを三十五回に縮訳したからやや筋を逐ふことに急で、涙香訳の話術の面白さは殆んど窺はれないが、誤訳・珍訳の類はほとんどなく、訳文自体も割にしつかりしてゐる。以下、訳例として、ノートルダム塔に遊んだ村田菜園が、折柄起つた女性の墜死事に捲込まれ、取調べられる条りを抄出する。

警察長起趨旁室曰、与君入此。及入則空亡所有、陰慘之氣、令人毛髮俱戴。中惟一長案、而粉梨雨碎之屍、偃陳其上、油巾覆焉。警察長揭巾引使近之。紳士出自意外、肺葉震擊、洵懼幾仆、俄即自振曰嘻、一不相識之燕、而謂余攜之者。警察長亦頗為回惑。使其所私、而又新置之死、就令彼狡亡情、亦胡能坦然故為斯語。豈婦者一婦人、死者又一婦人耶、而狂且之為暴行者、設匪彼則又伊誰。警察長告之曰、諸証人所言、誠不足以夷君之罪、亡已、余即命遷此屍、列之穆耳古之死骸縱覽館、不出三日、当有能道其里居姓氏者、莫患亡端倪也。惟君鉗口雖密、使君之名而亦不及聞。則余職之謂胡、尚願述之、且家胡許、業胡許乎。紳士堅執如故曰、余終一切不能答。警察長曰、不答則亡他法。惟有權認為罪人、交之予審之裁判官而已。紳士曰、裁判官且奈何。警察長遂亡復与言、命二警察亟舁死骸往縱覽館、

並語三証人，明日或即予審，伝噂君属。君属胥出而自以紳士去。

(華訳文 第四節，涙香訳文 第三—第四回)

涙香訳から重訳された小説は，以上の他にもある。前に『古王宮』を訳した包天笑などは涙香の大ファンであつた。彼には，『人耶鬼耶』の別訳『人耶非耶』(『小説大観』初載)があつて，『海上五十名家小説滙海』に収められてゐたと記憶するし，『巖窟王』を訳して『大宝窟王』？と題した訳本もあつた筈である。もつと有名なのは，『空谷蘭』。これは涙香訳『野の花』(Mrs. Thomas Hardy: "The Mother's Heart.")の重訳だから，勿論家庭小説の部類に属するが，脚色されて新劇(話劇)の舞台に上り，又「新京劇」と銘打つて「新舞台」(劇場)でも上演され，民国十五年には上海明星影片公司以映画に製作されて，大当たりをとつた。²³⁾ 実に，涙香は，明治大正の文壇人中最も深い影響を彼に与へた一人と言つて差支へないのである。

(i) その他の翻訳

勿論，日本訳から重訳された探偵小説は，蘆花や涙香物のみには限らない。光緒二十九(1903)年から翌年にかけて上梓せられた陳冷血訳『偵探譚』は，既述の様に涙香の『三筋の髪』(『無惨』と原題された作品の方である)を収めるが，他にも尚数篇の翻訳を収めてゐる。今，阿英氏の書目によつて「偵探譚」の内容を細叙すると，次の如くである。

偵探譚	冷血訳	四冊	
第一冊	鈕永建校	光緒二十九(1903)年	時中書局刊
	法・西余谷：游皮；	中村貞吉：大村善言	
第二冊		光緒二十九(1903)年	時中書局刊
	渡辺為蔵：関口太三郎；	法・彭脱：格児奇特；	上野和夫：
	松野貫一；	英・皮登：梅脱；	英・皮登：落勃脱
第三冊		光緒三十(1904)年	開明書店刊

23) 包天笑「我与電影」(『鈞影樓回憶録統編』所収)。范煙橋前掲「民国旧派小説史略」六「翻訳小説」の項。

涙香女史：三縷髮(涙香『無惨』)

第四冊

光緒三十(1904)年

開明書店刊

美人狩

(芙蓉生訳『美人狩』の重訳か。芙蓉生は硯友社同人といふ。『美人狩』は，春陽堂版『探偵文庫』に収める。)

美・吐司愛沙：自殺俱樂部

未見の資料なので，大胆な推測を試みることになるが，本書に収めるものは，凡て日本語から移したものであらう。

陳冷血には，翌光緒三十(1904)年にも，『虚無党』があり，渡辺為蔵の『綺羅沙夫人』や田口掬汀の『加須克夫人』(原題『魯国奇聞虚無党』，『文芸俱樂部』明治三十六年十二月号)などを収めてゐるが，今は再説しない。²⁴⁾ 同年中には，他に『繡像小説』第二十一・二十二期(光緒三十年二月)所載の『俄国包探案』や三十一期(光緒三十年七月)以降に掲げられた『売国奴』がある。

前者は，恐らく水田南陽の『露国怪物探偵魔王』(明治三十七年一月『中央新聞』)なるべく，後者はズーデルマンの『猫橋』(Sudermann: Katzensteg)で，登張竹風訳による重訳である。探偵小説的な興味もあるが，探偵小説として扱ふには問題があるから今は省いて簡に従ふ。ただ一つ，見逃し得ないのは，美・楽林司郎治(Lawrence Lynch)原著『毒美人』が『東方雑誌』第一卷七号(光緒三十年七月)以下に連載されてゐることである。これは，同年中に単行上梓された『黄金血』(後，商務版『説部叢書』第一集第十編として収む)と同一のものであるが，何故か単行本では原作者の名が削られてゐる。物語は，母方の遺産相続権を有つイギリス女性が，格倫維爾鎮で塾を經營する李芳来を手始めに，相続権を有つ縁者を次々に殺して行くといふ恐ろしいもの。リンチの作品目録を調べて見ても，それらしい作品は見当たらないから，原作未詳と答へる以外に方法はない。注目すべきは，華訳中に，「中学」・「生徒」・「汽車」・「自転車」・「鉛筆」・「円」(貨幣単位)など，日本語から流入したと見られる語彙が散見されることで，訳者が直接扱つたのは日訳であつたに相違なく，

24) 拙稿「晚清に於ける虚無党小説」参照。

多田省軒訳『毒美人』（明治二十九〔1896〕年三月，盛花堂刊）がそれではないかと想像するが，未だ比照を試みる機会を得ない。以下，冒頭の一節を掲げて，他日の研究に備へよう。

格倫維爾鎮，達於某湖浜。湖故衆水所匯，一面山巒起伏，草木蔥鬱，与地平同尽。四時風景，雅足動人。時五月某日，晨鐘纔八下。鎮中街衢寂靜，惟数童子奔走跳躍，逗遛道中，蓋將入学塾而偷間於此也。

学塾在鎮極南山坡上。塾初建於湖浜，湖多柳樹。格倫維爾以此塾為首創公宅，尋以他事遷此，居民亦漸多，自五十家增至千余，而旧塾勝地，遂為銷夏別墅，且市肆第宅，漸推広至北境，新塾独処鎮南，林木環繞，饒有佳景，其地当湖旁第二帶森林。東望峯巒蒼翠，遠連天際。

方新塾落成時，格倫維爾鎮少長咸集。婦女亦有至者，羣立院外，仰見塾高二層，皆黃漆，光可鑑人。衆正紛忙擬懸新鐘。有伊利亞勞平者，居此鎮最早。建此塾与有力者，曰，是宜名中学校。諒衆意無阻我者。約翰洛脱曰，是名甚当，必無阻礙。復一人曰，是名頗合愚意，度亦不私衆情，派森臘愛特独揺首微笑，曰，吾鎮僅一小材，恐不能居高等之名，如欲名之。惟就地勢高峻言或可。然吾必望其扩充，庶幾名実相称。此当日設塾命名之大略也。其後是塾僅盛於夏季，至今猶是一村塾。塾中正教一人，助教或蒙師一人。

この小説は，かなり好評であつたらしい。『小説経眼録』に，

美国楽林司郎治原著。是書記美人李勞来設塾於格倫維爾鎮，被傑姆森槍斃一案。経偵探福拉史偵破，其中情節變遷，頗有出人意表，亦足見西人偵探之術精矣。

とあるのが，注目される。

翌光緒三十一（1905）年十二月には，少しく風変りな小説が華訳されてゐる。

（華訳名）	（原作者）	（華訳者）	（発行所）	（刊年）
偵探小説 車中毒針	英・勃拉錫克	吳 櫛	商務	光緒三十一年十二月 (1905)

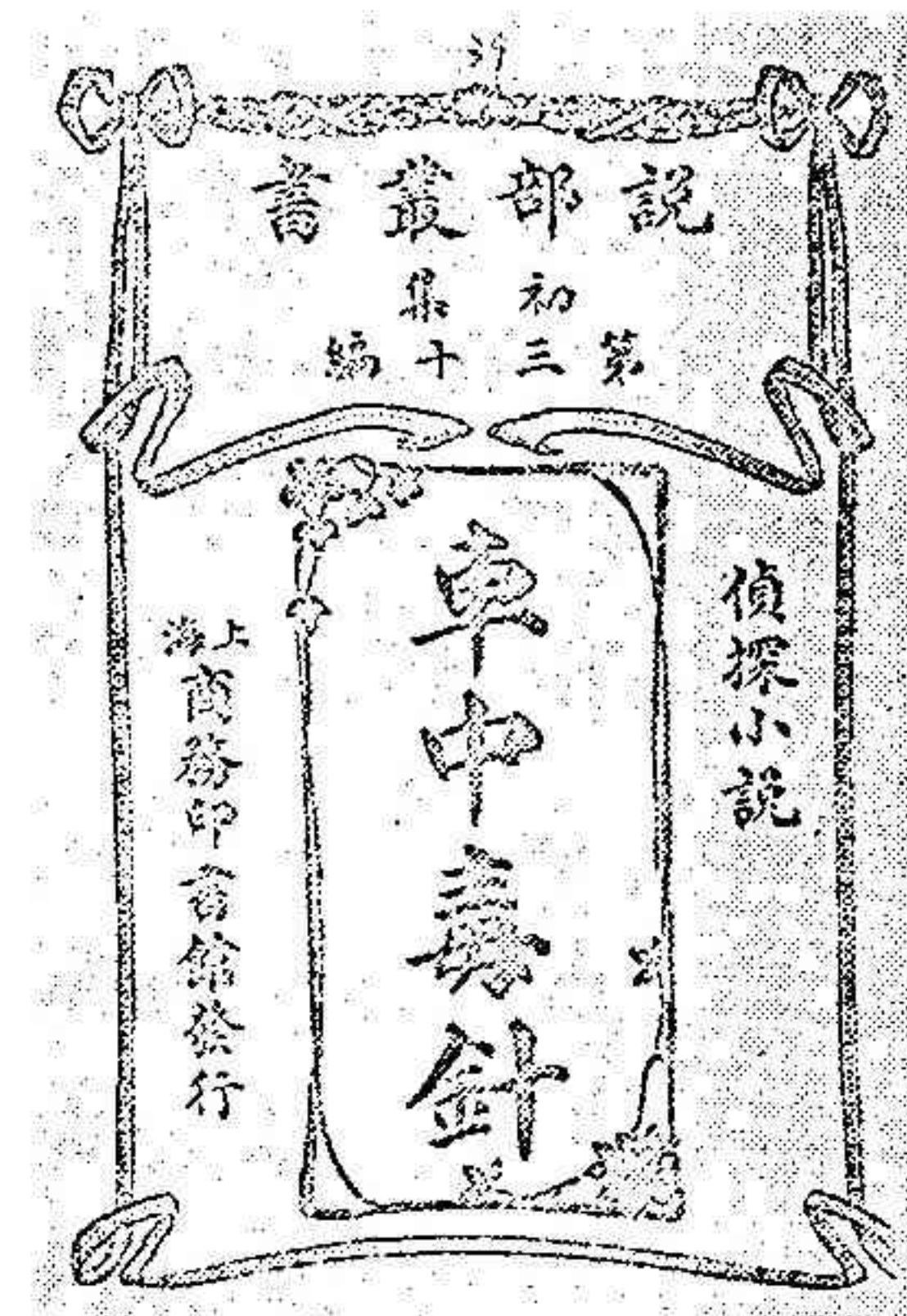
（石井ブラック述・今村次郎筆記『車中の毒針』の華訳）

がそれで，商務版『説部叢書』第三集第十編（初集本第三十編）に収める。ブラックの原作は，明治二十四（1891）年十月，三友社刊。石井ブラックは，本

名ヘンリー・ジェームズ・ブラック(Henry James Black. 1857-1923)といひ，帰化英人であるが，日本語を巧みに操り，快樂亭ブラックと号して高座にも上り，人情哢を得意とした。今日でこそ，この種のテレビ・タレントは珍らしくないが，当時は非常に珍しい存在であつた。その為人については，正岡容の「英人落語家ブラックの探偵小説」²⁵⁾が要を得てゐるから，一寸借用しよう。

明治年代，西洋人情哢を以て，よく大円朝，初代燕枝に拮抗したる存在に，英国人の落語家快樂亭ブラックがあつた。……(中略)……ブラックは，幕末，ジャーナリストたりしその父君に連れられて渡日，父と共に『日新真実誌』なる新聞事業に挺身したが，明治初年，自由民権の演説流行に刺戟され，先づ演説より講談席へ，次いで三遊派一方の重鎮たり得て，大正癸亥の大震前後，歿した。異邦人にして本朝寄席文化史上，大看板の足跡をば残したのは，奇術の李彩，音曲のジョン・ペールと共に，この快樂亭ブラックであらう。

少しく注釈を加へると，彼の父ジョン・レディ・ブラック(John Reddie Black. 1827-1880.)は，スコットランドに生れ，Blue-Coat Schoolの愛称で親しまれてゐるChrist's Hospitalに学んだ後，海軍に投じたが志を得ず，除隊して濠洲に赴き商業を営んだ。しかし，これも思はしからず，廃業して故国に帰る途中日本に立寄つたのが，その生涯を決定する契機となつた。彼は，始め横浜で『ジャパン・ヘラルド』(The Japan Herald.)を經營するA. W. ハンサード(A. W. Hansard)に乞はれてその主筆となり，ついで『デイリー・ジャパン・ヘラルド』(The Daily Japan Herald. 1863年10月23日創刊)・『ジャパン・ガゼット』("The Japan Gazett." 1867年10月12日創刊)を興し，又『日新真事誌』を創刊(1872年3月17日)した。『日新真事誌』は，我国初



25) 正岡容「英人落語家ブラックの探偵小説」(『宝石』昭和二十二年一月号)。赤羽絹子「J. R. ブラック」(昭和女子大学編『近代文学研究叢書』第一巻所収)。その他。

の邦字新聞とされるものである。彼は、明治文化界の在野の恩人で、確か初期音盤史上にも登場する筈である。

ヘンリー・ジェームズは、ジョン・レディの長男として、恐らく濠洲で生れ、横浜で育つたのであらう。長じて、浅草猿楽町の菓子商石井アカを娶り、石井ブラックと名乗り、快樂亭と号して高座に上つたが、その生活は放縦であつたといふ。幾許もなくして妻と離別したが、石井ブラックの名は通した。彼の話術は、円朝や燕枝に拮抗したといふのであるから、全く素人離れしたものであつたらしいが、落語界に於ける柳家一派の凋落と共に高座に上る機会を失ひ、地方巡業などする裡に兄妹にも不義理を重ね、神戸で窮死した頃は悲惨を極めたといふ。

彼にはブラッドン女史の『花と雑草』(Mary Elizabeth Braddon: "Flower and Weed.") を口述した『小説 草葉の露』(市東謙吉筆記。明治十九〔1886〕年十二月、金港堂刊) はじめ、原作未詳の『小説 幻燈』(一名『岩出銀行血染の手形』。今村次郎速記。明治二十五年十二月、三友社刊) などがあり、『車中の毒針』も亦その一である。『車中の毒針』については、水石隠士の序に、

西洋小説に貴ぶ所のものハ其趣向の雄渾奇警にして変幻測るべからざる在り。然りと雖ども之を訳し之を筆する苟も其人を得ざる時は情味索然として捕風拿影の憾ミ無き能ハズ。今這篇を読むに作意の奇雋なるは固より言はず、ブラック氏が之を演ずる流暢なる今村氏が之を記する熟練なる、迅雷一轟而邪影を潜む

とあるから、翻案物であることは明らかであるが、原作が何かは詳らかでない。以下、訳例として、巻末に近い一節を掲げてみる。

伊季兩人一直同走到支家左近。季恩拉立定道、伊達峨先生、你只在這裏等我，待我入去一查。若是三十分鐘後，我不出来，你趕緊到警察衙門通報此事，喚同幾箇巡捕，圍住支家。一箇一箇的捕拿，不許逃走。我身上有印記帶着，如今将来交給了你。三十分鐘我不出来，那必然受了他的傷害，你可要替我報仇。伊達峨道，季恩拉先生，怎說那樣怕人的話，偵探的職司，本來是危險的咧。季恩拉道 為了職司而死，那是分所当然。但我不能不依舊裝做耳聾。我和支梯垂在酒店中曾經見面，已是彼此認得，若說到特地登門

前來查訪的話，他知道我是包探。那能還肯讓我得生，我若不能勝他，也情願死在他手。因此上，這裏就和先生拜別。從此或來世相見，也未可知。伊達峨道，噯噯噯噯，這事危險，明明自投羅網了。季恩拉道，噯，兵士上了戰場，誰知道什麼時候生死。那些兵士們，為國宣勞，不惜身命，為君為民，博得箇忠義之名。我做偵探的，隨時隨地，也拿着性命去博，却是為的歹人惡棍。但只還是為的法律，為的愛國之心，也是責任上應有的義務。總之三十分鐘後，若不好好出來，直當我是已死，為我復仇。全仗你伊達峨先生。說罷，反身趕一步走到支家門前。

(原文第十二回／華訳 第十三回 巧偵)

原文は、もともと高座にかけたものを速記したのであるから、当て込みもあればチャリもある。さうした無駄を削つて訳出した華訳者の態度は、当然採らるべき方法として、認められてよい。しかし、さうしたことよりも筆者に興味があるのは、かうした口述筆記の翻訳から、白話文学の得たものが尠からずあつたらうといふことである。が、今はそれを考へる余裕はない。

ブラックの作品は、光緒三十二(1906)年にも訳されてゐる。前に一言した笑我生訳『血手痕』(『江西』所載)がそれで上記『幻燈』の重訳であらうことは、想像に難くない。

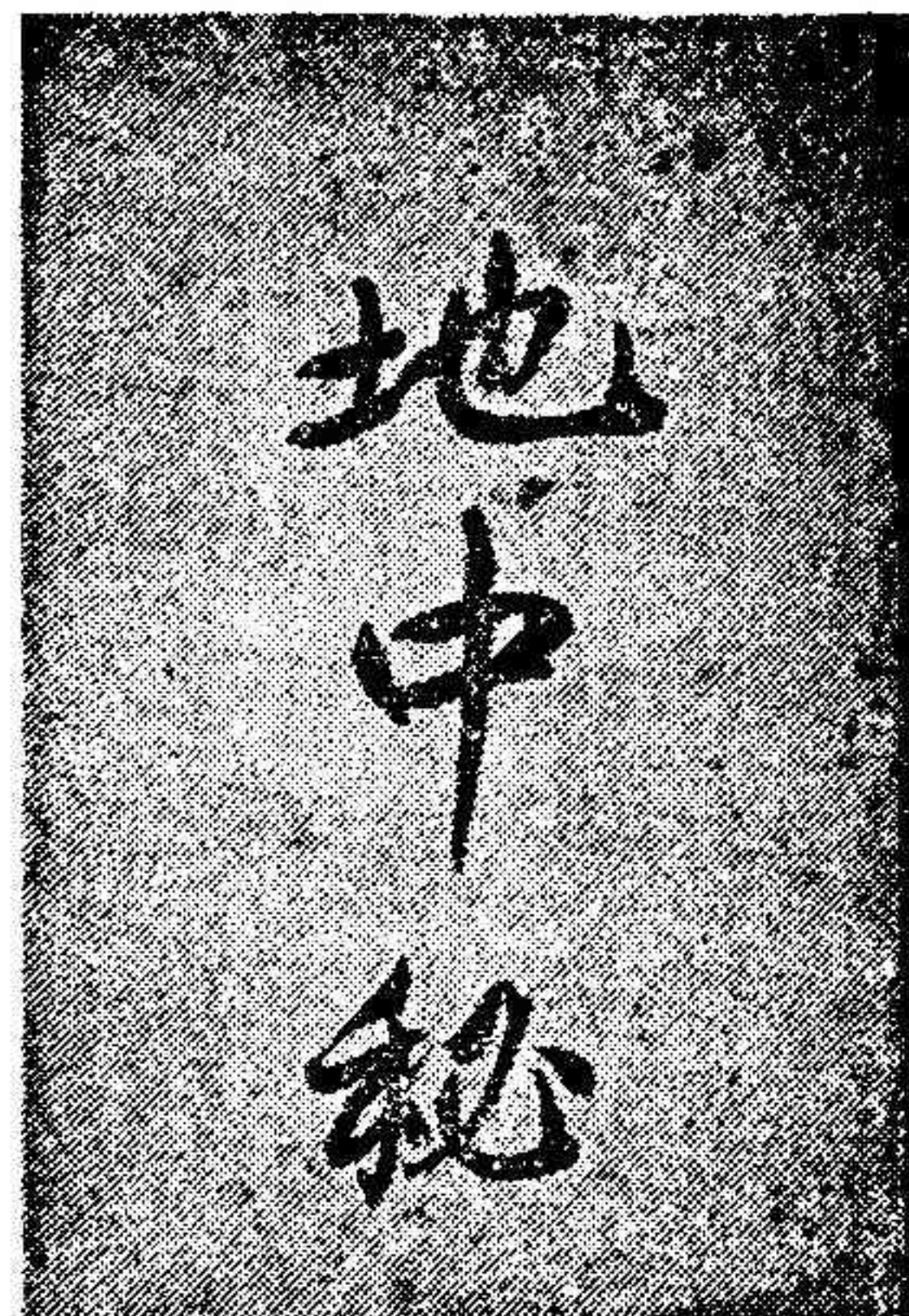
同じ光緒三十二年には、又

(華訳名)	(原作者)	(華訳者)	(発行所)	(刊年)
✓ 地中秘	日・江見忠功	鳳仙女史訳	広智	光緒三十二年七月

(江見水蔭作『地中の秘密』)

が出た。水蔭の小説は、明治三十五(1902)年四月、青木嵩山堂から出版された。「硯友社」同人の一人であつた彼等が、何故探偵小説に筆を染めるに至つたかについては、水蔭自らの文章があり、それを引用しての柳田泉先生の研究があるから、²⁶⁾ 更めて説くまでもない。何れにしても「春陽堂」の商策に乗せられ、又意識しつつこれに応じたのであつて、作品としてはこれと言つて見るべきものはない。華訳されたのも、ただその名に惹かれたか、取付き易かつた

26) 柳田泉「隨筆探偵小説史稿——二〇、探偵小説全盛と春陽堂の共同策」(『続隨筆明治文学』所収)。



といった程度のものであらう。訳者香葉閣主人鳳仙女史は、涙香の『片手美人』を重訳した人物で、勿論仮託の名であらう。訳例として、稲妻塚発掘の一節を、一寸引いて置く。

既至。人類学者西岡純次郎、先就塚外四周審諦、覺其略帶覆瓢状、而実為饅頭形、知為奈良朝以後之古塚。

奈良朝為日本元明天皇至光仁天皇時代、即我国唐睿宗至代宗時代。距今約一千二百年

至一千百三十年間。

又思此貝塚村名義、必為近古新成之洲渚。其形勢東南連於大陸、西北面海、知必無石器時代、所謂国栖土蜘蛛等種属遺蹟。

大和民族凡八種、除天孫出雲二種、為高天原正系統外、又有熊襲、隼人、熟蝦夷、国栖、土蜘蛛、及韓漢遺民諸族相混。而以国栖、土蜘蛛兩種族為最古。

然此塚以稲妻命名、其義甚奇。『稲妻』為陰陽兩電激盪之稱。(日本名義)於義何取。其或者為火雨塚相伝之誤也耶？

觀此塚形不甚崇偉。然既費若許心力。始得至此、好歹且一發視之。

於時對吾作曰、『僕欲假翁之力、即此地。請就此辺試掘之。』

吾作応諾。於是卸其鍬鋤、以兩手枢衣、綴於腰間帶。復提鍬、遂肆力焉。時西岡亦解其外服、去其坎肩、并除脱其着結(即西服以堅白之布為領袖之内衣)。惟余襯衣、持吾作荷來之鋤、偶力相助。

墳形雖古、然土質甚鬆。鍬鋤并下無幾時、而穴已深五六尺。

西岡思貝塚二字、若名実相副、此間当已見螺蛤遺蹟、今仍不見。然則或果為古塚耶？遂更注意掘之。

未幾復下二三尺、吾作之鍬、忽着一物訃然有声。

吾作曰、『好了！此非金釜声耶？想其中不知充物若何珍物矣。』

(第三章 発掘)

例文としては、やや特異な個所を選び過ぎた様だが、水蔭はこの頃相模と土

器蒐集に夢中だつたので、かうした小説があるのである。訳文中に屢々注釈的
文字を挿入してゐるのは、『佳人之奇遇』あたりの悪い意味での影響であらう
が、それにしても拙い。同人訳『美人手』の訳文と較べて見ると、これが同一
人の手になるのかと疑ひたくなる様な文章である。どうも、翻訳文といふもの
は、原文の良否によつて、かなり左右されるものだといふことを、更めて教へ
られる想ひがする。

× × × ×

結論を急がう。清末民初に日本語から翻訳された探偵小説は、勿論以上に尽
きるものではない。例へば、手許のノートには、当時の新聞(民国四[1915]年
十月頃の『順天時報』であらう)から抄出した次の様な広告文が残されてゐる。

△偵探小説 吳田雪冤記 洋一冊 洋一角五分

此為日本近日三大疑案、兩為吳田偵出、一為吳田之子偵出。三案之離奇、
為從所未有。吳田精銳之眼光、靈捷之手段、亦与著名之福爾摩斯不相上
下。愛読偵探小説者、当歡迎恐後也。sep 5/10?

△偵探小説 秘室

是書叙日本高輪子爵、以紳士而為盜魁。其秘密機關、不在空中、即在地
下、劫人掠財、來去無跡。其中秘密室、低於海面一二万尺、被物於室中
者、必無生理。其中如圧搾室、如無空氣室、如毒蛇之窩、如妖巫之窟、
慘酷怪誕、為意想所未到、其防守亦異常周密。卒經博士樫田茂、偵探長
後藤、先後身歷、其間相与定計、破其巢穴。後藤以此得名、而博士已身
為之殉矣。

前者が、三津木春影訳『探偵奇譚・吳田博士』(明治四十四(1911)年十二月、
中興館書店刊)の重訳で、華訳名に「雪冤記」とあることから推すと、殺人罪
に問はれて死刑の判決を受けんとする一少年が、慧眼なる博士の手によつて青
天白日の身になるといふ例の「恐ろしき夢中の犯罪」を含む三篇の抄訳であつ
たかと思られる。原作は、春影自ら「英国のオースチン・フリーマン氏の近著
『ソーンダイク博士の探偵事件』といふ書中の四五篇を翻案したもの」(序)
と言つてゐる様に、Austin Freeman (1862-1943) の『John Thorndyke's
Cases.』1909 に収める八篇の短篇から五篇を選んで翻案したものである。翻

案に際して、春影は色々な要素を混へたらしく、原作の認定出来るのは、「奇絶怪絶!! 飛来の短剣」が「アルミニウムの短剣」“The Aluminium Dagger.”の翻案であるといふ位のところらしいが、上記田鍔訳に次ぐフリーマンの作品の紹介として、注目される。因みに、『呉田雪冤記』の書名は、文明書局関係の出版物の広告に見出されるから、同書局の出版であるに違ひない。

後者が何であるかは、目下のところ想起し得ない。高輪子爵の様な人物が登場するところを見ると、探偵小説とは名のみで、『ジゴマ』流の赤本であるかも知れない。こんな例は、拾へば幾らも見出し得ることであらう。

上に『順天時報』を引いたから、序でに当時の日系漢字新聞が、かうした風潮にどの様に対応したかについて、古いノートを繰ってみる。と、まづ、目に着くのは、『同文滬報』七三九六号（光緒二十九〔1903〕年二月四日・明治三十六年三月二日附）に掲げる「繙訳探偵小説序」と題する一文である。「獄訟者万民之命，而天下治乱之原也。獄訟平則民安，民安則天下治。獄訟不平則民危，民危則天下乱。古之聖帝明王之於獄訟，莫不兢兢然云々」に始まり、三権の分立，就中，当代に在つては司法警察制度の確立の重要性を説き，その為の便法として探偵小説を普及さすべきである。ここに「本館主筆妍雅齋主人，比来取泰西偵探小説善本訳之，逐日刊於本報副張附行，訳畢且彙而刊之，為単行本広流伝云々」と結んである。これが，如何に素早い対応の仕方であつたかは，上來縷述し来つたところに照して，明らかである。では，どの様な作品が訳載されたか。既述デュ・ボアゴベイの『決闘縁』が，その一であらうことは想像に難くないが，未だ確認出来ない。蓋し，手許のノートに記された同紙の副刊「消閑録」の抄出は，四六九号（光緒三十一年一月十日・明治三十八年二月十三日）以降のものばかりで，しかも波蘭滅亡の故事を劇本に仕立てた『流血英雄』とか，『東欧女豪傑』の影響作品と見てよい『松陵新女兒伝奇』といった政治小説が多く，肝心の探偵小説がないからである。

上海の『同文滬報』に対して，北京の『順天時報』はどうであつたか。光緒二十九(1903)年頃から三十(1904)年にかけての同紙は，経営が決して楽ではなかつたらしい。スタンダード型からタブロイド型に変わり，又旧に復するといつ

た状態を続けてゐる。が，光緒三十一(1905)年に入ると経営も安定して来たらしく，同年暮には懸賞小説募集を行つてゐる。黒岩涙香が『万朝報』で試みて成功した故智に倣つたものであるが，中国の新聞界では画期的な初の試みであつたらう。かくて，翌三十二年からは，「劄記小説」・「演東齊諧」・「東洋小説」といつた欄が設けられ，「俠美人」・「女騙」・「芭蕉翁」・「京伝記」・「沢鷺君」・「芳流閣格闘」など，川田甕江の『譚海』や菊池三溪の『訳準綺語』に収められるそれが，抜萃掲載されてゐる。さうした後を承けて，一四七五号（光緒三十二年十二月十一日・明治四十年一月二十四日）から一四八二号（同十二月十九日・同二月一日）にかけて，「偵探奇談」が掲げられてゐる。1905年のノールウェイとスウェーデンとの確執を主題にした国際スパイ小説だからオープンハイムカル・キュー乃至はアレン・アップワードあたりの作品だらうが，直訳ではなく日訳からの重訳らしい。もつとも，同紙は探偵小説に格別の力を注いでゐる訣ではなく，右に続いてナポレオン一世麾下の独眼竜將軍某を扱つた「英雄譚」や法国・黎伊孟德原作『^譯海上神童』といつた小説を，次々と掲載してゐる。『海上神童』は，英・里門德原作，馥忱訳『海上健児』（『大陸』所載）と同一書の別訳であらう。それはともかく，さうした小説の選択ぶりから見て，件の「偵探奇談」が，探偵小説的な興味から採られたものでないことが訣る。

奉天で出されてゐた『盛京時報』（光緒三十二年九月一日創刊）になると，その傾向は，少しく対称的である。同紙は，創刊後間もない頃から，「演説俄国压制家之結果並歴史」・「^{英法}英法条約与坤角」（共に掲載号忘失）といつた種類の小説が掲げられるが，やがて「偵探外交消息奇譚」（自九十三号至九十六号。自光緒三十三年一月一日至一月九日）・「偵探奇譚」（自百三十一号至百五十一号。自同二月二十五日至三月十四日），「徳皇赴法被執下獄」（自百六十四号至百七十二号。同三月二十九日至四月十日）と，国際スパイ小説を掲げること頻りである。土地柄と言ふべきか。これらの文字は，再び活字となつて陽の目を見ることはあるまいから，一つだけ抄出して見本とする。

西洋著名文学家孟巴山曰，歴史家欲知世界之事变百出言之趣味津々者，莫如読偵探歴史之所注眼。即各国所謂無政府党是（虚無党）也。此言善矣。学者以此言為瘋狂，而政治家則引以為政党。但其視無政府党，懼之如虎，

悪之如蛇，皆毫無異也。

奥国皇后葉里薩卑斯，為刺客所鎗斃，欧美各国人心惶驚，市虎之徒，乘此妄造遙言，煽惑愚民。於是義皇恒勃爾特恐禍巨測，邀集外交家警察官等，在伯也尼斯府，商榷根絕斯党之法。其時余上言云，每年給予以二万磅（二十万元），予必設法保護各国帝王，以預防若輩之行刺。嗚呼。二万金之生命保險，豈不廉哉。然衆皆不之信，唯託余以暗查無政府党情形。

（偵探外交消息奇譚）

序でを以て言へば，上記「百合花」に始まるこの種の小説は，この時期にかなり流行した。曼陀訳『竊電案 一題日英同盟電被盜案』（光緒三十三年，小説林社刊），英・白福蘭著・大妙訳『竊凶案』（競立社『小説月報』同年），羅人驥訳『外交秘鑰』（『小説林』第十一期。光緒三十四年五月）——何れも，日訳からの重訳であらう——などの流行は，さうした風潮を物語る。この風潮は，民国に入つても暫く続く。民国元年（1912），商務印書館訳印の『外交秘事』は，紫草千葉亀雄纂訳『最近外交秘密』（博文館，明治三十八（1905）年の華訳である。

却つて説く，これを要するに，当時の日系漢字紙は，本格派の探偵小説の紹介には余り熱心であつたとは言へないが，中国系の新聞には，かなり文芸記事に力を注ぎ，探偵小説なども随時掲げたものがあるらしい。上海の『時報』などは，陳冷血が主筆であつた関係から殊に熱心で，他の一般の通俗小説・詩話・評論に混へて，探偵小説も屢々掲載された。上記した陳冷血の『福爾摩斯来華偵探案』もさうであるが，『火裏罪人』（三宅青軒『火中の美人』の訳であらう）が記憶に遺つてみると，胡適氏は追想してゐる。（「十七年的回顧」）

× × × ×

如果有人問，晚清的小説，究竟是創作佔多数，還是翻譯佔多数，大概祇要約略的了解當時狀況的人，總會回答，「翻譯多於創作」。就各方面的統計，翻譯書的数量，總有全数量的三分之二，雖然其間真優秀的並不多。而中国的創作，也就在這洶湧的輸入情形之下，受到了很大的影響。

とは，阿英氏が『晚清小説史』第十四章「翻譯小説」の冒頭の一節である。或いは人あつて，如上の阿英氏の設問に倣ひ，「在翻譯小説裡，一般小説佔多数，

還是偵探小説佔多数呢」と質問するならば，筆者は，『後者が前者を凌駕するかも知れない』と答へるだらう。勿論，この場合には，虚無党小説・国際スパイ小説・冒険小説・悪党小説や伝奇小説のある種のものなど，怪奇・探偵小説的傾向のあるものは，全て含ませて頂く。とすると，少く見積つても清末小説約一千一百種の内，凡そ三分の一が翻譯探偵小説乃至は探偵小説的な要素を有つ作品であるといふことになる。これだけ多量の小説が，近々十数年の間に海外から流入したとすれば，その影響が見られない筈はない。既に，翻譯界の老手周桂笙に「上海偵探案」や「玄君会」があれば，陳冷血には「福爾摩斯来華偵探案」はじめ，翻案とも創作ともつかない虚無党小説が数多くある。傲骨の「中国偵探砒石案」・同「鴉片案」，哀民の「三大案」・呂俠の「中国女偵探」等々，それと覚しき作品の名は，阿英氏の『晚清戯曲小説目』を繰れば幾らも拾へるであらう。民国に入ると，『小説時報』（1909年9月創刊，其社）・『小説月報』

（1910年7月創刊，商務印書館）・『中華小説界』（1914年1月創刊，中華書局）といった雑誌の他に，『偵探世界』（1923年創刊，世界書局）・『大偵探』（1946年創刊，第一編輯公司）といった専門誌も生れるし，『福爾摩斯報』（1926年創刊）なる小報も誕生し，上述した程小青の霍桑もの・孫了紅の魯平もの・陸澹盦の李飛ものが大衆の人気を浴びるし，本格的な探偵小説を書いた俞天憤，「門角落里福爾斯」を自称する趙苕理も活躍する。その他，徐卓呆・王天恨・張碧梧・范煙橋・孫玉声（漱石生）・何朴齋・徐恥痕・張舎我・范佩莢・胡寄塵・馬二先生・范菊高等々，大小さまざまの大衆作家が，一度は探偵小説への挑戦を試みてゐる。だが，かうした盛況にも不拘，中国の探偵小説界は，未だ真の傑作を産んではゐない。全体としては，低調なのである。その原因には色々なものが考へられよう。近代化への立遅れは，物理・化学といった面ばかりでなく，社会科学（警察組織・刑法の制定）の面でも認められるが，何よりも注目しなければならないのは，内戦に続く抗日戦争といふ不安定な時代を経て来たことであらう。「娯楽としての殺人」や謎解きに心を遣るには，何よりも民生の安定が必要なのである。

因みに，清末の文学は，韓国文壇に影響し，韓国新文学の胎動を促す。1912年，京城の東洋書院から刊行された「小説叢書」は，装幀からして商務版『説

部叢書』に仿ふものであるが、同叢書に収める関澹鎬訳『指環党』や某訳『一万九千磅』は、何れも華訳から韓訳されたものである。従って、『指環党』の如きは、原書（フランス語）から英訳→日訳→華訳→韓訳と重訳されたことになる。涙香物の韓訳には、他に李相協訳『貞婦怨』（涙香訳『捨小舟』）、何夢・李相協訳『海王星』（涙香訳『巖窟王』）、関泰瑗訳『哀史』（涙香訳『噫無情』に拠るといふ）などがあるが、それらの比較研究は、今後に遺された課題であらう。

（なかむら ただゆき）

〔附記〕

- I). 本稿を執筆するに際し、資料の蒐集に、印刷・校正に、樽本照雄君から多大の御高配を忝うした。銘記して謝意を表す。
- II). 邦訳されたディック・ドノヴァンの作品として、次のものがあることを、中島河太郎氏から御教示頂いた。

- (1) クキンスフェリ事件 『新青年』 大正十三年三月
 (2) 黄星章 同 同年八月
 (3) 罽覬盃 同 同十五年四月

- III). 又、シカゴ大学 Far Eastern Library の馬泰来氏からも、次の教示を得た。

来近日重編林紓翻訳小説書目、復考出原著三種、想亦先生所楽聞。

一、柯南達利 Arthur Conan Doyle 之“電影樓台”為 The Doing of Raffles How.

二、其“蛇女士伝”即 Beyond the City.

（此二種附原著及林訳首頁書影）

三、林氏亦嘗訳 Nick Carter 小説。此即尼可拉司 Nicholas Carter 之“焦頭爛額”。是書包括小説三篇：“豹伯対象”・“徳魯曼”及“火車行切”。“豹伯対象”即 The Dumb Witness., 另外二篇因乏原書，未能考出。（Chicago 大学所蔵 The Dumb Witness 破残甚，不克複製影）。

末筆ながら、中島・馬二氏の厚情に深謝する次第である。

賽金花アルバム

67頁左	魏紹昌編『嘆海花資料』1962
68頁70頁	張次溪編『靈飛集』1939
67頁右69頁下71頁上	『賽金花本事』1934
69頁上	『真美善』6巻2号1930
71頁下	Grand Larousse 1964
72頁	魏紹昌氏提供



少女時代



若い頃